
真・恋姫†無双～四神姫ガンダム共闘編～

烈火竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双〜四神姫ガンダム共闘編〜

【Nコード】

N5075M

【作者名】

烈火竜

【あらすじ】

新たなガンダム、孫権ガンダム参戦！

そして、恋姫とガンダムの共闘が悪を討つ！

第零席 孫権ガンダム、獣神姫に出会うのこと（前書き）

お待たせしました。

まずは三璃紗世界から始まります。

第零席 孫権ガンダム、獸神姫に会うこと

此処は劉備ガンダム、曹操ガンダム、呂布トールギスがいた三璃紗世界。

そして此処は轟の都。

孫権ガンダムが治めている。

【書斎】

書斎に何かの設計図を見ていたのは、孫権ガンダム。

三侯の魂を受け継ぎ、劉備ガンダムと共闘した侠である。

孫権ガンダム

「……ふーん、新しい『強襲母艦』はこーゆう仕組みか」

どうやら、新型の強襲母艦の設計図を検討していた。

すると、飾ってあった孫家に伝わる『虎錠刀』が震える。

孫権ガンダム

「ん！」

孫権ガンダムは気づいて、虎錠刀を抜く。

孫権ガンダム

「どうしたんだ？」

すると、刀身が輝く。

孫権ガンダム

「わっ！」

思わず、離してしまう。

輝く刀身から何かが現れる。

それは三璃紗世界の住人とは異なる者の姿だった。

虎を象った鎧を身につけた人間の女性だった。

孫権ガンダム

「な、何なんだ！？」

女性は目を開き、孫権ガンダムを見る。

???

「……貴殿が、『虎暁』を受け継ぎしガンダムか？」
孫権ガンダム

「あ、あなたは？」

???

「我が名は『獣神姫』」

孫権ガンダム

「獣神姫？」

獣神姫

「我はこの虎錠刀を通じて、そなたと話している」

孫権ガンダム

「は、はぁー…」

獣神姫

「実はそなたを三侯として頼みがある」

孫権ガンダム

「頼み？」

獣神姫

「異世界の三璃紗である『恋姫』世界に来てほしい」

孫権ガンダム

「異世界の三璃紗？」

獣神姫

「そこはこの三璃紗と同じだが、住んでいる者達はそなた達とはまったく違う人間が住んでいる」

孫権ガンダム

「まったく違う人間？」

獣神姫

「その姿は我と同じなのだ」

孫権ガンダム

「そうですか」

獣神姫

「さらにお主達と同じ名を持つ者達もある。すべては女だ」

孫権ガンダム

「俺達と同じ名を持つ女達！？」

獣神姫

「その者達を『恋姫』と呼ぶ」

孫権ガンダム

「恋姫……。それで、何故俺にその世界に来てほしいんだ？」

獣神姫

「……実はある邪悪なものが恋姫世界を我がものにしようと企んでいる」

孫権ガンダム

「邪悪なもの？」

獣神姫

「そのものはある妖術師と手を組み、恋姫世界の住人を苦しめている」

孫権ガンダム

「それは酷いな」

獣神姫

「さらに三璃紗で死んだ者達の魂を利用して、『闇の武人』を作り出している」

孫権ガンダム

「……闇の武人」

獣神姫

「闇の武人を使って、劉備ガンダム、曹操ガンダムの命を奪おうとしている」

孫権ガンダム

「劉備と曹操がいるのか!？」

獣神姫

「そうだ、二人は力の影響で恋姫世界にやって来て、自分と同じ名を持つ者達と居る」

孫権ガンダム

「……そうなのか」

獣神姫

「虎暁の魂を受け継ぐ者よ、我と共に恋姫世界に来るか？」

孫権ガンダムは考える。

孫権ガンダム

「……しかし、この轟を収めなければならない。此处を離れる訳には……」

???

「話は聞かせてもらったぜよ」

孫権ガンダムと獣神姫は驚く。

そこに、甘寧ケンプファー、呂蒙ディジェ、太史慈ドム、陸遜ゼータプラスがいた。

孫権ガンダム

「お前達いつの間に」

太史慈ドム

「書斎から光が輝くのを見て駆けつけました」

甘寧ケンプファー

「それで、そのおぼちゃんの話聞いたぜよ」

獣神姫

「おぼちゃん（怒）」

陸遜ゼータプラス

「孫権陛下、行って来て下さい！」

呂蒙ディジェ

「留守はしっかり守るからよ」

孫権ガンダム

「……しかし」

太史慈ドム

「劉備殿には恩があります」

陸遜ゼータプラス

「陛下も本当は行きたいんでしょう？」

呂蒙ディジェ

「それに俺らの同じ名を持つおなこの危機じゃねえかよ」

甘寧ケンプファー

「留守は任せるぜよ」

孫権ガンダムは四人の熱い視線を受け、意を決める。

孫権ガンダム

「わかった。獣神姫殿、俺は行きます」

獣神姫

「……頼む」

獣神姫は頭を下げる。

甘寧ケンプファー

「頭を上げるぜよ、おば……」

獣神姫は甘寧ケンプファーの首もとに刃を向ける。

獣神姫

「……誰がおばちゃんだ、あゝん？」

甘寧ケンプファーを殺意を込めて睨む。

甘寧ケンプファー

「すみませんでしたぜよ！」

即座に土下座する。

全員、獣神姫の凄さを感じる。

特に甘寧ケンプファーは一番に感じるのだった。

こうして、孫権ガンダムは恋姫世界に旅立つこととなった。

次回に続く。

第零席 孫権ガンダム、獣神姫に出会うこと（後書き）

長めに書けました。

『真・恋姫＋無双＋ガンダムと一緒にわわわんで、ドッキリー』
もまだまだ続きますので、よろしく願います。

特別第零席 三璃紗の俠達、醜く争うのこと（前書き）

あのキャラ達が登場します。

特別第零席 三璃紗の俠達、醜く争うのこと

関羽ガンダム

「遂に『真・恋姫†無双〜四神姫ガンダム共闘編〜』が」

張飛ガンダム

「始まったぜ！」

ポーズを決める。

関羽ガンダム

「さて、何故我ら二人がいるかというと」

張飛ガンダム

「お知らせにきた」

関羽ガンダム

「なんと我ら二人が」

張飛ガンダム

「質問コーナーの司会を務めることになった！」

関羽ガンダム

「この小説に関する質問は我らが答えます」

張飛ガンダム

「質問する時は『真・恋姫†無双〜ガンダムと一緒にわわ〜んで、ドッキリ〜』と『真・恋姫†無双〜四神姫ガンダム共闘編〜』を使い分けてほしい。紛らわしいようだが、気をつけてくれ！」

関羽ガンダム

「さらにゲストに恋姫達を迎える予定です」

張飛ガンダム

「たまに特別ゲストもあるがな」

関羽ガンダム

「というわけで、よろしく……」

???

「ちよつと待った!」

張飛ガンダムと関羽ガンダムは驚く。

夏侯惇ギロス

「質問の問いの司会の務めは」

夏侯淵ダラス

「俺達がやるぜ!」

夏侯兄弟が乗り込んでくる。

張飛ガンダム

「て、てめーら!」

関羽ガンダム

「何を急に……」

夏侯淵ダラス

「それは……」

夏侯惇ギロス

「出番が欲しいからだ!」

……。

夏侯惇ギロス

「じゃなく、曹操ガンダムを応援する為だ!」

張飛ガンダム

「いや、明らかに本音を言っただろ」

夏侯淵ダラス

「……兄者」

夏侯惇ギロス

「そ、曹操ガンダムが向こうで頑張っているんだ！俺達も頑張って司会を務めようとだな……」

関羽ガンダム

「頑張っているというより、立場をわきまえずに向こうの曹操殿の屋敷でふんぞり返っているぞ」

張飛ガンダム

「しかも、『居候』って言われているぜ。詳しくは『真・恋姫†無双』ガンダムと一緒にわわ〜んで、ドキリ！〜』を読んでみな」

夏侯兄弟は『真・恋姫†無双』ガンダムと一緒にわわ〜んで、ドキリ！〜』を読んでみる。

夏侯惇ギロス

「だ、だははははは！元気そうじゃねえか」

夏侯淵ダラス

「コレが恋姫の曹操か……」

張飛ガンダム

「感心してる場合じゃねえだろ」

夏侯淵ダラス

「た、確かに……」

夏侯惇ギロス

「ならば、なおさら俺達が司会を務めて、曹操ガンダムの立場を…

…」

????

「まっちゃり！」

張飛ガンダム

「こ、このなまりは！？」

現れたのは、

甘寧ケンプファー

「その司会の役目」

呂蒙ディジェ

「俺達が務めさせて貰うぜ！」

甘寧ケンプファーと呂蒙ディジェだった。

張飛ガンダム

「ちよつと待て！お前らは前回出たる！」

甘寧ケンプファー

「たった一回きりで、満足するはず無いぜよ！」

呂蒙ディジェ

「陛下の門出を祝って、俺達も活躍を……」

関羽ガンダム

「その必要無い！司会是我ら二人でやる！せつかくの出番の機を逃すか！」

張飛ガンダム

「……さりげなく本音を言っちゃてるよ」

夏侯惇ギロス

「いや、俺達がやる！」

甘寧ケンプファー

「俺らがやるぜよ！」

関羽ガンダム

「渡せるか！（怒）」

こうして俠達は、醜く争うのだった。

終わり。

特別第零席 三璃紗の俠達、醜く争うのこと（後書き）

という訳で、どのコンビを司会にするべきか、投票で決めたいと思います。

どのコンビにしてほしいのかを、感想の一言かメッセージに書いて送って下さい。

締め切りは次の【質問コーナー】までです。

第零席（その2） 曹操ガンダム、焰神姫に知らされるのこと（前書き）

『恋姫』世界でも、四神姫が登場します。

第零席（その2） 曹操ガンダム、焰神姫に知らされるのこと

【曹操ガンダムの部屋】

凧

「それでは曹操ガンダム様、お休みなさい」
曹操ガンダム

「うむ、ご苦労であった」

凧は曹操ガンダムに挨拶をして、退室する。

曹操ガンダムは一息つき、椅子に座る。

机にある酒を杯に入れて飲み始める。

曹操ガンダム

「……向こうはどうしているだろうな」

曹操ガンダムは月を眺めながら、三璃紗世界のことを思い出す。

すると、曹操ガンダムの愛刀にして、三候の宝剣『星凰剣』がカタカタと動き出す。

曹操ガンダムは驚く。

星凰剣に触れると光り輝く。

曹操ガンダム

「な、なんだ!？」

光から人の姿が現れる。

それは紅く鳥を象った鎧を身につけた、金髪の女性だった。

曹操ガンダム

「何者だ？」

???

「我が名は『焰神姫』。この星凰剣を通じて話をしている」

曹操ガンダム

「焰神姫？」

焰神姫

「貴殿が三璃紗の三候の一人『雀瞬』の魂を受け継ぐ者か？」

曹操ガンダム

「余が『雀瞬』を受け継ぐ者……」

焰神姫

「知らなかったのか？」

曹操ガンダム

「いや、確信していた。なぜなら玉璽に選ばれし者だからな」

焰神姫

「……ふっ、随分自信家だな」

曹操ガンダム

「それで、その焰神姫が余に何か用か？」

焰神姫

「貴殿に伝えなければならぬことがある」

曹操ガンダム

「伝えなければならぬこと？」

焰神姫

「この世界を我がものにしようとする邪悪な者がある」

曹操ガンダム

「……もしや干吉か？それとも……」

焰神姫

「闇の化身だ」

曹操ガンダム

「……やはり倒れていなかったか」

焰神姫

「奴らは利害が一致し、闇の化身と干吉は手を組んだ」

曹操ガンダム

「奴らの利害とはなんだ？」

焰神姫

「『怨差』だ。これは『太平妖術』の妖力になり、『闇』ともなるのだ」

曹操ガンダム

「……闇」

焰神姫

「闇とは、『怒り』『苦しみ』『憎しみ』『悲しみ』『絶望』『欲望』『恐怖』で生み出される負の力だ。闇の化身はこの世界が生み出された闇を取り込んでいるのだ」

曹操ガンダム

「ちよつと待て。そのような負の力はこの世界に……」

焰神姫

「そうだ、この世界に溢れている。闇の化身が急激に活動できるのは、この世界の人間が生み出す『闇』のおかげだ」

曹操ガンダム

「……しかし、この世界の曹操は世の平和にしようと……」

焰神姫

「その為に他者を葬り、兵達の屍を乗り越えている。……残念ながらこのやり方も闇を生み出している。貴殿もそうであるっ？」

曹操ガンダムは黙り込む。

焰神姫

「……確かに世に憂いを求めている者達もいる。かつての私達もそうだった」

曹操ガンダム

「私達？」

焰神姫

「私の他にもいた。『戦神姫』と『獣神姫』。そして……」

曹操ガンダム

「そして？」

焰神姫

「……話が逸れた、止めよう」

曹操ガンダムは何かあると感じたが、焰神姫の浮かない顔を見て、あえて聞かないことにする。

焰神姫

「貴殿の前に現れたのはこのことともう一つのことを知らせにきた」
曹操ガンダム

「もう一つ？」

焰神姫

「近いうちに獣神姫が孫権ガンダムを連れてくる」

曹操ガンダム

「孫権ガンダムを連れてくる！？」

焰神姫

「孫権ガンダム殿は事情を知り、承諾してくれた。あの者はこの世界の孫一族のところに着く予定だ」

曹操ガンダム

「何故、三璃紗の孫権まで連れて来るのだ？」

焰神姫

「どうしても三璃紗の三候の力が必要なのだ。……まだ詳しくは言えぬが、干吉の他に闇の化身と手を結んでいる者があるのだ」

曹操ガンダム

「まだいるのか？」

焰神姫

「それが何者なのかはわからん。なぜなら別の世界からきたのだ」

曹操ガンダム

「別の世界からきた！？」

焰神姫

「その者は、三璃紗世界に死んだ者の魂を持ち出したのだ」

曹操ガンダム

「何！？そうか、その魂を元に闇を注いで……」

焰神姫

「闇の武人を作り出したのだ」

曹操ガンダム

「なるほどな。これで闇の武人の謎を解けた」

焰神姫

「奴の力はまた強大になってきている。我らも力を貸す。だから、闇の化身倒してくれ」

曹操ガンダム

「無論そのつもりだ。奴を野放しにすれば、華琳の霸道どころかすべてが終わりになるからな」

焰神姫

「そうか、引き受けてくれるか」

曹操ガンダム

「勘違いするな。別におぬしの為には無い。……華琳の為にやるのだ」

焰神姫

「それでも構わない。感謝する」

曹操ガンダム

「こちらこそ、闇の化身のことを知らせてくれたことを感謝する」
焰神姫

「……それにしても華琳の、もう一人の曹操の為にやってくれるとは……。おぬしはもう一人の曹操のことが好きなのか？」

曹操ガンダム

「ああっ、好きだ」

焰神姫

「ほう」

曹操ガンダム

「己の誇りに合うように努力を怠らず、己の信じた道を突き進む。そして理想をなりより想う華琳に惚れた」

焰神姫

「……恥ずかしくないのか？」

曹操ガンダム

「恥ずかしがっては理想は掲げれん」

焰神姫

「……はっはっはっはっはっはっ。流石は覇道を突き進む侠だ。お前が選ばれて良かった」

曹操ガンダム

「笑うのは構わんが、内緒にしてくれないか？」

焰神姫

「なぜだ？」

曹操ガンダム

「……華琳が恥ずかしがる。それに、死んだ妻にも悪い」

焰神姫

「……わかった。我の心の奥に閉まっておこう」

曹操ガンダム

「……すまん」

焰神姫

「それでは」

焰神姫は消えようとする。

曹操ガンダム

「待て」

焰神姫

「なんじゃ？」

曹操ガンダム

「劉備ガンダムのところにも……」

焰神姫

「ああつ、あやつのところにも来るぞ。『戦神姫』がな」

焰神姫はそう言い残し、消えるのだった。

曹操ガンダム

「明日になったら、華琳に話そう」

曹操ガンダムはそう決めるのだった。

次回に続く。

第零席(その2) 曹操ガンダム、焰神姫に知らされるのこと(後書き)

劉備ガンダムのところに、『戦神姫』がやって来る。

どんな邂逅になるのだろう。

第零席（その3） 劉備ガンダム、戦神姫に援軍の策を授かるのこと（前書き）

いよいよ戦神姫の出番です。

第零席（その3） 劉備ガンダム、戦神姫に援軍の策を授かるのこと

【劉備ガンダムの部屋】

布団にまるまる被って眠る劉備ガンダムのいびきが聞こえる。

すると、飾ってあった赤龍翔神刀と青龍烈斬刀が輝き出す。

輝く光から女性が現れる。

女性はピンク色の長髪で龍を象った鎧を着ていた。

???

「……眠っている」

女性は起こそうとする。

???

「起きて下さい」

劉備ガンダムは起きない。

???

「お願いです」

劉備ガンダムはそれでも起きない。

???

「お願い、返事をして」

ぷ~~~~~っ

おならで返事をする。

女性は怒る。

???

「……むん！」

女性は念じると、赤龍翔神刀と青龍烈斬刀が動き出し、劉備ガンダムの布団に刺さる。

劉備ガンダム

「痛い！」

二刀は劉備ガンダムのお尻に刺さる。

???

「やつとおき……、って、ぎゃあああああ!!」

女性は劉備ガンダムの顔を見て驚いた。

劉備ガンダム

「だ、誰!？」

劉備ガンダムも女性を見て驚く。

???

「あなたこそ、その顔！」

劉備ガンダム

「顔？」

劉備ガンダムは片手でお尻を押さえながら、机にある手鏡を持って顔を見る。

劉備ガンダムの顔は、かなりの落書きが描かれてあった。

（どんな落書きかは読者のご想像にお任せします）

劉備ガンダム

「なんじゃこりゃあああああ!？」

劉備ガンダムは顔を拭く。

劉備ガンダム

「これは絶対馬岱の仕業だな。まったく玻璃なら許せるが、馬岱の場合はやり過ぎなんだよな……（怒）」

劉備ガンダムはブツブツと怒る。

???

「……あのう」

劉備ガンダム

「あ、先ほどは失礼しました」

???

「いえ、いきなり訪ねて、お尻を刺した私が一番失礼しました!」
劉備ガンダム

「ところで、あなたは?」

???

「申し遅れました。私の名は『戦神姫』と申します」
劉備ガンダム

「戦神姫?」

戦神姫

「あなたに話さなければならぬことがあります」

劉備ガンダム

「話?」

戦神姫は劉備ガンダムに闇の化身や干吉の話をした。

劉備ガンダム

「……干吉め、張三姉妹を利用した挙げ句に、闇の化身と手を組むとは……。許せん! 張三姉妹親衛隊隊長として奴の鼻の穴を突っ込んで、青龍衝天拳を喰らわしてやるゝ!」

劉備ガンダムは燃える。

戦神姫

「……話を戻して良いですか?」

劉備ガンダム

「す、すみません」

戦神姫

「闇の化身の力が強くなっています。獣神姫が孫権ガンダムを連れ

て来ても、勝てる見込みは少ないです」

劉備ガンダム

「孫権がこの世界に来るんですか!？」

戦神姫

「はい、三璃紗の三侯の力が必要なんです。……しかしまだ不安です」

劉備ガンダム

「……闇の化身、確かに恐ろしい奴だからな」

戦神姫

「劉備ガンダム、三璃紗からもう少し助っ人を呼ぶ方法があります」

劉備ガンダム

「えっ……」

【外】

月が輝く月夜。

桃花の花畑の真ん中に劉備ガンダムはいた。

劉備ガンダムは青龍烈斬刀と赤龍翔神刀を重ね、真・龍帝剣にする。

劉備ガンダムは龍帝剣を月に向けて掲げながら念じる。

劉備ガンダムは戦神姫の言葉を思い出していた。

戦神姫

（真・龍帝剣には龍神を祭った村にある湖の龍が宿っています。あ

の龍の卵から生まれた龍です。その龍は時空を越える力を持っています。月に掲げながら龍に念じるのです。さすれば三璃紗の俠をこの世界に連れてこれます。ただし、産まれて間もない龍なので、最低二人までです。あなたが信頼する二人を思っただ念じて下さい。さすれば必ずあなたの前に現れます」

劉備ガンダム

「俺の信頼する二人は……義弟達だ」

すると、真・龍帝剣は輝き、龍が現れる。

龍は空高く舞い上がり、月に向かっていく。

劉備ガンダムは龍が居なくなつた後も月を眺める。

劉備ガンダム

「……来てくれ関羽、張飛」

劉備ガンダムは祈るのだった。

終わり

第零席（その3） 劉備ガンダム、戦神姫に援軍の策を授かること（後書き）

果たして、劉備ガンダムの想いは通じるのか？

関羽ガンダムと張飛ガンダムは恋姫世界に来るのか！？

第一席 二人の孫権、出会いを果たすのこと（前書き）

遂に孫権ガンダム、恋姫世界に突入開始です！

第一席 二人の孫権、出会いを果たすのこと

【建業前】

孫権ガンダムは『恋姫世界』に準備をする。

甘寧ケンプファー、呂蒙ディジエ、陸遜ゼータプラス、太史慈ドムは見送りに来る。

孫権ガンダムは太史慈ドムから荷物を持たされる。

孫権ガンダム

「コレは？」

太史慈ドム

「コレは我々が集めた向こう側へのお土産の品です」

甘寧ケンプファー

「おなごが好きそうなもんばかりを急いで集めたぜよ」

呂蒙ディジエ

「コレで未来の奥方を捕まえろよ」

孫権ガンダム

「おいおい、コレは嫁探しの旅じゃないんだぞ」

甘寧ケンプファー

「しかし、向こう側のワシらはおなごじやろ？」

呂蒙ディジエ

「おなごでも、きっと凄く頼りがいがあるから、嫁にしても損は無
いと思うぜ」

陸遜ゼータプラス

「そんな人達を救って下さいね」

太史慈ドム

「お気をつけて」

孫権ガンダム

「ああ、行ってくる！」

孫権ガンダムは虎錠刀を掲げると輝く。

その輝きから獣神姫が現れる。

獣神姫

「……それでは行くぞ」

孫権ガンダム

「はい」

獣神姫は剣を掲げると、空から光り輝く輪が現れる。

獣神姫

「さあー行こう、『恋姫世界』へ」

獣神姫は孫権ガンダムの手を引っ張りながら、輪の中に飛び込む。

太史慈ドム

「陛下お気を付けて！」

甘寧ケンプファ

「侠を見せちゃり！」

呂蒙ディジエ

「向こう側の悪党なんかには負けるなよ！」

陸遜ゼータプラス

「劉備殿に会えることを祈っています！」

太史慈ドム達は力強く応援する。

【次元の空間】

まわりは輝き歪んでいる、次元の空間。

道は一方通行である。

孫権ガンダムは次元の空間を見て驚く。

孫権ガンダム

「す、凄い。コレが異世界への道か」

獣神姫

「そろそろ着くぞ。着くところは江東の地だ」

孫権ガンダム

「はい！」

孫権ガンダムは気を落ち着かせる。

先の道が輝き出す。

遂に恋姫世界に着く。

【恋姫世界】

孫権ガンダム

(……………遂に着いたのだな。此処が恋姫世界……………の空……………)

孫権ガンダムが目を開けると、そこは空だった。

孫権ガンダムと獣神姫は上空から墜ちるところだった。

孫権ガンダム

「なんでこんな上空からなの!？」

獣神姫

「心配するな、この下は江東だから問題無い」

孫権ガンダム

「いや、墜ちそうなんですけど!？目的地で墜落死したら意味が無
いつて!？」

獣神姫

「……では、健闘を祈る」

獣神姫は消える。

孫権ガンダム

「祈るより助けるよ(怒)!!」

孫権ガンダムは叫びながら、墜ちていく。

墜ちる先は……。

【孫家の屋敷の孫権の部屋】

恋姫の孫権は鏡の前に立ち、今持っている服が自分に似合うかどうか試してみる。

孫権

「今度の宴に綺麗なものを着れなんて……。本当に姉様たら」

孫権は着替える為に服を脱ぐ。

次の瞬間、

孫権ガンダム

「あああああああああ！！」

孫権

「えっ……」

ドカアアアアアン！！

空から墜ちる孫権ガンダムが屋根から天井を突き抜ける。

パラッと残骸などが落ちる。

孫権ガンダム

「あいたたた……。酷い目にあつたな……」

むにゅ……

孫権ガンダム

「あれ？なんだこの柔らかいものは？」

孫権

「……私の胸よ」

孫権ガンダム

「えっ？」

孫権ガンダムは孫権の胸を触っていた。

孫権ガンダム

「……えっーと、コレは良くない事ですよね」
孫権

「その通りよ」

バッキ！

孫権のストレートパンチが決まった！

孫権ガンダムは意識が吹き飛んだ。

【????】

孫権ガンダム

「う、うーん……」

孫権ガンダムが目覚めるとそこは、

孫家屋敷の謁見の間だった。

そこには恋姫の孫策、周瑜、黄蓋、そして胸を触られた孫権がいた。

孫権ガンダムは縄で縛られていた。

孫権ガンダム

「えっーと、コレはいつたい」

孫策

「もちろん捕縛よ。うちの妹を襲った貴方のね」

周瑜

「それで貴様は何者だ？」

孫権ガンダム

「その前にあなた方は？」

孫策

「この江東の地を治める小霸王の孫策よ」

孫権ガンダム

「ええっ、孫策！？」

孫策

「うふ、驚いた？」

孫権ガンダム

「貴女がこの世界の孫策……」

孫策

「この世界？」

孫権ガンダム

「おほん、俺は別の世界から来た孫権と申します」

孫策達は驚く。

孫権

「ふざけるな！孫権は私だ！」

孫権ガンダム

「……君がこの世界の俺か」
孫権

「この世界の俺って……」

孫権ガンダム

「俺は『三璃紗』という異世界から来たもう一人の君だ。……信じられないかもしれないがな」

孫権や孫策は戸惑うが、

周瑜

「その異世界の話、誠かもしれません」

孫策／孫権

「ええっ……」

周瑜

「実はこんな噂が話題になっています。此度の『黄巾の乱』で二人の劉備、二人の曹操が鎮めたと」

孫権ガンダム

「それはきつと三璃紗の劉備と曹操だ」

孫権

「勝手に発言するな！」

孫権は剣を向ける。

孫権ガンダム

「す、すいません」

孫策

「まあまあ蓮華、落ち着きなさい。それよりこのもう一人孫権の話、信じてもいいんじゃない？」

孫権

「何故ですか？」

孫策

「だって、その孫権の存在そのものが何よりの証拠じゃない」

周瑜

「言われてみれば」

黄蓋

「確かに」

孫権も渋々納得する。

孫策

「で、此处に來た目的は何かしら？」

孫権ガンダム

「はい、是非聞いて下さい」

孫権ガンダムは獸神姫から聞かされた話を話す。

孫策

「ふーん、そうなんだ」

周瑜

「確かに『闇の化身』や『闇の武人』の噂も聞いた事もあります」

黄蓋

「コレは一大事じゃな」

孫策

「……わかりました。その闇の化身と闇の武人に関しては嚴重に警戒するように」

周瑜

「わかりました」

孫策

「さて、後はあなたの処遇ねえ」

孫権ガンダム

「えっ……」

孫策

「うちの妹に不埒な行為を働いた罪よ」

孫権ガンダム

「いや、あれは不可抗力だったんです！ご勘弁を……！」

孫策

「そうね、どうしようかな」

孫権ガンダムは焦る。

孫権ガンダム

「あつ、そうだ！」

孫策

「何かしら？」

孫権ガンダム

「実は三璃紗のお土産があります！それでどうかご勘弁を」

黄蓋

「どうする？」

周瑜

「確かに三璃紗のお土産とやらは興味深いです」

孫策

「……わかったわ。それで許してあげる」

孫権ガンダム

「ありがとうございます」

孫策

「ただし、つまらなかったら、………これよ」

孫策は手の平を横に当て、引く。

つまり『首切り』を意味していた。

孫権ガンダム

「は、はい」

孫権ガンダムは思った。

孫権ガンダム

（この世界の策兄……いや、策姉は怖い）

どの世界の孫策も怖いと認識する。

孫権ガンダムは持たされた荷物を開けると、それぞれの名前が書かれた箱が四つあった。

孫権ガンダム

「まずはこれを」

最初に選んだのは、甘寧ケンプファアの箱だった。

蓋を開けると、

鯨の絵が描かれた布だった。

孫策

「あら、格好いいじゃない」

孫権ガンダム

「そうでしょう」

孫権ガンダムは鯨の布を広げると、

禪だった。

孫策

「……これを身に付けると？（怒）」

孫策は額に血管を浮かせる。

孫権ガンダム

「し、失礼いたしました！では別のを」

次に呂蒙ディジエの箱を選ぶ。

中には一通の紙が入っていた。

孫権ガンダム

「これは詩が書かれていますね」

孫策

「あら、聞いてみたいわ」

孫権ガンダム

「では」

孫権ガンダムは詩を読み上げる。

『侠の花道』

侠なら決めたことを曲げるなよ。

まっすぐに突き進めや。

どんな荒波にも負けるなや。

桜の上で飲む酒は天下一品よ。

股にぶら下げている魂は侠の証さ。

馬鹿やつても、道はずれぬや。

江東の海は俺らの庭だ！

それが俺ら強襲水軍。

一同は啞然する。

孫策

「何、この訳の分からない詩は」

孫策の額に血管が増える。

孫権ガンダム

「またまた失礼いたしました！！つ、次こそは」

孫権ガンダムは慌てて次の箱を選ぶ。

次は陸遜ゼータプラスのだった。

孫権ガンダム

（り、陸遜ならきつと良い物を用意している筈だ！）

孫権ガンダムは期待を込めて蓋を開ける。

孫策達は驚いた。

中に入っていたのは、

太く長く立派な男性のアレ（。んこ）だった。

下に付いている歯車を回すとくねくね動く仕組みだった。

孫策達は孫権ガンダムを軽蔑する眼差しを送る。

孫策

「……連れて行きなさい」

孫権ガンダムは衛兵に捕らわれる。

孫権ガンダム

「ちよつと待って！！そんなつもりは無かったです！！許して！！……」

孫権ガンダムは叫びながら連れて行かれる。

孫権

「……ハァー」

孫権はため息をつく、太史慈ドムの名前が書かれた箱に気づき、手にとる。

周瑜

「あの孫権、本当に首を斬りますか？」

孫策は陸遜ゼータプラスのお土産を手にとってじっくり見つめる。

孫策

「これ、いいかも」

「えっ!？」

一同は驚く。

果たして孫権ガンダムの運命は!？

次回に続く。

第一席 二人の孫権、出会いを果たすのこと（後書き）

孫権ガンダム、恋姫世界の江東の地で死す！？

甘寧ケン普法ー達はなんてもんをお土産にしたんだよ！

第一席（その2） 二人の孫権、母の墓参りに行くのこと（前書き）

お待たせしました。

二人の孫権のお話、どうぞ。

第一席（その2） 二人の孫権、母の墓参りに行くのこと

【建業】

「ズズーツ。……ハア」

甘寧ケンプファー達はのんびりとお茶を飲んでいた。

甘寧ケンプファー

「陛下は今頃、異世界に着いたじゃきの」

呂蒙ディジェ

「向こうのわしらに会えたかのう」

陸遜ゼータプラス

「陛下なら仲良くなってますよ」

大史慈ドム

「そうなるようにお土産を持たせたからな」

甘寧ケンプファー

「ああ、女子が喜ぶもんを選んだじゃき」

呂蒙ディジェ

「きつと、モテモテだろうよ」

陸遜ゼータプラス

「もう遊びに行ったんじゃないんですよ」

大史慈ドム

「そつだ、力を合わせるために行ったのだ」

甘寧ケンプファー

「そのためにも、まずは親睦を深めちよる必要があるぜよ」

呂蒙ディジェ

「一理あり」

陸遜ゼータプラス

「……そうですね。まずは仲良くするが大事です！」
大史慈ドム

「……今頃、仲良くなっていれば良いのだが……」

四人は孫権ガンダムのことを案じる。

一方、その孫権ガンダムは……

孫権ガンダム

「……………どうしよう」

孫家屋敷の地下牢に入れられていた。

原因は四つの内の三つのお土産があまりにもひどかったために孫策怒らせ、牢獄に連れて行かれる羽目になったのだ。

孫権ガンダム

「……帰ったら、蒼朧壁を放ってやる（怒）」

そう決めるのだった。

【孫権の部屋】

恋姫の孫権は大史慈ドムのお土産を見つめる。

孫権ガンダムが連れて行かれる時に、たまたま見かけて拾っていたのだ。

孫権

「……いったい何が入っているのかしら」

孫権は先ほどの失礼なお土産を思い出し、顔を赤くして不安になる。

しかし気になるので、意を決して蓋を開ける。

孫権

「……まあ」

中には蒼く輝く石で彫られた虎の彫刻だった。

孫権は手に取る。

孫権

「……綺麗」

孫権は彫刻を眺めながら、孫権ガンダムのこと考える。

孫権

「悪い奴とは思えないわ。きっとあのお土産だって悪気は無いのよね、……多分」

孫権はよく考えて、意を決する。

孫権

「もう一度彼と話し合ったほうが良いわね」

【孫策の部屋】

孫権

「失礼しま……」

孫権は驚愕した。

大喬

「……ああん」

小喬

「……いやーん」

双子姉妹の二喬が布団の上で裸になって倒れていた。
しかも顔を赤くして。

孫策

「うーん、この子達が適用か……」

孫策は陸遜ゼータプラスのお土産を眺めて呟く。
なぜか濡れていた。

孫権

「姉さま、何をしているんですか!？」

顔を赤くしてつつこむ。

孫策

「あら、蓮華。このお土産を使ってみただけど、小さかったわ。だから二喬に使ってみたのよ。そしたら、効果あったわ」

孫権

「使わないで下さいよ!!」

孫策

「……『三璃紗』世界の男達もこれぐらいの大きさかしら」

孫策は真剣に眺めて考える。

孫権

「変な詮索はよして下さい!!」

二度目のつつこみが炸裂した。

二喬を部屋から追い出した後、話を始める。

孫策

「もう一度話したい？」

孫権

「はい、あの孫権ガンダムという者は悪い人とは思えません。あのお土産だって、悪気があって渡したわけじゃないから」

孫策

「そうね、本人も驚いていたしね。それに……」

孫策はある絵を孫権に見せる。

孫権

「……これは」

それは、孫堅ゼフィランサスと孫策サイサリスと孫権ガンダムと孫尚香ガーベラと長沙四騎衆の絵だった。

孫策

「彼の荷物に入っていたわ。……もしかしたら、これは家族かもしれないわね」

孫権

「……かもしれませんね」

孫策

「……わかったわ、話しなさい。孫権には孫権かもしれないわね」

孫権

「それじゃ……」

孫策

「ただし、甘寧を護衛に付かせるわ。場所はあなたが決めなさい」

孫権

「わかりました」

孫権は絵を見て、思いつく。

【とある場所】

孫権は孫権ガンダムを連れて、森の奥に向かう。

甘寧は黙って付いて行く。

孫権ガンダム

「これからどこに行くの？」

孫権

「着けばわかるわ」

しばらく黙っていたが、会話をしたほうが良いと考えた孫権ガンダムは孫権に話しかける。

孫権ガンダム

「あのう、あのお土産は三璃紗の甘寧達が用意したもののなんです。彼らなりに考えたものなので、別に悪意があったわけでは…」

…」

孫権

「その三璃紗にも甘寧がいるの？どんな人なの」

孫権ガンダム

「荒っぽい水軍のみんなに慕われているんだ。強襲水軍を率いているんだ」

孫権

「へえー、なんかすごいのを率いているのね。会ってみたいわね。甘寧も会ってみたい？」

甘寧

「……そうですね。少し興味があります」

孫権ガンダム

「まったく正反対だから驚くよ」

孫権

「あつ、着いたわ」

孫権ガンダムが見たものは、滝と川と、一つの墓標だった。

孫権ガンダム

「……此处は」

孫権

「母の墓、孫堅の墓よ」

孫権ガンダム

「えっ」

孫権は墓の前で拝む。

孫権ガンダムもすぐに拝む。

そして、甘寧も拝む。

孫権

「……思った通り、いい奴ね」

孫権ガンダム

「そ、そうかな」

孫権ガンダムは照れる。

孫権ガンダム

「けど、いいの？母君のお墓に連れてきてくれて」

孫権

「……最初は迷ったけど、あなたなら大丈夫だと思ったからよ、二つの理由で」

孫権ガンダム

「二つの理由？」

孫権

「一つはあなたも孫権。もう一つは……」

孫権はあの絵を見せる。

孫権ガンダム

「あっ」

孫権

「とても仲良く描かれた絵を見て、信じたいと思ったのよ」

孫権ガンダム

「そうか……」

孫権

「良かったら、三璃紗世界のお話を聞かせてくれない」

孫権ガンダム

「……わかった」

孫権ガンダムは孫権と甘寧に三璃紗世界の話を語り始める。

董卓ザクとの戦いで、父である孫堅、ゼフィランサスと祖茂、パウードジムが戦死したことで、怒りに震え、天玉鎧を暴走させてしまったこと。

曹操ガンダムの叱咤と劉備ガンダムの励ましで再び戦う決意をしたこと。

水賊の胡玉ハイドラとの戦い。

合肥の戦いで兄の孫策、サイサリスが戦死したこと。

孫権は涙を流し、甘寧は感服する。

孫権ガンダム

「策兄は俺にこう言ったんだ。『お前には…俺にも父上にも無かったものがある。なによりも人の命を大切にできる優しさ。その心こそ虎錠刀の示す真の勇気。その勇気でお前は人々を癒す月になれ』」

と」

孫権ガンダムは虎錠刀を孫権に手渡す。

孫権

「人々を癒す月」

孫権は虎錠刀を眺める。

孫権

「……とても立派なお兄様ね」

孫権ガンダム

「此処の孫策姉さんとても立派な人なんだろうな」

孫権

「その通りよ。……一部は違うけど」

孫権ガンダムは首をかしげる。

甘寧

「……私はこの孫権様も人々を癒す月だと思います。勇気があって、とても優しいです」

孫権

「か、甘寧……」

孫権は赤くなる。

孫権ガンダム

「俺もそう思うよ。こんな俺の話を信じてくれているから」

孫権

「そ、そうかしら……」

孫権はさらに赤くなる。

孫権は孫堅の墓に虎の彫り物を置く。

孫権ガンダム

「あつ、『蒼月石』だ」

孫権

「蒼月石？」

孫権ガンダム

「江東の地で見つからない珍しい石なんだ。月の光に当てると、蒼く輝くんのだ」

孫権

「そうなんだ。これは大史慈って書かれた箱に入っていたの」
孫権ガンダム

「……そうか、あいつのはまともだった」

孫権ガンダムは思わず泣く。

孫権

「よ、良かったわね。これ、母の墓に置いてもいい？」

孫権ガンダム

「もちろん、良いよ」

孫権

「それじゃ……」

孫権は置いていこうとする。

????

「そんなもつたいないことをするなよ」

孫権達は突然の声に驚く。

そこに現れたのは……、

孫権ガンダム

「お、お前は!？」

胡玉ハイドラ

「ふっふっふっ、久しぶりだな」

黒く染まった胡玉ハイドラだった。

次回に続く。

第一席（その2） 二人の孫権、母の墓参りに行くのこと（後書き）

孫尚香

「ちよつと、なんでシャオの出番がないのよ！！（怒）」

作者

「この時点で、孫尚香は陸遜と周泰と一緒に袁術の所に行っているから」

孫尚香

「そんなことを言わないで、出さないよ！！」

作者

「何事も順序よく行きたいので、我慢してください」

孫尚香

「むーっ！！」

第一席（その3） もう一人の孫権、虎錠刀を使うのこと。（前書き）

お待たせしました、二人の孫権の活躍をどうぞ見てください！

第一席（その3） もう一人の孫権、虎錠刀を使うのこと。

『前回の話』

孫権ガンダムと話し合う為に、母の墓参りにいく孫権。

二人は親睦を深めると、胡玉ハイドラが現れる。

【孫堅の墓】

甘寧は孫権の前に立ち、守ろうとする。

孫権ガンダムは胡玉ハイドラの対峙する。

孫権ガンダム

「……貴様も闇の武人になっていたか」

胡玉ハイドラ

「ふっふっふっ、少し違うな」

孫権ガンダム

「何？」

胡玉ハイドラ

「それより上の『闇の武将』として生まれ変わったのだ」

孫権

「闇の武将？」

胡玉ハイドラ

「くっくくく、後でじっくり教えてやる」

孫権ガンダム

「貴様が来たのは、俺が目的か？」

胡玉ハイドラ

「貴様だけじゃない、この世界の孫家も滅ぼす」

孫権

「何ですって!？」

胡玉ハイドラ

「俺は『三璃紗』世界で二回孫家にしてやられ、最後に小娘に倒された」

甘寧

「小娘？」

孫権ガンダム

「うちの妹のことだよ」

胡玉ハイドラ

「だから俺は憎い、無念だった。そんな俺の前にあのお方、闇の化身様がこの俺を甦っさせてくれた!この孫家を滅ぼさせるという役目を下さった」

孫権ガンダム

「何だと!？」

胡玉ハイドラ

「世界は違えても、孫家は倒す!それが俺の復讐だ」

孫権ガンダム

「ふざけるな!貴様は江東を襲いかかるから退治されたのだろ!」

甘寧

「なるほど、自業自得だな」

胡玉ハイドラ

「黙れ!」

胡玉ハイドラが手を上げると、ゾロゾロと闇の武人となった手下の水賊達が出てくる。

孫権ガンダム

「・・・こいつらもか」

胡玉ハイドラ

「手始めに貴様と、もう一人の孫権を始末する。者共！」

「「「転身」」」

水賊達が転身する。

孫権と甘寧は驚く。

孫権ガンダム

「それが闇の武人の力か？」

胡玉ハイドラ

「この世界の人間共と同等になつたが、貴様には不利であろう？」

孫権ガンダム

「・・・それはどうか？」

孫権ガンダムは虎錠刀を抜く。

甘寧

「・・・私も加勢します」

甘寧も武器を取る。

孫権ガンダム

「すまない」

甘寧

「いいえ、孫家に楯突くものはこちらの敵です」

孫権

「・・・・・・・・甘寧」

その時、孫権ガンダムは孫権に武器が無いことに気づき、持っていた虎錠刀を渡す。

孫権

「えっ!？」

孫権ガンダム

「護身用」

孫権

「ご、護身用って、・・・」

孫権ガンダム

「実はもう一本剣を持ってきているんだ」

と自分の専用武器『牙王剣』に持ちかえる。

孫権ガンダム

「俺はこれで戦う」

孫権

「で、でもこれは大事な家宝でしょ!そんな家宝を私に・・・・・・・・」

「

孫権ガンダム

「君も孫家なら虎錠刀を使えるはずだよ」

孫権

「・・・・・・・・孫権」

孫権ガンダム

「君は俺を信じてくれた。次は俺が信じるよ」

孫権は赤くなる。

胡玉ハイドラ

「ふっはっはっはっ、小娘ごときに虎錠刀が扱えるはずがなからう
！」

胡玉ハイドラが高笑いすると、

シュン！

胡玉ハイドラ

「なっ・・・」

甘寧は俊足に胡玉ハイドラに近づき、刀（鈴音）を首もとに当てながら、

甘寧

「孫権様を侮辱するな！」

と強く睨む。

胡玉ハイドラはすぐに下がる。

胡玉ハイドラ

「こ、こいつを始末しろ！」

「は、ははっ！」「」

水賊達が甘寧に襲いかかるが、

甘寧

「遅い！」

ズバッ！

水賊1

「グオッ！」

一人を斬り捨て、

グサッ！

水賊2

「ゲッハ！」

右に居たもう一人を刺し、

バキッ！

水賊3

「グオッ！」

刀（鈴音）を抜く反動を利用して回し蹴りを当てる。

孫権ガンダム

「なかなかやるな」

「「「うりゃー！」」「」

他の水賊達が背後から孫権ガンダムに襲いかかるが、

牙王剣が長身に変形し、

孫権ガンダム

「てりゃあ！」

ズバツ！

「「「ギアア！」」「」

一気に斬り捨てる。

孫権ガンダム

「こつちだつて負けないぞ」

孫権ガンダムも戦う。

孫権

「二人共、凄いわ」

孫権は感心する。

そして・・・

水賊 4

「ぐえっ！」

最後の一人を甘寧が倒す。

残るは胡玉ハイドラだけになった。

甘寧

「あとは貴様だけだな」

胡玉ハイドラ

「あれだけの数を……………」

孫権ガンダム

「まだやるか？」

胡玉ハイドラ

「…………ふっ」

胡玉ハイドラはあるものを取り出す。

孫権ガンダムはそれを見て驚いた。

孫権ガンダム

「そ、それは！？」

黒い玉璽だった。

孫権ガンダム

「玉璽！？」

孫権

「玉璽つて、『三璃紗』世界の？」

孫権ガンダム

「けど、あんなに黒くはない」

胡玉ハイドラ

「これは『暗黒玉璽』だ」

甘寧

「……………暗黒玉璽？」

胡玉ハイドラは暗黒玉璽を掲げる。

胡玉ハイドラ

「闇よ、化身様に仕えし下僕を生み出せ！」

黒い霧が、闇が集まり一つの塊が生まれる。

それは蟹の形に変わり、落ちてくる。

孫権達は驚愕する。

胡玉ハイドラ

「行け！」

蟹

「キシヤアアアアア」

蟹は向かって行く。

孫権ガンダム

「来るぞ！」

蟹は鋏で攻撃する。

孫権ガンダムは孫権を抱えて、甘寧共に跳んで避ける。

孫権ガンダム

「当たったら相当に痛いな」

甘寧

「ですね」

胡玉ハイドラ

「いつまで避けれるかな？」

孫権ガンダムは離れたところに孫権を降ろす。

孫権ガンダム

「此处に隠れてて」

孫権

「………わかった」

孫権ガンダムは蟹に向かって行く。

孫権ガンダム

「やるぞ！」

甘寧

「はい！」

蟹

「キシヤアアアアア！」

孫権ガンダムと甘寧は蟹と闘う。

二人は蟹の攻撃を素早く避ける。

甘寧

「ハアッ！」

ガキーン！

蟹

「キシヤアアアアア！」

甘寧

「か、硬い！？」

甘寧は一撃を喰らわせるが蟹の硬さに驚く。

蟹

「キシヤアアアアア！」

バキッ！

甘寧

「グワッ！」

甘寧は吹き飛ばされる。

孫権ガンダム

「甘寧！」

孫権も驚く。

蟹

「キシヤアアア！」

蟹は孫権ガンダムに襲いかかろうとする。

孫権ガンダムは避けようとするが、後ろに孫堅の墓があることに気づく。

蟹

「キシヤアアアアア！」

動きの止まった孫権ガンダムを鉄で攻撃する。

孫権ガンダム

「蒼眈壁！！！」

この時、バイザー（顔部分の上と下の鎧）が合体して、蒼い球状が出現する。

ガキーン！

蟹

「キシヤアアア！？」

蟹の攻撃は効かなかった。

孫権

「な、何あれ！？！」

孫権は孫権ガンダムの蒼眈壁でさらに驚く。

蟹

「キシヤアアアアア！！！」

ガキイン！ガキイン！ガキイン！

蟹は何度も攻撃するが碎けなかった。

しかし、孫権ガンダムは焦る。

蒼朧壁にも限界があるのだ。

胡玉ハイドラ

「ふっ、時間の問題だな」

孫権

「そ、孫権ガンダム、逃げて！」

孫権ガンダム

「駄目だ！逃げると君の母上の墓が・・・」

孫権は気遣いに驚く。

胡玉ハイドラ

「はっはっはっはっはっ、馬鹿か？石ころの為に守るなんて」

孫権

「な、何ですって！！」

孫権は怒る。

孫権ガンダム

「石ころではない、これは彼女の母上の墓だ！！墓は死んだ者と残った者が会える唯一の場所だ！！ここが無くなれば、彼女達の場所が無くなる！」

孫権は嬉しかった。

そして助けたいと思ったその時、

ピカーーーーーッ！

虎錠刀が輝く。

胡玉ハイドラ

「な、なんだ！？」

胡玉ハイドラは孫権に気づく。

孫権ガンダム

「虎錠刀が！」

孫権は虎錠刀を握って感じていた。

孫権

「……………使えって言っの？」

孫権は虎錠刀を構え、蟹に向かって行く。

孫権

「母上と孫権ガンダムから離れなさい！」

虎錠刀をおもいつきり振り上げる。

ドカアアアアアン！

蟹

「キシヤアアア!？」

蟹は脇腹をおもいつきり斬られる。

胡玉ハイドラ

「な、なんだと!？」

孫権ガンダム

「今だ!」

孫権ガンダムは蒼朧壁を解き、牙王剣を構え、

孫権ガンダム

「双虎破刃!！」

牙王剣と肩の鎧と下のバイザーが合体する。

そして、孫権ガンダムの手から離れ、蟹に向かって、

斬!

と斬る。

蟹

「キシヤアアア・・・」

孫権ガンダムの双虎破刃を受けた蟹は消滅した。

胡玉ハイドラ

「・・・・・・・・チツ」

胡玉ハイドラは再び暗黒玉璽を掲げると、黒い闇が包む。

胡玉ハイドラ

「これで終わりだと思っな！」

そして、胡玉ハイドラは消えた。

孫権ガンダム

「甘寧！」

孫権ガンダムと孫権は甘寧に駆け寄る。

孫権

「甘寧、大丈夫？」

甘寧

「・・・・・・・・はい、大丈夫です。それより、お二人共お見事でした」

孫権

「私も驚いたわ。これ（虎錠刀）が輝いた時に感じて、無我夢中で・・・・・・・・」

孫権ガンダム

「きつと君の助けたい想いが虎錠刀に伝わって力を貸してくれたんだ」

甘寧

「または孫権様も認められたのかもしれませんが」

孫権は恥ずかしくなる。

その後、甘寧の身の安全のために二人は屋敷に戻った。
そして……………。

【孫家屋敷の中庭】

夜に孫権や孫策達が集まっていた。

孫権ガンダムは孫堅の墓に供えるはずだった『蒼月石』を岩の上に置く。

雲から月が出てきた瞬間、

ピカーーーーーーッ！

蒼月石が蒼く輝き出す。

孫権達は驚く。

孫策

「蒼くてとても綺麗ね」

周瑜

「本当に珍しいですね」

孫権と孫権ガンダムはゆっくり見る。

孫権ガンダム

「ありがとう、孫権」

孫権

「……………蓮華よ」

孫権ガンダム

「えっ？」

孫権

「私の真名よ。真名は親しい者でしか呼べない名前。……………」

孫権ガンダム

「……………わかったよ、蓮華」

二人は笑う。

孫策

「それじゃ、私も『雪蓮』って呼んで」

孫権ガンダム

「わっ!？」

孫策は孫権ガンダムに抱きつく。

孫権ガンダム

「わ、わかったよ、雪蓮」

雪蓮

「お姉様が抜けてるわよ」

雪蓮は孫権ガンダムの頭をグリグリする。

孫権ガンダムは痛がり、蓮華は止める。

周瑜や他の者たちはその様子を見て、笑う。

こうして孫権ガンダムは孫家の仲間入りを果たした。

終わり。

第一席（その3） もう一人の孫権、虎錠刀を使うのこと。（後書き）

今後の二人の孫権を応援して下さい。

登場人物紹介（孫家・轟編）

（轟の登場人物）

《孫権ガンダム》

江東の『轟』を治める皇帝。

優しく家族想いの侠なので、家臣や民からの信頼が厚い。

獣神姫から、友である劉備ガンダムの危機を知り、恋姫の世界にやって来る。

《太史慈ドム》

主孫策サイサリスの亡き後、孫権ガンダムに使えている武将。

『蒼月石』をお土産にすると、乙女心を理解している。

《陸遜ゼータプラス》

周瑜ヒャクシキ亡き後、提督になった若き武将。

周瑜から学んだお陰で知識が高い。

お土産も、相手が女性ということで、女性の喜びそうなもの（いやらしい玩具）を選んだ。

《甘寧ケンプファー》

気っ風の良い兄貴武将。 孫権を皇帝と呼ぶほど認めている。
鯨が好きなので、鯨にちなんだお土産（襪）を選んだ。

《呂蒙ディージェ》

同じく、気っ風の良い兄貴武将。 孫権に嫁が来ても良いほど認めている。
知識があるので、女性の喜びそうな歌（男らしい？）をお土産に選んだ。

「呉の登場人物」

《孫権「蓮華」》

孫家の次女。 一見融通が効かないように見えるが、本当は心根が優しい少女。

最初は孫権ガンドムを警戒していたが、接するうちに心の優しさを知り、信頼する。

《孫策「雪蓮」》

孫家の当主にして、蓮華の姉である恋姫。 戦と酒にはめっぽう強い。 孫権ガンドムを本当の弟ように可愛がっている。

《周瑜「冥琳」》

雪蓮の親友以上の想いを秘めている軍師。

孫権ガンダムの方に、一目置いているもよう。

《黄蓋「祭」》

孫家の古参の恋姫だが、本人はまだ若いと言っている。

《甘寧「思春」》

孫家の親衛隊隊長を務めている恋姫。

孫権ガンダムの実力と優しさを知り、敬意を評している。

《大喬・小喬「???」》

雪蓮と冥琳に付き従う双子の恋姫。

特技は歌である。

〔悪役〕

《胡玉ハイドラ》

三璃紗世界で、孫尚香ガーベラに倒されたが、恋姫の世界で、闇の武将として蘇った。

世界は違えとも、孫家を憎んでいる。

終わり

オリジナル登場人物紹介（前書き）

今回は2話連続です。
短いですが。

オリジナル登場人物紹介

闇の化身

CV 飯塚昭三

『恋姫』世界を『闇』で覆い尽くそうと暗躍している謎の存在。
『闇』と『三璃紗の魂』を使つて、『闇の武人』を作り出して、劉備ガンダムや恋姫達を狙う。
言うことを聞かない者や利用価値が無い闇の武人は容赦なく切り捨てる。

すべてを跡形もなく燃やす『地獄の業火』を使う。

戦神姫

CV 藩恵子

正義の龍の力を得ている女性。容姿は桃香に似ている。（本人よりしっかりしている）

正義を司り、闇を切り裂く。

焰神姫

CV かないみか

炎の鳥の力を得ている女性。容姿は華琳に似ている。（本人より背が高い）

理想を司り、闇を焼き尽くす。

獣神姫

CV 佐久間レイ

月の虎の力を得ている女性。容姿は蓮華に似ている。（髪は蓮華より長い）
勇気を司り、闇を打ち砕く。

オリジナル登場人物紹介（後書き）

三人のCVは実は歴代ガンダムヒロインを務めた声優です。そして、闇の化身のCVはリュウ・ホセイを務めてました。

ちなみに今回出てきた蟹のモデルは蟹に似たグラブプロです。

特別第一席 孫策、初ゲストに選ばれること（前書き）

遂に質問コーナーが始まりました。

特別第一席 孫策、初ゲストに選ばれるのこと

張飛ガンダム

「さあー、始まったぜ」

関羽ガンダム

「質問コーナー」

わー！わー！わー！

張飛ガンダム

「へっへっ、票は完全に」

関羽ガンダム

「我らの圧勝だ！」

張飛ガンダムと関羽ガンダムは喜んで高ぶる。

????

「ハイハイ嬉しいのはわかるけど、ちゃんと仕事したら？」

「「えっ？」」

登場したのは【恋姫】の孫策だった。

関羽ガンダム

「おおっ、これは失礼した」

張飛ガンダム

「初ゲストは恋姫の孫策だ！」

孫策

「よろしく」

関羽ガンダム

「では、拙者が質問を読み上げましょう。ペンネーム【白き光黒き闇】殿の質問『三国伝の原作に「戦神決闘編」が乗っていましたか、もしかしてそのシリーズの主人公だった馬超ブルーデステイニーや孟獲ガンダムも登場するのですか？

玉璽で三候の力が目覚めた劉備ガンダム達の強化形態は出るのはいわゆるありますが、もしかしてこのシリーズで烈火竜さんが考えたオリジナルキャラクターが登場したりして！？

ちなみに僕のこの前「戦神決闘編」全巻買いました。

他に「BB戦士三国伝」のテーマソング【三璃紗伝説】もこの作品の挿入歌として入っていますか？」・・・・・・長かった」

孫策

「・・・・・・なんか質問とは関係ないことも書かれてあったわね」

張飛ガンダム

「これじゃあ要点がわからないぜ」

関羽ガンダム

「この者は感想書くたびにリクエストという頼み事を多くしているらしい。しかもかなり多く」

張飛ガンダム

「たつく、リクエスト頼むくらいなら自分で書けば良いだろうに」

孫策

「まあまあ、気持ちはわかるけど毎回読んでくれる読者よ」

関羽ガンダム

「うむ、質問は答えておこう。馬超ブルーデステイニーも孟獲ガンダムは登場しません。オリジナルキャラクターは登場するかどうかは秘密。そして挿入歌は入っております」

張飛ガンダム

「納得したか？」

関羽ガンダム

「後、作者のメッセージもございませうのでお聞きよ」

孫策

「自分なりの考えがあるのであまりリクエストをしないで下さい。
次質問をするときはわかりやすく要点だけを書いて下さい」

張飛ガンダム

「わかったか？」

関羽ガンダム

「次は【龍神】殿からの質問『曹操のもう一つの剣、「威天剣」はあるのですか？』」

孫策

「作者の話によると「戦神決闘編」で曹操ガンダムの炎骨刀から威天剣になったらしいわ」

張飛

「けど、作者のことだからもしかしたら出るかもしれないぜ」

孫策

「なるほど」

関羽ガンダム

「という訳で威天剣はもしかしたら出るかもしれない！」

張飛ガンダム

「また適当な……………」

孫策

「これが最後らしいわね。ペンネーム【百鬼丸】ちゃんからの質問『呂布トールギスまたは恋が、戦国BASARAの本多忠勝と戦ったら、どっちが勝つと思いますか？』……………戦国BASARA A?」

張飛ガンダム

「本多忠勝？」

関羽ガンダム

「何でも人気ゲームの最強の武将らしい」

孫策

「へえーそうなんだ……って、本編と関係ない事を持ち込まないでよ!」

張飛ガンダム

「この物語は『真・恋姫†無双〜乙女大乱〜』と『三国伝』の話だろうが!」

関羽ガンダム

「しかし、お答えしよう。……正直わからん」

張飛ガンダム

「答えになってねえよ!」

関羽ガンダム

「噂では戦国一強らしいのだが……呂布トールギスも恋殿も三国一強い」

孫策

「……確かに難しいわね」

関羽ガンダム

「答えられなかったことを深くお詫びいたします」

孫策

「これで終わりね」

張飛ガンダム

「ああっ!俺一枚も読み上げてねえじゃねえか!?ヒゲ、二枚も読み上げるなよ!（怒）」

関羽ガンダム

「す、すまん!」

孫策

「まあまあ落ち着きなさいよ。二人は本編に出る予定があるでしょ?」

張飛ガンダム

「あっ、そうか」

関羽ガンダム

「ハッハッハッ、すっかりしていた」

孫策

「次回からの登場、頑張りなさいよ」

張飛ガンダム

「まかせとけ！」

関羽ガンダム

「急いで準備をせねば」

孫策

「最初の質問コーナー、終わり」

張飛ガンダム

「また質問を待っているぜ」

関羽ガンダム

「なお、読者達の要望で司会者が交代制になった」
孫策

「ということは……」

張飛ガンダム

「次に質問コーナーをやるときは別の奴らだ」

関羽ガンダム

「次は夏侯兄弟だ！」

張飛ガンダム

「あいつらやれるか？」

関羽ガンダム

「票に負けているからな」

「「貴様ら!!」」

夏侯兄弟が乗り込んで来た。

夏侯惇ギロス

「それを言っな！」

夏侯淵ダラス

「気にしているんだぞ！」

張飛ガンダムと関羽ガンダムに襲い掛かろうとすると、

チャキン！

孫策が武器の『南海霸王』を向けて、夏侯兄弟を睨む。

孫策

「・・・・・・・・次回からやりなさい」

「「すいませんでした」」

夏侯兄弟は孫策の気迫に負けて、謝罪する。

そして張飛ガンダムと関羽ガンダムは怖がるのだった。

終わり

特別第一席 孫策、初ゲストに選ばれること（後書き）

という訳で、次回の質問コーナーの司会者は夏侯兄弟です。

第二席 董卓ザク、洛陽宮殿に現れること（前書き）

大変お待たせしました！

遂に奴らが登場します。

第二席 董卓ザク、洛陽宮殿に現れるのこと

【洛陽・洛陽宮殿】

此所は恋姫世界の都の【洛陽】で、この洛陽宮殿は朝廷の皇帝陛下が住む宮殿である。

其処へ、朝廷の將軍である、『何進』大將軍が兵士を連れて参る。

何進

「陛下の急な呼び出しとはいったいなんじゃ」

すると、

《ガチャガチャ》

「!？」

突然、闇の武人の董卓軍兵士達が何進達を取り囲む。

何進

「な、何じゃ、お前達は!？」

「ワシの兵士達じゃ」

何進の目の前に大きな存在の人物がやってくる。

何進

「な、何じゃ、お主は!？」

「ワシは、貴様に代わって、軍を仕切ることになった董卓、董卓ザク様じゃ!」

『董卓ザク』

三璃紗世界で暴虐の限りを尽くした恐るべし侠。

しかし、劉備ガンダムの活躍と、呂布トールギスに殺された。

そう、この董卓ザクは闇の武人として甦ったのだ。

何進

「董卓ザク!？軍を仕切るとは一体どういう」

董卓ザク

「貴様が知る必要は無いわ、逆賊が!」

《ガシッ!》

何進

「ぐはっ!」

董卓ザクは何進の首元を掴む。

「大將軍!!!」

《ガシッ!》

何進を助けようとするが、董卓兵士達が邪魔をする。

董卓ザク

「ぐっふふ、よく見れば消すには惜しい女じゃが、仕方が無い」

董卓ザクは何進に何かを飲ませた。

何進

「な、何を飲ませた!？」

董卓ザク

「ぐっふふ、時期にわかるわ」

董卓ザクは何進を放す。

何進

「ゴホッ!」

思わず、吐血する。

董卓ザク

「張讓よ、これでワシは大將軍か？」

「ええ」

奥から、十常時筆頭『張讓』が出てくる。

何進

「張讓、これはどういふことじゃ!？」

張讓

「貴様は朝廷に反逆しようとした、逆賊とわかりました。だから、貴様を逮捕する！」

董卓ザク

「そして、このワシが貴様の代わりに大將軍になるのだ！」

何進

「ふざけるな！貴様のような得体の知れん輩が大將軍など……」

張讓

「もう既に皇帝陛下はお決めになりました」

何進

「そんな、馬鹿な……」

董卓ザク

「実力のある者が仕切るのが、一番じゃ！ぐっはははははは……」

董卓ザクの高笑いが響いた。

【桃花村：庄屋屋敷】

劉備ガンダムはぼんやりと空を眺めていた。

劉備ガンダム

「………関羽、張飛」

劉備ガンダムは三璃紗世界の関羽ガンダムと張飛ガンダムを今か今かと待っていた。

劉備ガンダムは、戦神姫の教えで、『真・龍帝剣』に眠る龍を三璃

紗世界に解き放したのだ。

その龍が関羽ガンダムと張飛ガンダムを連れてきてくるのを待っていたのだ。

一方、もう一人の劉備である桃香は・・・

《タッタッタッタッタ・・・》

馬超／馬岱

「一に、一に、一に・・・」

桃香

「はっ、はっ、はっ、はっ、はっ・・・」

馬超と馬岱と一緒に走っていた。

己を鍛える為・・・ではなく、太り気味を気にして、必死に痩せようと運動していたのだった。

（太ったことは今で始まったことでは無いのに）

洛陽では董卓ザクが大將軍になってしまい、大変なことが起きているのに・・・。

【三璃紗世界：翔の国の成都】

此処は『成都』と呼ばれる都。

宰相の孔明を中心に関羽ガンダム達が造った『翔』中心の国である。

【馬小屋】

《いじいじ。いじいじ。いじいじ》

劉備ガンダムの義弟、『関羽ガンダム』は愛馬となった赤兎馬の身体を丁寧な藁で拭いていた。

そこへ、同じく劉備ガンダムの義弟、『張飛ガンダム』がやって来る。

張飛ガンダム

「よう、ヒゲ。赤兎馬は綺麗になったか？」

関羽ガンダム

「ああっ、この通りだ」

赤兎馬

「ぶるるん！」

赤兎馬は喜ぶ。

張飛ガンダム

「すっかりなついてくれたな」

関羽ガンダム

「うむ、曹操の元を離れてからの付き合いだからな。だいぶ経った」
張飛ガンダム

「……アニキがいなくなった日からもな」

関羽ガンダム

「……そうだな」

二人は落ち込む。

すると、空から光るものが降ってくる。

「「うん？」」

二人は光るものに気付く。

だんだんと近づき、それが『龍』であると確信した。

張飛ガンダム

「な、なんだ、ありや!？」

関羽

「近づいてくるぞ!」

《ギャアオオオオオオオオ!》

龍は飛び込んでくる。

関羽ガンダム

「うおっ!？」

張飛ガンダム

「うわっ!？」

赤兎馬

「ヒヒーン！」

関羽ガンダムと張飛ガンダムと赤兎馬は龍に飲み込まれてしまう。

龍はそのまま空高く消えてしまう。

そして、馬小屋には誰も居なくなった。

《恋姫世界の桃花村：庄屋屋敷》

桃香

「うつ、くつくつくつ……………」

桃香は腹を抑えて苦しんでいた。

劉備ガンダム

「桃香、しっかりしろ！」

桃香

「い、痛いー！」

愛紗

「姉上、しっかり！」

黄忠

「お湯よ！清潔な布を持ってきて！」

馬岱

「わかった！」

黄忠

「早産です！予断は許されません！」

馬超

「あたしも行く！」

黄忠達は急いで取りに行く。

劉備ガンダム

「医者はまだか？村には産婆は居ないのか？」

愛紗

「そうか、産婆か！」

劉備ガンダム

「俺、探してくる！」

劉備ガンダムは飛び出す。

*

《キラーン》

上空から関羽ガンダムと張飛ガンダムと赤兔馬を包み込んだ龍が現れる。

《ビューウウウウウウー!!》

龍は落下していく。

庄屋屋敷の桃香がいる部屋の屋根の上に。

《ドカアアアアアアン!》

*

愛紗達は驚愕した。

天井を突き抜け、落下した何かに。

それは関羽ガンダムと張飛ガンダムだった。

「何事」と駆け付けた黄忠と馬岱と璃々も驚愕した。

璃々

「……………劉備お姉ちゃん、双子を産んじやった!」
劉備ガンダム

「何、産まれたのか!」

劉備ガンダムは戻ってくる。

劉備ガンダム

「!？」

劉備ガンダムは驚愕した。

張飛ガンダム

「いつてて……………」

関羽ガンダム

「一体何なん……………」

関羽ガンダムと張飛ガンダムは劉備ガンダムに気づく。

劉備ガンダム

「……………関羽……………張飛」

関羽ガンダム

「……………劉備殿」

張飛ガンダム

「……………あ、兄貴」

三人は嬉しさのあまり涙を流す。

劉備ガンダム

「関羽!!張飛!!」

関羽ガンダム

「劉備殿!!」

張飛ガンダム

「兄貴!!」

三人は抱き合おうとすると、

桃香

「痛い！」

《ズコーーーーーッ!》

桃香の痛恨の叫びで思わずズッコケてしまう。

そこへ華陀と戻ってこれた趙雲が駆け付け、

「……………一体何があったんだ、この状況？」

と啞然するのだった。

次回に続く。

第二席 董卓ザク、洛陽宮殿に現れるのこと（後書き）

急ぎだったので、短いまま投稿しました。

第二席（その2） 愛紗、関羽ガンダムに「老けている」と言われるのこと（前

劉備ガンダムは遂に関羽ガンダムと張飛ガンダムと再会できた！

第二席（その2） 愛紗、関羽ガンダムに「老けている」と言われるのこと

【庄屋屋敷：大広間】

関羽ガンダムと張飛ガンダムは椅子に腰掛けながら、周りを、特に桃香達を珍しく見る。

突然やって来た華陀と連れのは関羽ガンダムと張飛ガンダムと向かいの席に座る。

張飛ガンダム

「なんだ、ぷにぷにした奴らばかりじゃねーか」

関羽ガンダム

「劉備殿、この者達は？　そして此処はいつたい？」

劉備ガンダム

「此処は『三璃紗』に似ているが、『三璃紗』ではない世界なんだ」

関羽ガンダム

「三璃紗ではない世界！？」

張飛ガンダム

「どういつ事なんだよ！？」

劉備ガンダム

「つまり……俺も二人も、そして曹操もこの異世界にやって来てしまったんだ」

張飛ガンダム

「何、曹操も来ているのか!？」

劉備ガンダム

「後でゆっくり説明するよ」

張飛ガンダム

「……ああつ」

劉備ガンダム

「それじゃ、桃香達を紹介するよ。まずは、さっき腹痛を起こしていた彼女は、この世界の劉備だ」

桃香

「劉玄德です」

張飛ガンダム

「ど、どうも」

関羽ガンダム

「初めまして」

劉備ガンダム

「しかし、いくらお腹が減っていたからって、腐ったメンマを食べるなんて……」

桃香

「だって、お腹が空いたんだもん」

どうやら陣痛ではなく、腐っていたメンマを食べて腹痛したのが、原因だった。

そして、華陀の針治療で治してもらったのだった。

趙雲

「しかし、二号殿（桃香）がメンマを好んでいたとは……だが、今度勝手に私のメンマを食べたら許さんからな」

趙雲に睨まれ、桃香は怖がった。

桃香

「は、はい、すみません！」

劉備ガンダム

「と、とにかく、晩御飯を食べれば良いじゃないか」

桃香

「……だって、太っちゃうのやだもん」

劉備ガンダムは優しく微笑みながら桃香の肩に手を置く。

劉備ガンダム

「馬鹿だな桃香。心配するなよ」

桃香

「……兄さん」

劉備ガンダム

「お前が太ったことは、今で始まったことじゃないだろう。あっはっはっはっ！」

劉備ガンダムは大笑いした途端、キレてしまった桃香が劉備ガンダムの頭をわしづかみ、握力で潰そうとする。

関羽ガンダム

「貴様！」

張飛ガンダム

「兄貴に——」

桃香

「ああん？」

「「すいませんでした！」」

関羽ガンダムと張飛ガンダムは桃香の一睨みに負け、土下座した。

劉備ガンダム

「助けて——」

愛紗

「今のは、兄上が悪いです」

周りの者も頷く。

劉備ガンダム

「そんな——あああああああああ!!」

劉備ガンダムは昇天した時、関羽ガンダムと張飛ガンダムは桃香の実力を見て、

「別の意味で凄い!」

と恐怖した。

愛紗

「……ええっ、兄上が気絶したので、私から自己紹介します」

関羽ガンダム

「兄上?」

愛紗

「私がこの世界の関羽と申す!」

関羽ガンダム

「関羽!? 拙者も関羽だぞ!?!」

愛紗

「わかっています。この世界での関羽は私なのです」

関羽ガンダム

「……なんと」

鈴々

「鈴々が張飛なのだ!」

張飛ガンダム

「何い？張飛は俺様だ！」

鈴々

「鈴々も張飛なのだ！」

張飛ガンダム

「こんなちんちくりんが張飛だと！？冗談キツイぜ」

鈴々

「そつちこそ、ちんちくりんなのだ！」

張飛ガンダム

「何だと！？」

鈴々

「やるかなのだ！？」

鈴々と張飛ガンダムは睨み合う。

愛紗

「鈴々止める！」

関羽ガンダム

「止めぬか！」

愛紗は鈴々を、関羽ガンダムは張飛ガンダムを止める。

趙雲

「……うむ、予想通りの展開だな」

馬超

「なんか似た者同士だな」

黄忠

「……ええっ」

二人の睨み合いを見て、趙雲達は苦笑する。

華陀

「……大変お取り込み中なのはわかっているが……」

朱里

「すみません、もう少し待って下さい」

劉備ガンダム

「ああ、危うく三途の川を渡りそうだった」

劉備ガンダムはなんとか意識を取り戻した。

関羽ガンダム

「劉備殿、先ほどの世界の拙者が『兄上』と呼んでいましたが……」

劉備ガンダム

「ああっ、俺は義兄だからな」

張飛ガンダム

「はっ、何を言っているんだ？　いくら義兄だからって、こいつ」

愛紗）の義兄じゃ——」

鈴々

「劉備お兄ちゃんと鈴々達は契りを結んだのだ！」

関羽ガンダム

「ああっ、なるほど……」

しばらく間を置いて、

「「ええええええっ!?!」」

と驚いた。

周りの者は二人の大声に驚いた。

張飛ガンダム

「結んだって、どういう事なんだ兄貴!?!」

劉備ガンダム

「聞いている通りなんだけど……」

関羽ガンダム

「何ゆえです?」

桃香

「えーっと、実はこの愛紗ちゃんと鈴々ちゃんと姉妹の契りを結んでいます」

愛紗

「兄上も姉上と同じ『劉備』ですので、改めて義兄妹の契りを結びました」

鈴々

「だからお兄ちゃんと呼んでいるのだ。鈴々達は義妹なのだ！」

張飛ガンダム

「……ざけんな」

鈴々

「はにゃ？」

張飛ガンダム

「ざけんな!!」

怒鳴った張飛ガンダムに劉備ガンダム達は驚く。

張飛ガンダム

「兄貴、何でこんな訳のわからねえ者と契りを交わしてるんだよ!？」

鈴々

「何なのだ!？」

劉備ガンダム

「張飛、失礼だぞ！」

張飛ガンダム

「失礼なのは兄貴の方だろ！ 俺やヒゲという義弟がいるのに、何で訳のわからねえ者と契りを交わすんだよ！」

鈴々

「訳のわからないとはどういう意味なのだ！？」

張飛ガンダム

「そのままの意味だよ。 なんだよ、こいつら？ こいつ（鈴々）とこいつ（朱里）以外は背は高いし、俺達とは違う身体じゃねえか！」

朱里

「た、確かに貴方から見れば、私達は訳のわからない者です」

馬超

「けど、あたしらから見れば、お前が訳のわからない者だぜ」

劉備ガンダム

「まあまあ落ち着け張飛！ ゆっくり経緯を話すから——」

関羽ガンダム

「劉備殿、どういう経緯があったかはわかりませぬが、拙者も張飛と同じ意見です」

劉備ガンダム

「か、関羽！？」

関羽ガンダム

「このもう一人の拙者である関羽（愛紗）殿を妹に言うのはいささか無理があります！」

愛紗

「ちょっと待たれ、それはどういう意味ですか？」

関羽ガンダム

「そのままの意味、拙者より老けていますぞ！」

愛紗

「な、何！？」

これには流石の愛紗もキレた。

愛紗

「ふ、老けているって、貴様の方が老けているだろ！」

関羽ガンダム

「いやいや、お主の方が拙者より老けている」

張飛ガンダム

「そうだぜ！ あんたとそこのおばちゃんの方が老けているぜ！」

おばちゃんとは黄忠のことを指した瞬間、大量の矢が張飛ガンダムを囲むように壁に突き刺さった。

黄忠

「うふふ、初対面の人に失礼ですよ」

怒りで威圧感を漂わせる黄忠が射たのだ。

張飛ガンダム

「す、すみませんでした、美しいお姉さん！」

威圧感に負け、張飛ガンダムは恐怖して、謝罪する。
もちろん、関羽ガンダムも劉備ガンダム達も恐怖する。

関羽ガンダム

「お、おほん。とにかく義兄妹件は認めません」

桃香

「そ、そんな」

劉備ガンダム

「そんな固いことを言わずに――」

張飛ガンダム

「兄貴、義弟より義妹の方が良いのか!？」

関羽ガンダム

「これ（愛紗）を義妹にするのはいささか無理がありますぞ!」

愛紗

「まだ言うか!」

張飛ガンダム

「おい、お前ら。とっと契りをなかったことにして、うちの兄貴を返しやがれ!」

鈴々

「む、嫌だなのだ!」

鈴々は劉備ガンダムの腕を掴む。

鈴々

「せっかくお兄ちゃんが出来たのに、離れたくないのだ!」

張飛ガンダム

「こつちだって、やっと逢えたんだ! 返してもらっぜ!」

張飛ガンダムも劉備ガンダムの腕を掴む。

鈴々

「離すのだ!」

張飛ガンダム

「そつちが離せ!」

劉備ガンダム

「イタタタタタタタ!」

鈴々と張飛ガンダムは劉備ガンダムの両腕を引っ張り合う。
二人とも馬鹿力なので、劉備ガンダムは激しく痛がる。

愛紗

「二人とも!」

関羽ガンダム

「止めぬか!」

愛紗は鈴々を、関羽ガンダムは張飛ガンダムを止める。

劉備ガンダム

「痛かった」

劉備ガンダムはホッとする。

桃香

「大丈夫、兄さん？」

張飛ガンダム

「お、お前が離さないから」

鈴々

「そ、そっちが離さないからなのだ」

張飛ガンダム

「何！？」

鈴々

「やるか！？」

愛紗

「いい加減にしろ！ 兄上が困っているだろう」

関羽ガンダム

「待て、気安く『兄上』と呼ぶな！ 拙者は認めてはいない！」

愛紗

「貴方もまだ言う気ですか？ まったく、とんだ頑固者だ」

関羽ガンダム

「ふん、頑固者でけっこう！」

互いは火花を散らして睨み合った。

黄忠

「あらあら困りましたわね」

馬超

「どつちも頑固者だからな」

華陀

「どうやら、こちらの話はこの喧嘩が終えてからではないと出来ないな」

朱里

「すみません」

趙雲

「……睨み合ってもらちがあかん。　いっそう力試ししてみてはどうだ？」

劉備ガンダム

「ええっ!？」

張飛ガンダム

「おっ、そりゃ良いな!」

関羽ガンダム

「うむ、悪くはない」

鈴々

「望むところなのだ!」

愛紗

「口で言うより、実力でわからせましょう!」

こうして愛紗と鈴々対関羽ガンダムと張飛ガンダムの力試しをすることとなってしまった。

【桃花村の外】

血に染まるような紅い被り物を見にまとった怪しい者が桃花村を見ていた。

後ろには三人の大男が立っていた。

怪しい者

「ここですか?」

怪しい者は女性の声だった。

????1

「ああ、そうだ」

????2

「義勇軍のいる村だ」

????3

「聞けば、あの黄巾の乱を沈めた二人の劉備がいるらしい」

怪しい者

「確かに手こずりそうですね。ならば、これを差し上げましょう」

怪しい者が袖から取り出したのは、暗黒玉璽だった。

????1

「こいつは？」

怪しい者

「闇の力を授けてくれる素晴らしいものです。お役に立てる筈です」

????1

「闇の力？」

????2

「凄いのか？」

怪しい者

「使って頂ければお分かりになります」

????3

「……あんたはいったい？」

怪しい者

「我が名は“司馬懿”と申します」

次回に続く。

第二席（その2） 愛紗、関羽ガンダムに「老けている」と言われるのこと（後

桃花村の中でも外でも波乱の予感が起きていた！

第二席（その3） 鈴々、爆裂大雷蛇を破ること（前書き）

さてさて、まずは誰が闘うのか、読んでみてのお楽しみに。

第二席（その3） 鈴々、爆裂大雷蛇を破ること

【庄屋敷の中庭】

『蛇矛』を構えた鈴々と、

『雷蛇』を構えた張飛ガンダムが対峙する。

少し離れた距離で劉備ガンダムと桃香は心配しながら静かに見守る。

愛紗と関羽ガンダムも同じ距離にいた。

馬超

「……………鈴々を応援してやりたいが、アイツ（張飛ガンダム）も劉備ガンダムの義弟だからな……………」

黄忠

「私もどっちを応援しましょう」

璃々

「どっちも負けるな！」

朱里

「璃々ちゃんは両方応援するんですか？」

璃々

「鈴々お姉ちゃんも劉備お兄ちゃんも優しいもん。だから、あの劉備お兄ちゃんの弟だから、きっと優しいよ」

朱里は呆氣にとられる。

趙雲

「しかし、二人の張飛の対決は見物だな」

華陀

「うむ、あの張飛ガンダムもかっこいいぜ」

馬超達も静かに見守る。

*

劉備ガンダム

「張飛、傷つけないように本気でやれよう」

張飛ガンダム

「そりゃ無理な注文だな」

鈴々

「鈴々は細かいことを気にせずに闘うのだ！」

張飛ガンダム

「・・・ぷっ、面白い奴だな。だが、手加減しないぜ」

鈴々

「望むところなのだ！」

張飛ガンダムと鈴々は武器を構える。

関羽ガンダム

「果たして、あの小娘は勝てるかな？」

愛紗

「うちの妹を舐めるな」

「「うりやあああああああ！！」」

《ガシャン！》

張飛ガンダムの『雷蛇』と鈴々の『蛇矛』がぶつかり合う。

「うりやあ！」

「はっ！」

《ガキン！ガキン！ガキン！……》

『雷蛇』と『蛇矛』の刃は激しく打ち合う。

右や左に、下から上にと、刃がぶつかるたびに火花が散る。

「「うおっ！！」」

《ガキン！ジリジリ！・・・》

武器をぶつけ、力で押し合う。

張飛ガンダム

「やるじゃねえか」

鈴々

「鈴々の力はこんなもんじゃないのだ！」

両者は一旦離れる。

張飛ガンダム

「けどな、これぐらいじゃ義妹だって認めねえぜ！」

『雷蛇』をブンブンと振り回す。

鈴々

「なら、どうしたら認めるのだ？」

負けじと『蛇矛』をブンブンと振り回す。

張飛ガンダム

「俺様に『参った』と言わせたら認めてやるぜ！」

鈴々

「わかったのだ！」

《ガキーン！》

張飛ガンダムの『雷蛇』と鈴々の『蛇矛』が再びぶつかり合う。

*

馬超

「互角だ！」

華陀

「迫力があって、燃えるぜ！」

愛紗

「どうだ、うちの妹の实力は？」

関羽ガンダム

「・・・ふつ、張飛の实力はあれだけではない」

愛紗

「何？」

劉備ガンダム

「・・・張飛、鈴々にあれだけは使わないでくれ」

桃香

「あれ？」

*

「「うりゃ！」」

《ガキイン！ガキイン！ガキイン！》

張飛ガンダム

（なんて元気が良くて、正直な太刀筋なんだ。・・・兄貴が認める訳だ）

張飛ガンダムは打ち合いながら、鈴々の武を認める。

張飛ガンダムと鈴々は武器に力を込めてぶつけると、

《バキーン!》

反動で吹き飛ぶが、持ちこたえる。

張飛ガンダム

「どうやら、本気をみせるしかないな」

張飛ガンダムは『雷蛇』を掲げると、矛に稲妻が走る。

鈴々

「はにゃ!?!」

劉備ガンダム

「待て張飛! 鈴々に爆裂大雷蛇はやりすぎだ!」

桃香

「爆裂大雷蛇!?!」

劉備ガンダム

「雷の力を使った張飛の必殺技だ!」

鈴々

「雷!?!」

劉備ガンダム

「あれに当たれば・・・」

鈴々

「おへそ取られるのだ!」

劉備ガンダム

「いや、おへそより命を取られる!」

張飛ガンダム

「心配するな、加減はする!黒焦げにはなるがな!」

張飛ガンダムはいつでも必殺技ができる体勢に入った。

鈴々

(黒焦げは嫌だなのだ。雷で黒焦げ↓雷は金属に落ちやすい↓金属・
・・・・はっ!)

この時、鈴々は思い付いた。

張飛ガンダム

「(さて、どうするもう一人の俺?)聞け!雷の雄叫びを!」

《ギョオオオオオオオオ!》

張飛ガンダムの爆裂大雷蛇が炸裂する。

愛紗

「鈴々逃げろ!」

鈴々は『蛇矛』を爆裂大雷蛇に目掛けて、投げ付ける。

張飛ガンダム

「!？」

《ギユオオオオオオオオ!!》

爆裂大雷蛇は『蛇矛』に当たる。

鈴々はその隙に張飛ガンダムに向かっていき、

鈴々

「うりゃあなのだ！」

《バキッ!》

張飛ガンダム

「ぐわっ！」

張飛ガンダムに飛び蹴りを喰らわせる。

そして張飛ガンダムは倒れ、鈴々は着地する。

劉備ガンダム達は驚愕した。

鈴々

「前に朱里は『雷は金属に落ちやすい』って言っていたのだ。だからお前の雷を、金属でできている鈴々の武器に落ちるようにわざと手放したのだ!」

張飛ガンダムは起き上がる。

張飛ガンダム

「・・・・・・・・なかなかやるじゃあねえか・・・・・・・・」

張飛ガンダムと鈴々は睨み合う。

張飛ガンダム

「・・・・・・・・ぶっ、はっはっはっ!参った」

鈴々

「えっ?」

張飛ガンダム

「義妹って認めてやるぜ」

鈴々

「・・・・・・・・やったのだ!」

鈴々は喜んで跳び跳ねる。

張飛ガンダム

「喜んでいるところ悪いけど、起こしてくれねえか?」

鈴々

「ごめんなのだ」

鈴々は張飛ガンダムを起こして、笑い合う。

劉備ガンダム達も思わず笑う。

しかし、関羽ガンダムだけは

関羽ガンダム

「・・・・・・・・あの張飛が認めた」

と驚く。

*数分後

関羽ガンダムと愛紗が対峙する。

関羽ガンダム

「拙者は張飛のように甘くはないぞ」

『鬼牙偃月刀』を構える。

愛紗

「望むところです」

『青龍偃月刀』を構える。

劉備ガンダム達は見守る。

「「いざ、尋常に・・・」」

「大変じゃあ!!」

突然の大声に、関羽ガンダムと愛紗は偃月刀を降ろす。

駆け寄って来たのは、この屋敷の主である庄屋だった。

桃香

「庄屋さん、どうしました？」

庄屋

「うわ、ここも変な奴等が!?!」

関羽ガンダムと張飛ガンダムを見て驚愕する。

劉備ガンダム

「この二人は、俺の義弟です」

庄屋

「義弟？」

愛紗

「それは後で話して、どうなされた？」

庄屋

「そうじゃ、賊じゃあ！賊が現れた！」

劉備ガンダム

「賊が！？」

【桃花村の外】

「小娘共、出てこい！」

「出てこないと、村をぶつ潰すぞ！」

「聞こえているのか？」

三人の大男が大声で呼ぶ。

そこへ、劉備ガンダム達が駆け付ける。

劉備ガンダム

「なんだお前達は？」

愛紗

「ああつ、お主達は!？」

桃香

「愛紗ちゃん、知っているの？」

鈴々

「前に桃花村を襲ってきた賊なのだ！」

劉備ガンダム

「なんだって!？」

~~~~~

この三人は、かつて（アニメ『恋姫†無双』）桃花村を襲った賊の頭達である。

~~~~~

張飛ガンダム

「兄貴、そうなのか？」

劉備ガンダム

「いや、俺は知らない」

桃香

「私も知らない」

愛紗

「知らないのは当然です。姉上と兄上がやって来る前の出来事でし

た」

鈴々

「愛紗や鈴々達が返り討ちにしてやったのだ！」

朱里

「あの時は、大変でした」

張飛ガンダム

「そうだったのか」

関羽ガンダム

「すると、この賊達はその時の仕返しに来たのか？」

劉備ガンダム

「だったら、俺も加勢する！」

劉備ガンダムは武器を握る。

賊の頭1

「待て待て、早合点するなよ」

賊の頭2

「俺らは罪人を追って来たのだ」

桃香

「罪人？」

賊の頭3

「此処へ逃げ込んだ筈だ、引き渡して貰おう」

劉備ガンダム

「・・・・・・・・そんな奴、此処に来たか？」

愛紗

「さあー・・・・・・・・」

鈴々

「やって来たのはもう一人の鈴々（張飛ガンダム）ともう一人の愛紗（関羽ガンダム）なのだ」

桃香

「正確には、お空から降ってきたんだよね」

劉備ガンダム

「その後、華陀殿がやって来た」

愛紗

「待てよ、確か連れが居たような・・・・・・・・」

朱里

「はい、いましたよ」

張飛ガンダム

「・・・・・・・・その連れが・・・・・・・・まさか・・・・・・・・」

「そうじゃ」

突然の声を挙げたのは、華陀の連れていた連れだった。

「妾のことじゃ」

被り物を脱ぐと、何進だった。

愛紗

「貴女は何進將軍!？」

劉備ガンダム

「何進將軍？」

劉備ガンダムと張飛ガンダムと関羽ガンダム以外の者は驚愕した。

何進の猫耳に。

「ぷっ、くっくっくっ・・・」

桃香達は思わず笑ってしまう。

何進

「笑うな(怒)!!」

劉備ガンダム

「・・・將軍でしたよね」

張飛ガンダム

「その耳・・・恥ずかしくねえか？」

関羽ガンダム

「・・・・・・・・可愛い・・・・・・・・」

何進

「妾だって、好きでこんな耳をしている訳ではない（怒）！！」

関羽ガンダム

「何故ですか？なかなか似合っていると思いますぞ」

何進

「妾は猫は大嫌いじゃ！！」

関羽ガンダム

「・・・・・・・・わかった！可愛いから罪に問われ、罪人となって逃げていたのですな。これが本当の『美しさは罪』」

張飛ガンダム

「いや、『美しい』と『可愛い』は違うんじゃないか？」

何進

「そんなんで罪人になったら、美しい者すべて捕らわれとるわ（怒）！！」

関羽ガンダム

「とりあえず触らせてくださらぬか？」

何進

「とりあえずとはなんじゃ（怒）！！？」

劉備ガンダム

「・・・・・・・・関羽、その耳が気に入ったのか？」

桃香

「……………気持ちにはわかるけどね……………」

「……あああああ、お前ら（怒）！！」

怒鳴ったのは賊の頭1だった。

賊の頭1

「俺らは置いてきぼりかよ（怒）！？」

賊の頭2

「話題をずらすな（怒）！！」

賊の頭3

「せっかくの真面目な場面が丸つぶれだよ（怒）！！」

劉備ガンダム

「あつ、ごめんごめん」

朱里

「続きをどうぞ」

賊の頭1

「……………その女が、罪人だ」

賊の頭2

「引き渡して貰おうか？」

何進

「待つんじゃ、妾は濡れ衣じゃ！」

賊の頭3

「黙れ黙れ！既に朝廷からの命は下されているわ！」

賊の頭3がつき出したのは、木で作られた巻物だった。

朱里は近づいて読んでみる。

劉備ガンダム

「朱里、どうなんだ？」

朱里

「……………間違いありません。確かに朝廷の印が押されています」

愛紗

「そんな馬鹿な！？何故、賊どもの手に朝廷からの命が！？」

賊の頭1

「まだわかっていねえようだな？これを持っていると言っことは、もう賊じゃあねえ」

賊の頭2

「俺らは立派な朝廷の役人なんだよ！」

賊の頭3

「俺らは、その罪人を捕らえるために此处へやって来たんだよ。大

人しく引き渡しな」

愛紗

「・・・・・・・・如何致します、兄上？」

劉備ガンダム

「むううう・・・・・・・・」

何進

「た、助けておくれ・・・・・・・・」

かつての賊の頭が朝廷の役人としてやって来たことに困惑する義勇軍。

果たして、何進の運命はいかに！？

次回に続く。

第二席（その3） 鈴々、爆裂大雷蛇を破ること（後書き）

次回で、第二席を終わらせたいと思います。

第二席（その4） 桃園の六義兄妹のこと（前書き）

桃香

「兄さん、似合う？」

卯姿になった桃香はとてもセクシーだった。

劉備ガンダム

「ああつ、とてもぽっちゃりして可愛いぞ！」

《バキッ！》

桃香の飛び蹴りが炸裂した。

今年最初の話をどうぞ。

第二席（その4） 桃園の六義兄妹のこと

鈴々と張飛ガンダムの対決後、突然やって来たのは、桃花村を襲ってきた賊の頭達。

しかも、朝廷の役人として何進を捕らえに来たのだ。

そして、関羽ガンダムは何進の頭に生やした猫耳を触ろうとしていた。

って、それは関係無いか。〔作者〕

【桃花村の前】

何進

「助けておくれ！捕まったら殺される！無実の罪で追い出された拳げ句に大嫌いな猫になりそうに、殺されるのは殺生じゃあ！」

劉備ガンダム

「無実の罪？」

何進

「“董卓”という輩に、大將軍の座を奪われ、『猫子丹』というものを飲まされたんじゃ！（泣）」

「『董卓！？』」

劉備ガンダム、張飛ガンダム、関羽ガンダムは驚愕した。

張飛ガンダム

「な、何いってやがる！奴はアニキが倒したんだぜ！」

関羽ガンダム

「いや、恐らくこの世界での董卓では？」

何進

「いや、あれは人では無かった！まるで……そう、お主たちのような似ても似つかぬものじゃった」

劉備ガンダム

「……まさか、奴も『闇の武人』として甦ったんじゃない？」

愛紗

「『三璃紗』で倒した董卓ならば充分にありえますね」

張飛ガンダム

「闇の……武人？」

関羽ガンダム

「何ですかそれは？」

鈴々

「“闇の化身”っていう悪い奴の手先なのだ！」

桃香

「この世界を闇に満たそうとしているんです」

張飛ガンダム

「ふーん、この世界にも悪い奴がいるんだな」

関羽ガンダム

「で闇の武人とは一体？」

劉備ガンダム

「屋敷でゆっくり説明しよう」

何進

「妾を助けてたもれ！（泣）」

関羽ガンダム

「助けましょう。その代わり……その耳を触らせてください」

何進

「触らせるか！（怒）」

張飛ガンダム

「助けてって言われてもどうすれば良いんだ？」

華陀

「その事については、俺が説明する。その為に此処へ訪ねて来たんだ」

劉備ガンダム

「それは大変でしたね」

桃香

「是非ゆっくりして下さい。助けくれたお礼もしたいので」

張飛ガンダム

「そつえば、俺腹が減ったな」

鈴々

「一緒にご飯を食べるのだ！」

関羽ガンダム

「では、拙者との対決は・・・」

愛紗

「食事の後にしましょう」

劉備ガンダム

「この世界の料理は旨いぞ」

張飛ガンダム

「酒もあるか？」

趙雲

「もちろんだ。特にメンマと合うぞ」

関羽ガンダム

「メンマ？」

朱里

「それでは・・・」

「戻ろう」

全員は屋敷へ戻ろうとする。

「「「ちよつと待て!?(怒)」「」」

すっかり忘れ去られてしまう“元”賊の頭3人組は大声で怒鳴る。

劉備ガンダムは「ハッ」と思い出す。

賊の頭1

「お前ら、何俺達を忘れてるんだよ!?(怒)」

賊の頭2

「前回の緊張感は何処に行った!?(怒)」

賊の頭3

「何、別の話題にして屋敷へ戻るんだ!?(怒)」

劉備ガンダム

「あ、ごめんごめん」

桃香

「盛り上がるうちに・・・」

鈴々

「話題がすっかり逸れちゃったのだ」

賊の頭 1

「お前らなゝ（怒）」

愛紗

「気を取り直して、話を戻そう。おほん、まことに朝廷の役人なのか？」

賊の頭 1

「こいつ（書状）を持っているのが、何よりの証拠じゃあねえか？」

賊の頭 2

「今の俺達はもう賊じゃあねえ、朝廷の役人だ」

賊の頭 3

「俺達に逆らえば、朝廷への反逆になるぜ。例え、あの『玉金の乱』を鎮めた“義勇軍”でもな」

「・・・はうつ！」「」「」

劉備ガンダムと女性陣（鈴々を除いて）は顔を赤くする。

張飛ガンダム

「玉金の乱？」

関羽ガンダム

「な、何ですかそれは？」

鈴々

「劉備お兄ちゃんのキ・タマが活躍した出来事なのだ」

「「アニキ〔劉備殿〕のキ・タマ！？」」

劉備ガンダム

「鈴々、恥ずかしいから止めてくれ！」

劉備ガンダムは慌てる。

朱里

「違います！正しくは『黄巾の乱』です！」

張飛ガンダム

「アニキのキ・タマって、すげえんだ」

関羽ガンダム

「真の侠でございます」

璃々

「つつん」

張飛ガンダムと関羽ガンダムは劉備ガンダムの股間を見つめ、璃々は棒で突つく。

劉備ガンダム

「璃々、股間を突かないで」

黄忠

「これ、璃々」

劉備ガンダム

「もう、あんたらのせいで話が逸れたじゃないか」

賊の頭1

「あつ、すいません………って、謝っている場合じゃあねえよ」

賊の頭2

「渡すか、渡さないかどっちなんだ？」

賊の頭達は書状を突き付ける。

劉備ガンダム

「………朱里、あれを無視するとマズイか？」

朱里

「………はい、朝廷の命は絶対です」

劉備ガンダム

「この世界の曹操殿でも無理なのか？」

朱里

「はい、仕えている身ですから」

賊の頭3

「その通りだ。あの曹操ですら逆らえない朝廷に逆らう気か？」

劉備ガンダムは悩む。

賊の頭1

「ならば、そいつを引き渡・・・」

「待って下さい！」

桃香は賊の頭達の前に立つ。

劉備ガンダム

「桃香！」

桃香

「この人（何進）は無実を訴えているんですよ！まずはことの真実を確かめてみてください！」

張飛ガンダム

「そうだぜ。何も悪いことをしていないのに、捕まるなんておかしいぜ。おばちゃんが罪人だと言う証拠はあるのか？」

何進

「誰がおばちゃんじゃ（怒）！」

張飛ガンダム

「・・・年寄り臭いから“ばあちゃん”で・・・」

何進

「もつと嫌じゃ（怒）！」

愛紗

「また話が逸れるから黙っておれ。……………間違いであれば、後悔するぞ」

賊の頭 1

「黙れ黙れ！我らは『捕らえる』という命を受けているんだ！」

賊の頭 2

「それに真実など知ったことか。こっちは命じられた通りにやりやあ良いんだよ」

関羽ガンダム

「あいや、待たれよ！貴様らはそれでも役人か？真実を明らかにして真の悪を捕らえる。それが役人……」

賊の頭 3

「うるせえな。これは朝廷の命だと言ってっているだろ？朝廷こそが『正義』なんだよ。それに逆らおうとする貴様らは『悪』だ！」

《びくり》

劉備ガンダムは怒る。

劉備ガンダム

「……………朝廷こそが『正義』？」

賊の頭 2

「そつだ、朝廷があるから国は成り立っているんだよ。貴様らのような弱い民は朝廷に従うのが、道理なんだよ」

《ぴくり》

次に張飛ガンダムと関羽ガンダムは怒る。

桃香

「……おかしいですよ。民と朝廷の人達も同じ『人』なんですよ。従うか従われるとかじゃなくて、助け合うものですよ」

賊の頭3

「けっ、知るか。いちいち他人なんか考えてたまるか。自分さえ良ければ良いんだよ」

《ぴくり》

ついに桃香達も怒る。

賊の頭1

「それより、そいつ（何進）を引き渡せ。朝廷の書状が目……」

《バキッ！》

劉備ガンダムは赤龍翔神刀と青龍烈斬刀を引き抜き、書状を切り裂く。

賊の頭達や桃香達も驚愕した。

賊の頭 1

「て、てめえ何を・・・」

劉備ガンダム

「朝廷こそが『正義』だと？従うこそが道理だと？自分さえ良ければ良いだと？それが貴様らの『正義』か！？」

賊の頭 1

「だ、だったらどうなんだ？」

劉備ガンダム

「民を救ってこそが『法』。悪を裁いてこそ『正義』。それが国を守る者の、朝廷の役人の務めじゃないか？」

賊の頭 2

「だから、朝廷こそが正しいんだよ。それに刃向かう奴らが間違っているんだ」

賊の頭 3

「そして、そんな朝廷の命に従うのが我ら役人の務めだ」

劉備ガンダム

「朝廷の命なら、罪の無い者を捕らえて裁くのか？」

賊の頭 1

「ああ、命ならば仕方がない」

劉備ガンダム

「そんな道理、そんな朝廷、俺は認めない！」

劉備ガンダムは赤龍翔神刀を賊の頭達に向ける。

桃香

「兄さん！」

桃香達は驚愕する。

賊の頭2

「刃向かう気か！？」

劉備ガンダム

「この者（何進）は、貴様らのような奴に渡さん！」

賊の頭3

「反逆だ、義勇軍は朝廷に反逆した！」

桃香は焦る。

劉備ガンダム

「義勇軍は関わり無し！反逆したのは、異世界からやって来た劉備ただ一人！」

「いや、一人じゃあね！」

張飛ガンダムと関羽ガンダムも武器を賊の頭達に向ける。

張飛ガンダム

「劉備の義弟“張飛”」

関羽ガンダム

「同じく義弟“関羽”も貴様らに反逆する！」

劉備ガンダム

「張飛、関羽・・・」

桃香

「兄さん！」

愛紗

「関羽殿！」

鈴々

「張飛！」

桃香達が駆け付けようとすると、劉備ガンダムは制する。

劉備ガンダム

「お前達は来るな！」

張飛ガンダム

「朝廷に反逆するのは、俺らだけで充分だ」

関羽ガンダム

「お主達を危険にさらせん！」

桃香達は言われた通りに大人しくする。

劉備ガンダム

「さあ、かかってこい！」

賊の頭 1

「ちび共が舐めやがって」

賊の頭 2

「ぶっ殺してやる」

賊の頭 3

「俺達は強いぜ」

張飛ガンダム

「そんじゃ、本気見せてやるか」

賊の頭 1

「ほざくな！」

賊の頭達は武器（剣、青龍刀、斧）を持って、劉備ガンダム達に襲い掛かる。

「爆裂！大雷蛇！！」

《ギョオオオオオ》

「鬼牙！百裂撃！！」

《ガガガガガガガ》

「星龍斬！！」

《ギイイイイイン！》

「くわああああ！！」

劉備ガンダム達の必殺技で、賊の頭達は吹き飛んだ。

桃香

「す、凄い！」

愛紗

「なんと速業」

鈴々

「かつこいいのだ！」

桃香達は驚愕する。

馬超

「いいぞ、やっちまえ！」

趙雲

「あれが三璃紗の関羽の力か。．．．見事だ」

璃々

「強い！」

馬超達も応援する。

賊の頭達はなんとか立ち上がる。

賊の頭1

「な、なんだこいつらは！？」

賊の頭2

「ただのちび共じゃあねえ．．．」

賊の頭3

「強すぎる！！」

張飛ガンダム

「どうする、まだやるか？」

雷蛇を突き付ける。

賊の頭1

「……………こうなったら、これを使ってやる」

賊の頭1が懷から取り出したものに劉備ガンダムや桃香達は驚愕した。

桃香

「そ、それは……」

愛紗

「于吉が持っていた……」

鈴々

「反則玉璽！」

劉備ガンダム

「いや、『暗黒玉璽』だ」

そう、黒き玉璽“暗黒玉璽”である。

劉備ガンダム

「だが、確かに反則には違いないか」

張飛ガンダム

「アニキ、あの黒い玉璽一体？」

劉備ガンダム

「あれはヤバい物だ！」

愛紗

「貴様ら、それをどこで・・・」

賊の頭1

「うるせえー！暗黒玉璽よ、俺らに力を与えてくれ！」

暗黒玉璽から黒い霧を、『闇』を発して、賊の頭達を包み込む。

「う、うがあああああ！」

「ち、力がみなぎってくるぜ！」

「これが闇の力ってやつか！？」

璃々

「こ、怖い！」

怖がる璃々は黄忠に抱きつく。

賊の頭1は、狼のような姿に、

賊の頭2は、爬虫類のような姿に、

賊の頭3は牛のような姿になる。

劉備ガンダム達は驚愕する。

関羽ガンダム

「こ、これは・・・」

劉備ガンダム

「変わったのは見かけだけではない筈だ」

張飛ガンダム

「ああ、ヤバい気を発してやがるぜ」

賊の頭

「行くぞ！」

一斉に跳び、三方に分かれて襲い掛かる。

《ガキイン！》

劉備ガンダム達はすぐに攻撃を受け止め、一人ずつ相手になる。

劉備ガンダム

「はっ！」

賊の頭 1

「ふん！」

《ガキイン！ガキイン！ビュン！ガキイン！ガキイン！ビュン！》

賊の頭1は本物の狼ように素早く攻撃を仕掛けたり、劉備ガンダム
の攻撃を素早く避けて翻弄させる。

劉備ガンダム

「なんて速さだ！」

*

張飛ガンダム

「うりゃあああああああ！！！」

《ビュン！》

賊の頭1を薙ぎ払おうとしたが、軽く避けられる。

賊の頭2

「きしやあああああ！！！」

《よろよろ》

賊の頭2は青龍刀を持つ腕を蛇のように伸ばし、張飛ガンダムに斬りかかるうとする。

《ガキイン！》

張飛ガンダムは青龍刀を薙ぎ弾く。

張飛ガンダム

「なんて奴だ！」

*

「うおおおおおおおお」

《ガキイン！ギリリリ・・・》

賊の頭3の斧と関羽ガンダムの鬼牙龍月刀が押し合う。

関羽ガンダム

「なんという力だ・・・」

*

桃香達は闇の力を得た賊の頭達を見て驚く。

趙雲

「・・・あれが『闇の力』・・・なんという恐ろしい力だ」

馬超

「ヤバいぞ！助けた方が・・・」

朱里

「しかし、手を出すと言われてます」

馬超

「そんなこと言っている場合か！」

桃香、愛紗、鈴々は強く自分の武器を握り締める。

*

《ズッ・・・》

関羽ガンダムは圧倒的に押されてしまう。

《ガキーン！》

「ぐわっ！」

関羽ガンダムは吹き飛ばされてしまい、鬼牙龍月刀を離してしまう。

関羽ガンダム

「し、しまった！」

賊の頭

「トドメだ！」

関羽ガンダムに目掛けて、斧を降り下ろすと、

《ガキン！》

「！？」

愛紗が青龍偃月刀で受け止める。

関羽ガンダム

「お、お主・・・」

愛紗

「申し訳ありません、手出しさせていただきます！」

＊

《ガキイン！》

鈴々は蛇矛で賊の頭2の青龍刀を弾く。

鈴々

「鈴々も加勢するのだ！」

張飛ガンダム

「お前・・・」

＊

桃香は劉備ガンダムの隣に立ち、剣（竜神の剣）を抜く。

桃香

「私も戦います！」

劉備ガンダム

「・・・桃香」

＊

「……だって、兄妹だから」

この時、劉備ガンダムと桃香、張飛ガンダムと鈴々、関羽ガンダムと愛紗は互いに頷き合い、共闘を決意する。

*

賊の頭3

「ふっははははは、何人増えようが、同じことだ！」

《ブンブン！》

関羽ガンダムと愛紗に襲い掛かるが二人は避ける。

*

そして、愛紗と関羽ガンダム、鈴々と張飛ガンダムは語り合う。

愛紗

「貴方に真名を預けたいと思います」

関羽ガンダム

「真名？」

鈴々

「信頼する人や大切な人に預ける名前なのだ」

張飛ガンダム

「そんな大事なもんを良いのか？」

愛紗

「・・・・・・・・貴方も」

鈴々

「兄妹なのだ」

関羽ガンダム

「・・・・・・・・承知した」

張飛ガンダム

「確かに預かったぜ！」

この時、関羽ガンダムと張飛ガンダムは愛紗と鈴々の真名を預かる。

*

愛紗の青龍偃月刀と関羽ガンダムの鬼牙龍月刀が並ぶ。

関羽ガンダム

「拙者の技についてこれるか、愛紗よ」

愛紗

「・・・・・・・・やってみます！」

二人は武器を構えて、

「「鬼牙百烈撃！」」

《ガガガガガガガガガガ！！》

「ぐわっ！」

賊の頭3は吹き飛ぶ。

*

「うりゃあああああー！」

腕を伸ばし、張飛ガンダムと鈴々に目掛けて青龍刀で薙ぎ払おうとする。

《ガシッ！》

張飛ガンダムは青龍刀を、鈴々は腕を受け止める。

賊の頭2

「何!？」

張飛ガンダム

「いくぜ、鈴々!」

鈴々

「わかつたのだ!」

一緒に腕を掴んで、ぐるぐると振り回す。

「ひええええええ!」

「「うりやあああああ!」」

と放り投げる。

*

《ビュン!ビュン!ビュン!》

賊の頭1は素早く動き、

賊の頭 1

「死ねえ・・・」

劉備ガンダム

「桃香、こいつが『ぽっちゃりデブ!』って言ってたぞ」

賊の頭 1

「へっ？」

《バキッ!》

怒った桃香は賊の頭をおもいつき殴り飛ばした。

「そんなこと言ってないのにiiiiiiiiiiii!？」

*

吹き飛ばされた賊の頭達は同時にぶつかる。

張飛ガンダム

「アニキ!」

関羽ガンダム

「受け取って下され!」

張飛ガンダムと関羽ガンダムの肩の鎧が離れ、劉備ガンダムに装着される。

そして劉備ガンダムは金色に輝く。

桃香

「兄さんが輝いている！」

「三位一体！星龍斬！」

《ドン！ドカアアアアアアアン！！》

「「「ぎゃあああああああ！！」」」

技を受けた賊の頭達は大爆発した。

【桃園】

劉備ガンダム、張飛ガンダム、関羽ガンダム、桃香、愛紗、鈴々は中心を囲むように立ち、武器を掲げた。

劉備ガンダム

「我ら六人！」

桃香

「姓は違えども兄妹の契りを結びしからは！」

愛紗

「心を同じくして、助け合い！」

関羽ガンダム

「皆で力無き人々を救い！」

鈴々

「同年同月同日に生まれることを得ずとも！」

張飛ガンダム

「願わくば同年同月同日に死せんことを！」

こうして、互いを認め合った者達は新たな義
兄妹の契りを結んだ。

終わり

第二席（その4） 桃園の六義兄妹のこと（後書き）

急ぎのためにさっさと桃園の誓いを書きました。

登場人物紹介〔義勇軍・翔〕

〔翔〕

《劉備ガンダム》

言わずと知れた主人公。

“龍帝を継ぐ者”と呼ばれる正義感が強い。

曹操ガンダムと共に恋姫の世界にやって来てしまい、義勇軍の世話になっている。

もう一人の劉備である、桃香と出会い、旅をする間に義兄妹契りを交わす。

関羽ガンダムと張飛ガンダムと再会した際に、改めて義兄妹の契りを交わした。

本人は悪気は無いのだが、よく言うてはならない事を言うては、桃香や愛紗などの恋姫達のお仕置きを受けている。

《関羽ガンダム》

劉備ガンダムの義弟で、“鬼髭の大武勇”と呼ばれるほどの武将。意外に可愛いものには目がないらしいせいか、愛紗が老けて見えることを理由に妹にすることに難色を示していた。

《張飛ガンダム》

三義兄弟の末弟。劉備ガンダムに心酔しているあまり、知らぬ

間に桃香達と契りを交わしたことに腹を立ててしまった。
しかし、鈴々の実力を知って、契りを交わした理由を領け、改めて義兄妹の契りを交わした。

〔義勇軍〕

《劉備「桃香」》

言わずと知れたもう一人の主人公。

恋姫の劉備で、義勇軍を率いている恋姫。

劉備ガンダムとの旅で正義に目覚め、平和を目指す。

劉備ガンダムが義兄であるにも関わらず、禁句（太っている等）を言えば、容赦なくお仕置きする。

《関羽「愛紗」》

『恋姫の世界』の関羽。 “黒髪 of 山賊狩り” と呼ばれているほど強い。

劉備ガンダムが義兄であるにも関わらず、禁句（年増等）を言えば、容赦なくお仕置きする。

《張飛「鈴々」》

『恋姫の世界』の張飛。 体は小さいがとても怪力で、張飛ガンダムと引つ張り間で互角を見せる。

頭は良くなさそうだが、張飛ガンダムの『爆裂大雷蛇』を、自ら

の武器を利用して打ち破る知略を見せた。

《趙雲「星」》

恋姫の趙雲で、メンマと酒とエッチなこと好きな恋姫。
華蝶仮面に変身する時はバレバレだが、劉備ガンダムと桃香には
気付かれていない。

《馬超「翠」》

恋姫の馬超。
まっすぐ過ぎる為か、暴走しやすい脳筋。
弱音を漏らさないが、おしっこは漏らす。

《黄忠「紫苑」》

恋姫の黄忠で、百発百中の弓の名手。
年齢も百発百中の歳上であるが、それを言ったものには容赦なく
射ぬく。

特に劉備ガンダムがそうである。

《諸葛亮「朱里」》

義勇軍の軍師で、高い知略で策を練って、義勇軍を勝利へ導いて
いる。

現在、エッチなことを勉強している。口癖は「はわわ」。

《馬岱「蒲公英」》

馬超の従妹で、修行の為に桃花村にやって来てはいるのだが、イタズラばかりしている。

最近では、馬超より劉備ガンダムにイタズラばかりしている。

《璃々》

黄忠の幼い娘。

三璃紗から来た劉備ガンダムが珍しい為、よく一緒に遊んでいる。
劉備ガンダムも璃々を可愛がっている。

〔朝廷〕

《何進》

朝廷の大將軍だったが、董卓ザクに追い払われた挙げ句、嫌いな猫になる薬を飲まされてしまう。

猫になることより、張飛ガンダムに「おばちゃん」と呼ばれることの方が嘆いている。

《張議》

十常侍のリーダー格。

闇の武将である董卓ザクを大將軍して何かを企んでいる。

見た目は生意気なガキンちょ。

《三人の元山賊の頭》

かつて、桃花村を襲った山賊だったが、愛紗に撃退される。

今度は朝廷の役人として、登場するが、横暴な態度で、劉備ガンダム達を怒らせ戦うことになった。

『暗黒玉璽』を使ったが、劉備ガンダム達の連携に翻弄され、
『三位一体』に倒された。

終わり

特別第二席 夏候兄弟、華陀といっしょに叫ぶのこと（前書き）

夏候兄弟、初めての司会をする。

特別第二席 夏候兄弟、華陀といっしょに叫ぶのにと

夏候惇ギロス

「これがそつくりにつ造られたクローンって奴か？」

夏候淵ダラス

「どう見ても本物にしか見えんな・・・」

夏候惇ギロス

「・・・って、始まつてるよ!？」

夏候淵ダラス

「いかにいかに!」

慌て写真をしまう夏候兄弟。

夏候惇ギロス

「し、失礼した。機駕の将の夏候惇だ」

夏候淵ダラス

「同じく夏候淵だ」

夏候惇ギロス

「そして、今回の特別ゲストは・・・」

華陀

「『ごつどうえいどおおッ!』の華陀だ、よろしく」

夏候兄弟は、暑苦しい華陀を見て、啞然する。

夏候惇ギロス

「か、変わった奴だな・・・」

華陀

「早速、質問を読み上げよう」

夏候淵ダラス

「わ、わかった。まずはペンネーム：龍神殿からの質問だ。『夏候兄弟の武器は何を使いますか？名前ありますか？後、兄弟の仲は良い方ですか？』」

夏候惇ギロス

「教えよう。我が武器は、伸縮自在の『蛇骨剛剣』！」

夏候淵ダラス

「俺のは、『鋭鐘』、『剛骨棍』、『剛鋭戟』、『鋭刃弓』、『鋭鳳』だ」

華陀

「夏候淵殿は武器は多いな」

夏候淵ダラス

「使い分けているからな」

夏候惇ギロス

「そして、もちろんの仲は良い方だ。二人合わせた技『隼鋼二重閃』が最大の必殺技だ！」

華陀

「おおつ、カッコいいな！」

夏候惇ギロス

「龍神殿、わかったかな？」

華陀

「次は、俺が読もう。ペンネーム：龍の骨殿からの質問。『零斗』質問、孟獲ガンダムが恋姫の孟獲を見たらショックを受けるか？それとも怒るか？あと夏候兄弟、俺と融合しないか？だけどお前等の意識を乗っ取る事になるけどな」『』」

夏候惇ギロス

「なんだ、この零斗の挑発するような質問は、気に入らん！そんなもん、誰がするか！（怒）」

夏候惇ギロスは怒り、『蛇骨剛剣』を抜く。

夏候淵ダラス

「落ち着け、兄者！」

夏候淵ダラスは抑える。

華陀

「まあまあ。えゝ、孟獲ガンダムは多分、ショックを受けると思うぞ。納得したかな、龍の骨殿？」

夏候淵ダラス

「ささつ、次の質問を読み上げてくれ！」

夏候惇ギロス

「……………わかったよ、たくつ。ペンネーム：ぷよ髭の人殿からの質問が3つ。『1・恋姫の偽劉備とチヨウ蝉は出てくる予定はあるでしょうか？

2・関羽ガンダムと張飛ガンダム、甘寧ケンプファーと呂蒙ディジエが、本編に出てきたので、夏侯惇ギロスと夏侯淵ダラスも出てくるのでしょうか？

3・皆が、桃香が妊娠したと勘違いだと気付く前、妊娠相手だと疑われたのは翠でしょうかそれとも……………劉備ガンダムでしょうか？

」

夏侯淵ダラス

「1は偽劉備は出す予定は無いが、チヨウ蝉は作者の考え次第だな」

華陀

「2は？」

夏侯惇ギロス

「……………それも作者の考え次第だそうだ」

夏侯淵ダラス

「3は翠だそうだ。劉備ガンダムはあり得ないそうだ。義理とは言え、妹を孕ませるような、不埒な行為はせんだろう」

華陀

「納得したかな、ぷよ髭の人殿？」

夏侯惇ギロス

「次は、ペンネーム：キクリン殿からの2つの質問。『1・小蓮達はこの時どこで何をしているんでしょうか？

2・三璃紗の何進將軍はどんな人だったんでしょうか?」この時つて、孫権ガンダムがやって来た時か?」

華陀

「袁紹殿の従姉妹である袁術殿の処へ使いに行っているらしい」

夏候淵ダラス

「2は……知らないらしい。そんなの作者でも知るわけは無い」

夏候惇ギロス

「キクリン殿、納得したか?」

華陀

「次は、ペンネーム：白き 黒き闇殿からの5つの質問。『1・烈火竜は「恋姫」と「三国伝」で出てくる武将は誰が好きですか?」

2・今月(10月)の「BBW」で三璃紗の男達が歌う新テーマソング『justice・伝説を刻め!』ですが、この新曲も、この作品の挿入歌に入りますか?」

3・劉備(桃香)が持つはずの『竜の爪』の剣はちゃんと渡っていますか?」

4・賊達が変身した怪物は、『ガンダムシリーズ』に関するMS及びMA、何らかの兵機をモチーフしていますか?後、倒された賊は生きていますか?」

5・「風雲豪傑編」の終盤で董卓ザクを止めをさした呂布トールギスが、自分でマスクを外す場面がありましたが、この作品に出ている呂布トールギスはあの時のままマスクを外した状態ですか、それとも「BBW」の様に新しいマスクを替えていますか?」1は……
……劉備ガンダムと桃香らしい」

華陀

「2は、入るそうだ。俺もこの新曲はお気に入りだぜ！」

夏候淵ダラス

「3は、もちろん渡っている」

夏候惇ギロス

「4は、別にモチーフにはしていない。賊達は、爆発したので生きていない。今まで悪さをしてきたんだ、当然の報いだ」

華陀

「5は、この世界に来る前に替えているらしい」

夏候惇ギロス

「白き光 黒き闇殿、納得したか？」

夏候淵ダラス

「ペンネーム：アラストル殿からの質問が2つ。『1・夏候惇ギロスさんに質問です。真・恋姫の夏候惇の珍行動（メモの使い方）を間違える、孫子の自分解釈するなど）を見て何か共感することや思ったことはありませんか？

2・第一部で出た典いアッシマーですがもし二人がでていれば曹操のところに帰ってくるように説得いたしますか？』兄者、どうなん・
・・」

夏候惇ギロスは落ち込んでいた。

夏候惇ギロス

「・・・・・嘘だ。あんな（春蘭）のが俺なんて・・・・・。何かの間違いだ・・・・・」

相当ショックだったらしい。

夏候淵ダラス

「……そりゃ、共感したくはないよな。2はその時はその時だ。もし曹操に刃を向ければ、誰であろうと斬る！……奴が刃を向けるのは有り得ないがな」

華陀

「……信頼しているんだな。という訳で、アラストル殿、納得したか？」

夏候淵ダラス

「最後は、ペンネームkkk殿からの質問が2つ。『1・孔明リ・ガズイは登場するのですか？彼の知恵があれば朱里といいコンビになると思います。2・アニメ版『SDガンダム三国伝』のEDである「justice・伝説を刻め！」は使用しますか？』……
・兄者、答えられるか？」

夏候惇ギロス

「劉備ガンダムに呼ばれてないから、登場しないのではないか？」

夏候淵ダラス

（切り替え早いな）

華陀

「なるほど。2は使用するもしないのも読者の自由らしい。俺なら使用するぜ！」

夏候惇ギロス

「kkk殿、納得したか？」

夏候淵ダラス

「……………多かつたぜ」

夏候惇ギロス

「作者が貯めていたからな」

華陀

「しかし、充実したぜ！」

夏候惇ギロス

「あんたも元気だな」

夏候淵ダラス

「そんじゃ、お別れの時間だな」

華陀

「それじゃ、俺といっしょに『いっとうえいどおおー！』と叫ばっ

「何で！？」「」

「こっしなければ、締まらんだ、頼む！」

夏候惇ギロス

「……………今回だけだからな」

夏候淵ダラス

「付き合ってくれたよしみだからでやるんだからな」

華陀

「ありがとう、いくぜ！」

三人揃って、

『ごっとうえいどおおお！』

と叫んだ。

終わり

特別第二席 夏候兄弟、華陀といっしょに叫ぶのこと（後書き）

夏候兄弟、ご苦労様でした。

第三席 赤兎馬、張飛ガンダムと再会すること（前書き）

旅のメンバーが決まりました。

第三席 赤兎馬、張飛ガンダムと再会すること

講談師

「さあさあ、始めました、〔真・恋姫十無双〕四神姫ガンダム共闘編〕！二人の劉備率いる義勇軍は、『猫子丹』により猫になつてしまふ元朝廷の大將軍“何進”の為に、解毒剤の材料集めるべく旅立つた」

《パンパン！》

講談師

「一つ目の材料『象のへそのゴマ』は、水鏡が持っている。そこへ向かうのは、恋姫の劉備と孔明と張飛。そして、突然やって来た三璃紗の張飛の四人！」

《パンパン！》

講談師

「続いて、二つ目の材料『江東丸』は、恋姫の孫家と三璃紗の孫権が居る『江東』に。向かうのは、三璃紗の劉備と恋姫の関羽！」

《パンパン！》

講談師

「最後の三つ目の材料『持久草』が生える泰山には、恋姫の趙雲と馬超が行く」

《パンパン!》

講談師

「そして残ってしまった恋姫の黄忠と馬岱と三璃紗の関羽は留守をするのだった」

「すみません」

黄忠が画面越しに講談師に話かける。

黄忠

「その『残ってしまった』と言うのは、余計ではないでしょうか?」

講談師

「は、はあ……」

「気にするなよ、黄忠殿」

劉備ガンダムが割って入ってくる。

劉備ガンダム

「別に年齢での『取り残された』という意味では無いですよ」

《カチン！》

*

「しばらくお待ちください」

*

倒れている劉備ガンダムには、大量の矢が刺さっていた。

講談師

「そ、それでは、始まり始まり！」

【道中】

「川があるから川なのだ」橋が無くっても気にしない」

鈴々と張飛ガンダムは一緒に楽しく歌っていた。

朱里

「あのう、鈴々ちゃん」

鈴々

「なんなんのだ、朱里？」

朱里

「さっきからずっと気になっているんですが、鈴々ちゃんが背負っているその葛籠、何が入っているのですか？」

鈴々

「わからないのだ」

朱里

「えっ、わかんない？」

鈴々

「旅の準備をして、部屋に出たら戸口に置いてあったのだ。でも、『お弁当』と書いてあったから、きっと美味しい物が入っているのだ」

鈴々の天然さに朱里と張飛ガンダムはあぜんしてしまう。

桃香

「うわー、いいなあ」

鈴々

「いっぱいあるみたいだから、桃香お姉ちゃんや朱里、張飛にも分けてあげるのだ」

桃香

「わーい、鈴々ちゃん、太っ腹」

鈴々

「にはははっ、桃香お姉ちゃんより、太くないのだ」

桃香

「げ、それってどういう」

鈴々

「別に深い意味は無いのだ。見たままなのだ」

桃香

「見たままって…」

張飛ガンダム

「き、気にするなよ…」

鈴々の正直な意見にショックを受ける桃香。
張飛ガンダムはそんな桃香をなだめる。

朱里

「待ってください！」

「「？」」

「皆さん、何かおかしいと思いませんか？」

桃香と鈴々と張飛ガンダムは首を傾げる。

鈴々

「何にもおかしいこと無いと思うのだ」

すると、4人はこそこそと話し合った。

桃香

「ええっー、魔物の仕業！？」

朱里

「はい、以前、古い書物で、葛箆の中に潜み、すっかり開けた人間を食べてしまう魔物の話を読んだことがあります。おそらく、この葛箆に、その魔物が入っているに違いありません」

鈴々

「それじゃ、どうすればいいのだ！？」

朱里

「そうですね。葛箆を開けて飛び出すのは厄介ですから、このまま葛箆ごと燃やしましょう」

張飛ガンダム

「だったら、俺様の『爆裂大雷蛇』で——」

「ちょっと待った！って、うわあああああ！！」

葛籠から、馬岱が飛び出て、転ぶ。

そして、朱里はにらむ。

朱里

「やっぱり馬岱ちゃんでしたね」

馬岱

「だ、騙したな！」

朱里

「それはこっちの台詞です。って、でもまあ、あんな子供騙しなやり口に騙されるほうもどうかしていますが……」

鈴々

「まったくなのだ」

張飛ガンダム

「って、お前だろ！」

びしっ！とツツコミを入れる。

朱里

「とにかく、馬岱ちゃんは此処から村まで戻ってください」

馬岱

「ええっ、なんで？」

朱里

「何でって、馬岱ちゃんも翠さんの言いつけで、村で留守番するよ
うに言われてたじゃないですか。その言いつけを破って、勝手に
付いて行くなんで、だめに決まっています」

馬岱

「留守番なんてつまんないよ。 蒲公英も連れてって。 絶対
に大人しくするから…」

朱里

「駄目です!」

張飛ガンダム

「言いつけを破る奴の言うことなんか信じられるかよ」

朱里

「張飛さんの言うとおりです」

馬岱

「お願い!」

張飛ガンダム

「……お前さ、『つまらない』って理由で、与えられた役目をほっ
ぱり出して良いと思ってるのか?」

馬岱

「別に良いじゃない」

張飛ガンダム

「……ふざけんな！」

張飛ガンダムの怒鳴りに桃香達は驚く。

張飛ガンダム

「留守番に楽しいもつまらないもねえ！必要だから、あるんだよ！」

馬岱

「そ、そんなに怒鳴ることはないじゃないか！ 大丈夫だよ、黄忠
やもう一人の関羽が居るんだから」

張飛ガンダム

「バカヤロー、そういう問題じゃあねえよ」

馬岱

「バカヤローじゃない！」

張飛ガンダム

「んじゃ、言いつけを破る奴は偉いつてのか？」

馬岱

「うっ、それは…」

張飛ガンダム

「お前みたいな奴は、かえって邪魔になる。とっとと帰りな！」

朱里

「ちよ、張飛さん、それは流石に言い過ぎですよ」

馬岱

「あ、あたしも居れば、心強いよ！」

張飛ガンダム

「俺と鈴々だけで充分だ。　　っーか修行中の身だろう？」

馬岱

「うつ…」

張飛ガンダム

「わかったら、村に帰りな」

鈴々

「子供は大人の言うことを聞くのだ」

馬岱

「……なんだよ、張飛だって子供…！」

その時、馬岱は思いつき、鈴々に耳打ちをした。

鈴々

「にゃあ！そ、それは…」

鈴々は困ってしまう。

張飛ガンダム

「鈴々、どうした？」

鈴々

「朱里、張飛、旅も修行のうちだし、馬岱も連れて行っても良いんじゃない…」

張飛ガンダム

「はぁ!?!」

朱里

「鈴々ちゃん、急に何を言い出すんですか!?!」

鈴々

「べ、別に脅されているわけじゃないけど、ここは馬岱の言うとおりにしてやったほうが、良いかものだ!」

朱里

「鈴々ちゃん、どうしたんですか?なんか変ですよ?」

鈴々

「そ、そんなことないのだ! 変だけど、いつものことだから、変でも普通なのだ!」

「何じゃそりゃ?」というツツコミをせず、張飛ガンダムは鈴々と馬岱を見合わせる。

張飛ガンダム

「……鈴々、なんか脅されているな?」

鈴々

「ギクツなのだ!」

張飛ガンダムは「こいつ、わかりやすいなあ」と呆れてしまう。

張飛ガンダム

「何で脅されているかはあえてきかねえよ。 馬岱、おめえそこま
でして、はずかしくねえのか？」

馬岱

「うつ…」

張飛ガンダム

「そんなお前に付いて来る資格はねえ！ とつとと帰り…」

「ねえ、張飛ちゃん」

桃香は声を上げる。

桃香

「ここまで付いて来ちゃたんだし、私は馬岱ちゃんも連れて行って
あげても良いと思うんだけど」

朱里

「劉備さん！！」

張飛ガンダム

「お前まで何言ってやがる…」

桃香

「それに、今帰らせたら、道に迷って日が暮れちゃうし」

桃香の言う通り、確かに日も落ちている。

朱里

「それはそうかも知れませんが…」

朱里は馬岱を見て考える。

朱里

「……しょうがないですね、わかりました。馬岱ちゃんも連れて行きましょう」

馬岱

「やりい！」

張飛ガンダム

「いいのかよ？」

朱里

「こうなつては仕方ありません。ただし、物見さんの旅じゃないんですからね。遊び半分じゃないんですからね。わかっていますね？」

馬岱

「はい」

張飛ガンダム

「本当にわかっているのか？ 邪魔だけはするなよ」

馬岱

「わかっているよ」

こうして、馬岱も旅に参加する。

【水鏡の庵】

鳳統こと雛里が庭掃除をしていると、

「雛里ちゃん、雛里ちゃん！」

朱里が駆け上がる

雛里

「朱里ちゃん！」

朱里

「雛里ちゃん！」

二人は手を取り合い、再会を喜び合う。

張飛ガンダム

「誰だ？」

桃香

「鳳統ちゃんは水鏡先生のお弟子さんで、孔明（朱里）ちゃんの妹弟子当たるんだよ」

馬岱

「へえ」

雛里

「贈ってもらった本、すつごく勉強になったよ！」

朱里

「本当、良かった！なら、もっと凄いのを送るね」

雛里

「わあ、楽しみ！」

すると、水鏡が通りかかる。

水鏡

「あら、朱里！」

朱里

「水鏡先生！」

朱里は喜びのあまり、抱きつく。

張飛ガンダム

「あの優しそうな人がこの世界の水鏡先生か…」

桃香

「三璃紗の世界にも、水鏡先生居るの？」

鈴々

「どんな奴なのだ？」

張飛ガンダム

「えつとな……良きかな良きかなっていつも言ってるのん気な先生さ」

桃香

「へえ」

水鏡

「あら！」

水鏡は張飛ガンダムに気付き、驚く。

水鏡

「貴方は…」

張飛ガンダム

「あ、始めまして、張飛って言います。別の世界からやってきちゃいました」

水鏡

「もしかして、この前一緒に来たもう一人の劉備さんの…」

朱里

「はい、義兄弟の方です」

雛里はじーっと張飛ガンダムを見つめる。

張飛ガンダム

「うん、不思議か？」

雛里

「……お馬さんの知り合い？」

張飛ガンダム

「お馬さん？」

馬岱

「うん？ ああっ！？」

桃香達の前に現れたのは、

張飛ガンダム

「赤兎馬！？」

赤兎馬

「ヒヒーン！」

関羽ガンダムと張飛ガンダムと一緒に飛ばされた赤兎馬だった。

次回に続く。

第三席 赤兎馬、張飛ガンダムと再会すること（後書き）

そつえば赤兎馬も飛ばされていたけ。

第三席(その2) 赤兎馬、旅に同行すること(前書き)

『アニメージュ』を読んだら、もうすぐ『三国伝』が終わるそうです。

しかし、『真・恋姫＋無双〜四神姫ガンダム共闘編〜』はまだまだ続きます。

第三席（その2）赤兎馬、旅に同行すること

「前回の話」

馬岱が鈴々や張飛ガンダムの一に行に勝手に加わる。
さらに水鏡の庵に着くと、赤兎馬と再会する。

【洛陽】

「いやあゝん」

「ぐっふふ」

執務室で董卓ザクが酒を飲みながら、踊り子の胸を触っていた。

「お仕事はしなくてよろしいのですか？」

柱の影から紅い装束を着た女性、『司馬懿』が現れる。

董卓ザク

「余計なお世話じゃ。それより、逃げた何進はどうした？」

司馬懿

「二人の劉備がいる『義勇軍』に匿われました」

董卓ザク

「二人の劉備だと！？それでどうなったのだ！？」

司馬懿

「追撃させた部隊（盗賊の頭三人）を向かわせましたが、返り討ちされました」

董卓ザク

「おのれ！！」

怒る董卓ザクは机を叩く。

それを見た踊り子は怖がって逃げてしまう。

董卓ザク

「すぐに追撃部隊を向かわせろ！」

司馬懿

「今は得策とは言えませんが、向かわせません」

董卓ザク

「何？」

司馬懿

「董卓様。貴方が此処に居られる目的を忘れておりませんか？」

董卓ザク

「忘れておらん。この『洛陽』で悪政をさせて、『闇』を増大させることじゃろ？」

「その通りです」

そこへ、『闇の武人』となつて復活した“李儒シャッコ”が現れる。

李儒シャッコ

「あの義勇軍……いや、二人の劉備は、『黄巾の乱』を鎮めてしまったという功績があります。そんな二人の劉備に下手に攻撃を仕掛ければ、逆にしつぺ返しを喰らいます」

司馬懿

「それに闇の化身様の復活こそが最優先です。董卓様は悪政をなさつて下さい。無論、策は練っております」

董卓

「そうか。わかった、お前達に任せよう。それにしても……『おっぱい』とは良いものだ！『三璃紗』の女には無い柔らかい膨らみでさわり心地がたまらん！あの何進のおっぱいも良さそうだったから逃がしてしまったことが残念じゃ。もっと『おっぱい』のあるやつを連れてくるのじゃ！」

李儒シャッコ

「は、はい……」

【廊下】

司馬懿と李儒シャッコは歩きながら話す。

李儒シャッコー

「それで策とは？」

司馬懿

「現在義勇軍内は主要なる者達は出払っております」

李儒シャッコー

「まことですか？」

司馬懿

「何進に飲ませた『猫子丹』には解毒薬があります。『南蛮象のへそのゴマ』、『江東丸』、『持久草』の三つを取りに行くために別れて遠くの地に足を運んでいる筈です」

李儒シャッコー

「何進一人の為にですか？なんとお人好しな……」

司馬懿

「あの者達は利益より『義』を重んじます。そんな者達に刺客を送ります」

李儒シャッコー

「なるほど」

司馬懿

「『江東丸』は孫家が持っております。そこに三璃紗の劉備と“この世界”の関羽が向かっています。江東の地にいる“胡玉ハイドラ”に二人の抹殺を任せましょう」

李儒シャッコー

「すぐに通達します」

司馬懿

「次に『持久草』のある泰山には趙雲と馬超が向かっております。そこには…」

李儒シャッコー

「我が董卓軍の將軍にお任せを」

司馬懿

「わかりました。そして『象のへそのゴマ』を取りに行く“この世界”の劉備と張飛と諸葛亮と三璃紗の張飛には……彼を行かせましよう」

李儒シャッコー

「彼？」

司馬懿は耳打ちをする。

李儒シャッコー

「なるほど、それは適任ですな！」

司馬懿

「うっふふふ」

司馬懿と李儒シャッコーは不適に笑う。

一方、【水鏡の庵内】では……

桃香

「うわっ、可愛い！」

鈴々

「馬より小さい馬なのだ！」

赤兎馬

「ヒヒーン」

桃香と鈴々は赤兎馬とじゃれ合う。

張飛ガンダム

「まさか赤兎馬が迎えてくれるとは」

水鏡

「やはりこの子（赤兎馬）も三璃紗の世界から来たんですね。突然、空から降ってきたときは驚きました」

雛里

「よしよし」

雛里は赤兎馬になでなでと頭を撫でてあげると赤兎馬は大人しくなる。

張飛ガンダム

「赤兎馬、あの子（雛里）になついているな」

水鏡

「人見知りの激しい雖里も気兼ねなく接しているんです」

張飛ガンダム

「人じゃなくて馬だからな。赤兎馬が世話になったな」

水鏡

「いえいえ」

朱里

「それで、今日訪ねてきたのは……」

朱里は事情を話す。

水鏡

「なるほど、それで『南蛮象のへそのゴマ』が必要なんですね」

朱里

「はい、貴重なものとはわかっているのですが、これも人助け。少しでも良いですから分けてもらえませんか？」

水鏡

「元よりあれは人を苦しみから解放するための手に入れたもの。人助けに使うのなら本望。それに朱里がお世話になっている皆さんの頼み、断ることはできません」

朱里

「先生ありがとうございます！」

【作業場】

いろんなものが置かれてある作業場で水鏡は探すが…

水鏡

「おかしいわね。確か此処（引き出し）に入れたはずなのに…」

朱里

「見つからないのですか？『南蛮象のへそのゴマ』」

水鏡

「貴重なものだから、紛れないように“マル秘”と書いた紅い包みに入れたんだけど…」

雛里

「あっ！」

雛里は突然慌てる。

水鏡

「私の思い違いだったかしら？」

雛里

「あ…あのう…せ、先生」

水鏡

「何？」

雛里

「…えっ、ええっと……あ、あのう……何でもありません」

仕方が無く、明日探すこととなった。

【水鏡の部屋】

張飛ガンダムは水鏡と茶を飲んでいた。

水鏡

「本当にすみません」

張飛ガンダム

「もういいって。むしろ、かなり貴重なものをタダで譲ってもらったのも悪いから」

水鏡

「いいえ、朱里のお世話になっている人たちへのご恩返しですから」

張飛ガンダム

「さて、どうしたものか」

水鏡

「…………あのう」

張飛ガンダム

「うん？」

水鏡

「貴方が話していた『暗黒玉璽』。どこかで読んだことがある気がするんですよ」

張飛ガンダム

「そうなのか？」

水鏡

「『南蛮象のへそのゴマ』が用意できなかった代わりに『暗黒玉璽』のことを調べましょうか？」

張飛ガンダム

「いいのか？」

水鏡

「ほんのお詫びです」

張飛ガンダム

「…………お言葉に甘え……」

その時、

「ヒーン」

外から赤兎馬の泣き声が聞こえる。

張飛ガンダムは気になり、窓の戸を開ける。

見れば、赤兎馬は怪しい人影と寄り添っていた。

張飛ガンダム

「誰だ!？」

「あわわ!！」

人影は逃げ出す。

張飛ガンダム

「曲者だ!！」

張飛ガンダムは窓から出て、追いかける。

「うりゃあ!！」

《どさつ!!!》

鈴々が人影を捕まえる。

張飛ガンダム

「よくやった！」

朱里

「どうしましたか！？」

朱里は明かりを持って駆けつける。

鈴々

「曲者を捕まえたのだ」

朱里が明かりを灯してみると、

人影は雛里だった。

【庵内】

騒ぎを聞いたほかの者も起きて、庵内に集まった。

水鏡は雛里に問いたです。

水鏡

「いったいどうしたの。夜中に、こんなに食べ物を持って」

雛里

「……旅に……」

水鏡

「旅って、いったい何処へ？」

雛里

「……南蛮です……」

「「「ええっ!?!?!」」」

朱里

「でも、でもなんで?」

雛里

「あたしの…あたしのせいなの」

朱里

「えっ?」

雛里

「あたしが『南蛮象のへそのゴマ』をなくしちゃったの」

雛里はことの次第を話し始める。

【回想】

雛里がその日、作業場で掃除をしていた時のこと。

開けっ放しになっていた引き出しの中にあつた紅い包みにマル秘と書かれた、『南蛮象のへそのゴマ』を見つける。
気になり開けて見てみると、

「はつくしよん」とくしゃみをして吹き飛ばしてしまう。
さらにうっかり水をこぼしてだめにしてしまった。

【現在】

張飛ガンダム

「それはなくしたというより、だめにしたんじゃないのか？」

桃香

「今はツツコミはなしだよ」

雛里

「だから…だから…あたしが南蛮が行って、『南蛮象のへそのゴマ』を…」

朱里

「雛里ちゃんの馬鹿!!」

「「「!?!?!」」」

朱里が怒鳴る。

朱里

「そんなことなら、そんなことならどうしてもっと早く言ってくれなかったの!」

雛里

「ごめんなさい。せっかく来てくれたのに、『南蛮象のへそのゴマ』をあたしがだめにしたって知ったら、朱里ちゃん怒ると思って……だから……だから……」

雛里は思わず泣き出してしまう。

朱里

「あたし、確かに怒ってるよ。……でも、あたしが怒っているのは、雛里ちゃんが隠し事してたから。雛里ちゃんが正直に話してくれたら、あたしは怒らなかったよ」

雛里

「ええっ」

朱里

「だってあたし達、お友達でしょ?」

雛里

「朱里ちゃん……朱里ちゃん!!」

思わず、朱里に抱きつき泣き出す。

そんな様子をほほえましく見守る。

【翌朝：玄関前】

朱里

「先生、大変お世話になりました」

水鏡

「やはり、南蛮に行かれるんですね？」

桃香

「はい、昨日皆で話し合って決めたんです」

水鏡

「しかし、南蛮は遙か南の未開の地。そこへ至る道は険しく、凶暴な蛮族が跋扈してるとか」

桃香

「そうですね。確かに大変な旅になると思います。でも、皆で力を合わせればきっと大丈夫だと思います」

雛里

「朱里ちゃん、気をつけてね」

朱里

「ありがとう、雛里ちゃんも勉強を頑張ってたね」

雛里

「うん！」

水鏡

「朱里」

朱里

「はい」

水鏡

「饞別になるかどうか分からないけど、この羽毛扇を」

朱里に羽毛扇を差し出す。

朱里

「ええっ！でも、これって…」

水鏡

「長い旅になるでしょうから、体に気をつけるのよ」

朱里

「……はい、ありがとうございます！先生も気をつけて」

水鏡

「皆さん、朱里をよろしくお願いします」

桃香

「はい」

鈴々

「お任せなのだ」

張飛ガンダム

「ドンと任せとけ」

赤兎馬

「ブルルン」

すると、赤兎馬が桃香のところに歩み寄る。

桃香

「えっ、赤兎馬ちゃん？」

張飛ガンダム

「……もしかして、付いて行く気か？」

赤兎馬は頷く。

水鏡

「それは良いですね。元々は張飛さんの世界の馬ですから」

張飛ガンダム

「……いいのか？」

雛里に尋ねる。

雞里

「うん。赤兎馬さん、朱里ちゃんを助けてあげて」

赤兎馬

「ヒヒーン」

桃香

「よろしくね、赤兎馬ちゃん」

こうして赤兎馬が仲間になって、朱里は羽毛扇を受け取って南蛮に旅立った。

【洛陽の城門前】

城門からある異様な装束姿の男が赤兎馬に似た馬に乗って出て行く。

さらに武器には『破塵戟』を持っていた。

???

「…………劉備…………倒す！」

【街道】

『持久草』を求め、泰山に向かう趙雲と馬超。

しかし、何故か趙雲はえらく不機嫌だった。

「待っていましたよ！」

馬超

「!？」

趙雲と馬超の前に現れたのは！

???

「我が名は董卓軍・鎮江將軍“胡診ギャン”！」

馬超

「なっ、チ●コ將軍／／!？」

胡診ギャン

「違う！鎮・江・將・軍！（怒）」

馬超

「そ、そうか……その姿は闇の武人か？」

胡診ギャン

「いかにも。三璃紗世界で運悪く戦死しましたが、闇の化身様に『闇の武人』として生き返させてもらいました。その恩に報いるために、貴女達を討伐させていただきます！」

《シュウウウウウウ！！》

胡診ギャンは『転身』する。

《ザッザッザッザッザッザッ！！》

さらに『転身』した董卓軍兵士も多く現れる。

馬超

「面白れえ！『闇の武人』とは一度戦いたいと思っていたんだ！」

馬超は武器の『銀閃』を構える。

胡診ギャン

「その吠え面、掻かせないようにしましょう」

胡診ギャンも武器の戟を構える。

すると、趙雲は黙って通りすぎようとする。

胡診ギャン

「って、ちょっと待ちなさい！」

胡診ギャンは慌て、趙雲の前に立って止める。

「ぎゃ ああああああ、私の出番はこれだけ!？」

《ドカアアアアアアアアン!!》

胡診ギャンは爆発して倒された。

馬超も董卓軍兵士達も驚愕した。

趙雲

「次は貴様らか？」

「「「うわっ ああああああ!!」「」」

董卓軍兵士達は一目散に逃げ出した。

馬超

「……せ、星」

趙雲

「……なんだ？」

馬超

「メンマ多目のラーメンを取ってすみませんでした!!」

実は趙雲が機嫌が悪かったのは、馬超がメンマ多目のラーメンを取ったからである。

趙雲

「もう怒っておらん」

そう言いながらも機嫌が悪かった。

馬超はもう二度と趙雲からメシマを取らないと心に決めたのだった。

終わり

第三席（その2）赤兎馬、旅に同行すること（後書き）

胡診ギヤンを闇の武人として登場させ、即退場させました。

登場人物紹介〔董卓軍・その他〕

〔董卓軍〕

《董卓ザク》

三璃紗世界で悪逆非道を繰り返した『暴虐の太師』。
眉宇城の戦いで、『天玉鎧』の力を得た劉備ガンダムに倒された。
しかし、『恋姫の世界』で、闇の武将となって蘇り、何進を追い
払って、將軍となった。

《司馬懿「？」》

董卓の軍師を務めている謎の女性。常に紅い装束を着ている。
闇の化身と繋がっているためか、『暗黒玉璽』を持っている。

《李儒シャッコー》

董卓軍の軍師であり、側近。味方ごと攻撃する残虐な行為をし
た為、徐晃サーペントに斬られる。

しかし、董卓ザクと同じように闇の武人として蘇った。
謎の女性、司馬懿と共に董卓ザクを支える。

《胡軫ギャン》

董卓軍將軍。『三璃紗』世界で運悪く戦死したが、『恋姫の世界』で名誉挽回に马超と趙雲に襲いかかるのが、またもや運悪く、趙雲に股間を蹴られた上に、「チ。コ」と言われて散ってしまった。

（その他）

《鳳統「雛里」》

水鏡の元で学んでいる少女。友達の水里から送ってもらったエッチな本に夢中なもよう。口癖は「あわわ」
人見知りが激しいが、赤兎馬のような動物相手なら大丈夫なもよう。
う。

《水鏡》

朱里の先生であり育ての親でもある人。
庵で雛里と一緒に暮らす。
心優しいので、劉備ガンダム等の三璃紗の人でも受け入れる。

《赤兎馬》

関羽の愛馬である三璃紗の馬。
運が悪く、関羽ガンダムと張飛ガンダムと一緒に恋姫の世界にやって来たが、水鏡の庵で運良く張飛ガンダムと再会し、旅に同行する。

終
わ
り

特別第三席 甘寧ケンプファーと呂蒙デিজエ、水鏡先生と出演すること（前

遂にあいつらが登場します！

特別第三席 甘寧ケンプファーと呂蒙ディジェ、水鏡先生と出演すること

甘寧ケンプファー

「遂にわしらの出番じゃき！」

呂蒙ディジェ

「張り切るぜ！」

呂蒙ディジェと甘寧ケンプファーは出番がやって来たのが嬉しいあまりに張り切る。

呂蒙ディジェ

「それじゃ、まずはゲストを呼ぶぜ！どうぞ」

水鏡

「こんにちわ、水鏡です。よろしくお願いいたします」

今回のゲストは【恋姫】の水鏡先生です。

甘寧ケンプファー

「き、綺麗ぜよ」

呂蒙ディジェ

「や、優しそうだ」

思わず見とれてしまう。

水鏡

「あのう？」

呂蒙ディージェ

「あ、すまん、すまん！ それじゃ、質問を読み上げるぜ」

呂蒙ディージェはあわてて質問を読み上げる。

呂蒙ディージェ

「ペンネーム【ハーミット】殿からの質問が2つ。

へ？アニメに出てきた袁紹バウの弟の袁術ズサと紀霊ハンマ・ハンマは出てきますか？

？映画に出てきた胡軫ギャンは出てきますか？ あと、袁紹バウとその配下は出てきますか？」

水鏡

「？の答えは、残念ながら出ません。漫画版を原作に書いていますので」

甘寧ケンプファー

「？の答えは、前回の話で胡軫の野郎は出てきたぜよ。あと袁紹バウとその配下は出る予定らしいき」

呂蒙ディージェ

「【ハーミット】殿、【KKK】殿の小説に袁術ズサと紀霊ハンマ・ハンマが出てるんで、読んでくれ！」

水鏡

「良かったら、感想を書いてあげてください」

甘寧ケンプファー

「次はその【KKK】殿の質問を読み上げるじゃき」

甘寧ケンプファーは【KKK】の質問を読み上げる。

甘寧ケンプファー

「ペンネーム【KKK】殿からの質問が4つ。

①？闇の化身との戦いが終わったら劉備ガンダム達は三璃紗に帰りますか？

②？恋姫無双の世界に来てから劉備ガンダム達の好きな食べ物は何ですか？

③？劇場版に登場した胡軫ギャンは原作ではどんな感じなのですか？
④？鈴々は朱里に硯を壊したことを話しましたか？」

水鏡

「そうですね……。それはまだわからない方がよろしいとおもいますよ」

甘寧ケンプファー

「そうじゃき。結末をあつさり教えると楽しみがなくなるぜよ」

呂蒙ディージェ

「そんじゃ、？の答えは、劉備ガンダムは『ご飯を入れた卵スープ』。典韋の店で絶賛していた。次に曹操ガンダムは『風特製麻婆豆腐』。ありゃ、とても辛いらしい……。あとうちの若（孫権ガンダム）と関羽ガンダムと張飛ガンダムは来たばかりだから、わからん」

水鏡

「？の答えですが、胡軫ギャンさんは劇場版のオリジナルキャラクターらしいので、原作は無いかと思えます」

甘寧ケンプファー

「？は、正直に話みたいじゃが、朱里はかなり怒ったらしいぜよ。という訳で、【KKKK】殿、ネタばらしするような質問は控えるぜよ！」

水鏡

「次は私が読み上げますね」

水鏡は質問表を読み上げる。

水鏡

「ペンネーム【龍神】殿の3つの質問。

「？呂蒙は以前、孫権に「未来の良い奥方（嫁）を見つけて来い」と言いましたが、私は蓮華が候補だと思いますが、呂蒙と甘寧から見てもどうか？ 蓮華、思春、穩、亜莎、明命の中から呂蒙と甘寧が孫権の相応しいお嫁に誰を選びますか？
？呂蒙が学問と兵法を学ぶきっかけとなったのは何ですか？ そして、何故呂蒙は仮面（兜？）を被るようになったんですか？
呂布隊は出てきますか？（貂蟬キュベレイ、張遼ゲルググ、高順ヴェイエイト、陳宮メリクリウス）」

呂蒙ディジェ

「そうだな……どの子も良い子だからな」

甘寧ケンプファー

「わしゃ、やっぱり思春じゃ！ 厳しいが忠誠心と信念が強いじゃき！」

呂蒙ディジェ

「俺は……」

水鏡

「あのう」

「はい？」

水鏡

「良いお嫁さんは役目を務めて、初めて『良いお嫁さん』と呼ばれます」

呂蒙ディジエ

「す、水鏡先生が言っていると、説得力あるな」

水鏡の言葉で呂蒙ディジエと甘寧ケンプファーは納得する。

甘寧ケンプファー

「答えは、ちゃんと役目を務めれた奴こそが、真の嫁じゃき！」

水鏡

「それでは呂蒙さん、？の答えを」

呂蒙ディジエは悲しい顔で語り始める。

呂蒙ディジエ

「……昔、自分の失態が原因で世話になった人が戦死して、部隊を全滅させてしまったんだ。だから、二度とそうなりたくないから兵法を学んだんだ」

水鏡

「……そうでしたか」

水鏡と甘寧ケンプファーは悲しい顔になる。

呂蒙ディージェ

「そして、孫策様がこんなわしにこの兜をくれたんだよ」

甘寧ケンプファー

「ぐすん。気を取り直して、？の答えるぜよ！ 張遼ゲルググ以外は『闇の武人』として登場する予定じゃ！【龍神】殿、納得したき？」

呂蒙ディージェ

「次はこれが良いな」

呂蒙ディージェは読み上げる。

呂蒙ディージェ

「ペンネーム【龍の骨】殿からの質問。
へ『BSAA学園！』の朱里はカップルをよく嫉妬をする（物陰に隠れながら嫉妬のオーラを出しまくったり、UZIのマシンピストルを出そうとする等）先生になってしまいました、本人はどう思いますか？」

水鏡

「……『BSAA学園』って、どんな」

水鏡は『BSAA学園』を読んでいる。
読んでいるうちに倒れる。

呂蒙ディージェ

「先生！」

呂蒙ディージェはあわてて駆け寄る。

水鏡

「う、嘘よ。朱里が…朱里が…」

内容を読んでいるうちにショックを受ける。

甘寧ケンプファー

「えーっ、水鏡先生があんな風になってもったから、本人もショックを受けるじゃろう。【龍の骨】殿、あんまり朱里を酷く書かないでやってくれ」

水鏡先生はしばらく寝かせて、質問コーナーは続く。

呂蒙ディージェ

「ペンネーム【ぶよ髭の人】

へ孫尚香ガーベラも恋姫世界に来るのでしょうか、もし来たとしたら劉備ガンダムに好意を持っている袁術と、ライバルになるのでしょうか？ 孫尚香ガーベラも劉備ガンダムに好意を持っていますので

それから、恋姫無双に出てきた孫静も登場する予定があるのでしょうか？」

甘寧ケンプファー

「残念じゃが、来ない。姫は 翔 にいるんじゃ。しかし、もし来たら、ライバルになるのは間違いないがのう」

呂蒙ディージェ

「そして、孫静も登場する予定は無い。【ぶよ髭の人】殿、納得し

たか？」

甘寧ケンプファー

「最後はこいつじゃ！」

最後の質問を読み上げる。

甘寧ケンプファー

「ペンネーム【MUSYA】からの質問。

「三国伝の俠たちはこれ以上でないみたいですが、コマンドやナイトたちみたいな異なるSD戦士がきたりはしないのですか？」

呂蒙ディージェ

「出ねえよ。これは『三国伝』と『恋姫』のクロスオーバーだから」

甘寧ケンプファー

「【MUSYA】殿、納得したき？」

呂蒙ディージェ

「やっと終わっ……」

寝かせている水鏡を見て、

呂蒙ディージェ

「ってないよな」

甘寧ケンプファー

「送っていいこうか」

甘寧ケンプファーと呂蒙ディージェが水鏡を担いで行きました。

終
わ
り

特別第三席 甘寧ケンプファーと呂蒙ディージェ、水鏡先生と出演すること（後

新しい書き方がでしたか？

第四席 孫権ガンダム、甘寧に厳しく鍛錬してもらったこと。(前書き)

『ライトノベル創作教室』を読んで、書き方を改めました。

擬音を使っておりません。

第四席 孫権ガンダム、甘寧に厳しく鍛錬してもらったこと。

【山道】

孫家に伝わる『江東丸』を求めて、江東の地を目指して歩いて山道を通る劉備ガンダムと愛紗。

劉備ガンダム

「この世界の孫家はどんな人たちかな？楽しみだ」

この世界の『孫家』と会うのが楽しみな劉備ガンダム。

愛紗

「兄上、本当に三璃紗の孫権殿もいるのでしょうか？」

劉備ガンダム

「うん、戦神姫がそう言っていた」

劉備ガンダムは愛紗たちに関羽ガンダムと張飛ガンダムがやって来た経緯を説明する際に戦神姫のことを話していた。

劉備ガンダム

「信じられないか？」

愛紗

「いいえ、兄上や闇の武人たち等と遭遇していなければ、信じてい

ませんでしたね」

劉備ガンダム

「そうだな、俺も愛紗や桃香に出逢わなかったら、異世界の存在なんて信じてなかったよ」

愛紗

「もう何が起きても信じるしか無いです」

劉備ガンダム

「そうか」

愛紗

「それで、三璃紗の孫権殿は一体どういう方なのですか？」

劉備ガンダム

「凄く優しくて強い侠だよ。」

「一緒に赤壁で三璃紗の曹操と戦ってくれたんだ」

愛紗

「なるほど」

劉備ガンダム

「けど……その前の合肥の戦の時に、目の前で兄上の孫策殿を亡くされたんだ」

愛紗

「えっ、孫権殿ですか！……私も幼い頃に実の兄を賊に殺されました」

愛紗は、まだ会っていない孫権ガンダムと自分を思わず重ねる。

劉備ガンダム

「そうか……。その後、俺と曹操が天玉鎧の力を使って『神火飛鳳』を食い止めて、この世界にやって来たんだ。その後のことはわからないんだ」

愛紗

「ああっ、そうでしたね」

劉備ガンダム

「関羽の話では、『轟』という国を建国して、皇帝を即位したって、言っていたな」

愛紗

「す、凄いじゃないですか！！　きっと立派なお方なんでしょうね！」

劉備ガンダム

「うん、きっとここでも立派に過ごしているに違いないよ」

劉備ガンダムと愛紗はそう考えていた。

愛紗

「私も会いたくなりました、三璃紗の孫権殿。そして、もう一人の孫権殿にも」

劉備ガンダム

「この世界の孫権殿って、どんな奴だ？」

愛紗

「昔、私を孫策殿を暗殺した者と勘違いして、捕らえたことがありました。しかし、誤解だと解ると、謝ってくれました」

劉備ガンダム

「ふーん、愛紗と同じでまっすぐなんだ」

愛紗

「はい、良い方です」

楽しく会話しながら江東に向かう。

*

一方、【江東の地】に居る三璃紗の孫権ガンダムは……、

孫権ガンダム

「痛い！」

孫権ガンダムは甘寧の足払いで転ばされる。

甘寧

「もう一人の孫権様、しっかりしてください！」

孫権ガンダム

「か、甘寧、もうこれぐらいで……」

甘寧

「いいえ、まだ頑張れます。」

貴方は侠であり、『轟』の皇帝を即位した身です。

闇の武人や刺客からご自分の身を守るためにも鍛えて貰います」

孫権ガンダム

「は、はい」

甘寧は孫権ガンダムに鍛練をつけていた。

あの胡玉ハイドラの襲撃以来、孫家は警戒を厳重にすると同時に今後の闇の武人の襲撃に備えるために甘寧は孫権ガンダムを鍛えていた。

しかし、甘寧の鍛練は相当厳しい上に長時間続けている為に、孫権ガンダムはへとへとになる。

「孫権ガンダム様」

「頑張つて！」

「しっかり！」

二人の鍛練を見学していた親衛隊は孫権ガンダムの方を応援する。

親衛隊は全て女性で、孫権ガンダムはそんな彼女達と交えて鍛練をする。

そんなに日は経ってはいないが、孫権ガンダムの愛嬌のよさは彼女達の心を鷲掴みしていた。

孫権ガンダム

「う、うん・・・」

孫権ガンダム本人もまんざらでもなく嬉しかった。

甘寧

「隙あり！」

孫権ガンダムが手を振る隙を狙って勢いよく背負い投げる。

孫権ガンダム

「あいつた！」

地に叩きつけられて、かなり痛がる。

甘寧

「注意力が足りません！」

強く指摘する。

孫権ガンダム

「す、すみません・・・」

甘寧

「貴様らも鍛練をしろ！」

同じく叱責する。

「「「は、はい！」」」

あわてて自分達の鍛練を始める。

そんな光景を屋敷の上から見ていたのは、恋姫の孫権こと“蓮華”である。

蓮華

「ふふっ、大変ね」

思わず苦笑する。

*

孫権ガンダム

「いててっ」

休憩時間となり、孫権ガンダムや親衛隊は休む。

孫権ガンダムは未だに痛みを残していた。

孫権ガンダム

「ここの甘寧も厳しいな」

三璃紗の甘寧ケンプファーと恋姫の甘寧を比べて呟く。

そんな時、孫権ガンダムは横から視線を感じ取る。

恐る恐る感じる方に振り向くと、一人の親衛隊が睨んでいた。

後ろ髪を二つの団子にしていた少女だった。

孫権ガンダム

「あ、あのう、何か？」

「ああつ、ごめんなさい！あなた様があまりに珍しいので、見つめていました！」

我に返って、慌て謝罪する。

孫権ガンダム

「見つめていた？睨んでいたように見えただけど」

「す、すみません！」

孫権ガンダム

「あははっ、見つめるのは仕方ないよ。
確かに俺は珍しいから」

「し、失礼しました！私、“呂蒙”と申します！」

孫権ガンダム

「呂蒙！？君が呂蒙なのか！？」

呂蒙

「は、はい！わ、私のことをご存知なのですか？」

孫権ガンダム

「俺の居た世界にも、呂蒙がいるから」

呂蒙

「そうなのですか？」

孫権ガンダム

「ああっ」

今度は孫権ガンダムが呂蒙を見つめる。

呂蒙は恥ずかしがる。

孫権ガンダムは目の前の呂蒙と、三璃紗の呂蒙ディジエを比べて見て、まったく違うことを感じる。

孫権ガンダム

「うーん、まったく正反対だな」

呂蒙

「ど、どんなお方ですか？」

孫権ガンダム

「えーと・・・・・・・・」

どう答えるべきか悩む。

甘寧

「休憩終わり！再開だ」

孫権ガンダム

「えっ、もう終わり！？」

孫権ガンダムは泣く泣く甘寧との鍛練を再開した。

孫権ガンダムとの鍛練が終わった後に呂蒙と甘寧の鍛練が始まる。

両者は交互に拳を打って、身のこなしで避ける。

孫権ガンダム

「此処では二人は師弟関係なんだ」

孫権ガンダムは甘寧と呂蒙の二人を見て、そう感じる。

*

その夜、孫権ガンダムは数冊の書物を持って【蓮華の部屋】に行くところとする。

孫権ガンダム

「うん？」

【蓮華の部屋】の扉の前に呂蒙が立っていた。

孫権ガンダム

「あつ、呂蒙」

呂蒙

「あつ、もう一人の孫権様」

孫権ガンダム

「なにやってるの？」

呂蒙

「甘寧様から警護の任を仰せ遣わされました」

孫権ガンダム

「そうか」

呂蒙

「もう一人の孫権様は？」

孫権ガンダム

「蓮華に勉強を教えてもらいに」

呂蒙

「もしかして、毎晩ですか？」

孫権ガンダム

「うん」

呂蒙

「昼は甘寧様との鍛練で、夜は孫権様とお勉強を毎日なさっているのですか？」

孫権ガンダム

「まあね」

呂蒙

「大変ですね」

すると、蓮華が顔を出す。

蓮華

「いらつしゃい、孫権」

孫権ガンダム

「今日もよろしく頼みます、先生」

孫権ガンダムは蓮華を『先生』と呼ぶ。

孫権ガンダムは学問を教えてくれる蓮華を『先生』と呼ぶようにしている。

蓮華

「よろしくね。あら？」

呂蒙の存在に気付く。

蓮華

「あなたはー」

呂蒙は慌てて、

呂蒙

「今日から孫権様の警護をすることになりました呂蒙と申します！
よろしく願います！」

緊張のあまり、大声で挨拶する。

これには蓮華と孫権ガンダムは少し驚く。

蓮華

「そ、そう、よろしくね」

呂蒙

「はっ！」

蓮華

「げ、元気なのはよろしいけど、夜は遅いし、大声を出すのはー」

呂蒙

「申し訳ありません！
以後気をつけー」

蓮華はそっと呂蒙の口を瞑らせる。

口パクで『静に』と伝え、呂蒙は思わず紅くなる。

蓮華

「それじゃ、始めるわよ」

孫権ガンダム

「わかった」

孫権ガンダムは蓮華に招かれる。

呂蒙はぼーっと紅くなりながら立っていた。

*

「「孫子いわくー」」

その後も、呂蒙は蓮華の部屋の警護を続ける。

部屋の中では、蓮華は孫権ガンダムと一緒に孫子の本を音読させていた。

呂蒙

「お二人の孫権様は今夜も学問に励んでらっしゃる。私が警護の任に就いてからも一日足りも勉強を欠かしていないとは、なんと熱心な。女性の孫権様のお声は凛々しくて落ち着きがあつて、そしてどこか優しいさがあつて……」

思わずうつとりしてしまふ。

すぐにはっと正氣に戻る。

*

そんなある日。

蓮華の部屋からいつもの2人の声が聞こえなかった。

呂蒙

「どうしたんだろう、今日は学問をなさる声がしない。
……これまで、こんなことは無かったのに」

呂蒙は氣になり、戸に耳を当てて聞こうとした時、突如、戸が開く。

呂蒙は慌てて持ち場に戻る。

蓮華が出てくる。

呂蒙

「どちらへ!?!」

蓮華

「ちょっと外の空気を吸おうと思ってー」

呂蒙

「お供します！」

呂蒙は緊張して、思わず蓮華の部屋を覗く。

孫権ガンダムはなにやら筆で何かを書いていた。

蓮華

「どうかした？」

呂蒙

「あつ、いえ！ 今日書を読む声が出なかったので、学問をしていないと思ひまして……」

モジモジしてしまう。

蓮華

「今日は兵舎の中で団地と思ったところを孫権に書き写してもらっていたのよ。声に出して読むのも良いけど、こうするとより内容を深く理解できるのよ」

呂蒙

「そうでしたか、そうとは知らず失礼しました」

すると、蓮華は呂蒙の顔を覗く。

蓮華

「呂蒙、貴女もしかして学問に興味あるの？」

呂蒙

「は、はあー」

蓮華

「それなら、孫権と一緒に勉強しない？」

呂蒙

「へっ？」

次回に続く。

第四席 孫権ガンダム、甘寧に厳しく鍛錬してもらったこと。(後書き)

いかがでしたか？

感想とご意見をお待ちしております。

第四席（その2） 孫権ガンダム、呂蒙と試験を受けるの（前書き）

蓮華に誘われた呂蒙は……

第四席（その2） 孫権ガンダム、呂蒙と試験を受けるのこと

「そ、孫子……」

「孫子いわくよ」

「孫子いわく 国のだい」

「孫子いわく 国の大事なりよ」

蓮華は呂蒙に『孫子の本』を読ませていた。

孫権ガンダムはそんな2人を見守る。

「……って、いいのでしょうか！？ 私なんかと一緒にじゃ、2人の孫権様の学問がはかどらないんじゃない？」

と呂蒙は心配する。

「そんなこと無いわ。 人に教えることは教える人にとってもいい勉強になるわ」

「けど、私には警護の任がありますし——」

蓮華は呂蒙の肩に手を置く。

「扉の前に立っているよりより、こうやって私のそばに居れば、より私のことを守れると思わない？」

「それは……まあ、その……」

恥ずかしく返答する。

「それじゃ、次を読んでみて」

「は、はい」

こうして、勉強を再開させる。
しかし……。

「どうしたの？ 読めない字じゃないでしょ？」

「すみません……のうなるの……」

呂蒙の発音があまり良くなかった。

「なんか様子がおかしいな」

本を近づけて読む呂蒙を見て2人の孫権は、

「呂蒙、貴女……」

「目が良くないんじゃない？」

と気付く。

「あつ、すみません！ 自分の目つきが悪いのは、従順承知しています。でも、これは、気に入らないことがあるとかそういうわけじゃなくて……生まれつきで……」

「違う違う、目つきじゃなくて、目が悪いんじゃないかって」

「えっ？」

「呂蒙、何本に見える？」

少し離れた所から孫権ガンダムは三本の指を見せて見せる。

「からかわないで下さい。いくら学が無いからと言って、数くらい……」

「いいから、数えてみて」

呂蒙は言われたとおりに数えようと、孫権ガンダムの指を見る。

「……三本。 いや、二本。 三本…… やっぱり二本——」

「やっぱりだね。 あの時の目つきは、目が悪かったからか」

孫権ガンダムは鍛練の時、呂蒙が睨んだ意味を理解する。

「今度、貴女の務めが休みの時、一緒に眼鏡を買いに行きましょう」

「はい。 …… って、ええっ!？」

んで、呂蒙の休みの日に眼鏡を買いに、蓮華と呂蒙は出かけた。

「あいた！」

「甘い！」

呂蒙は休みでも孫権ガンダムは休みではないので、甘寧の厳しい鍛練を受けていた。

*

「うわっ、似合っているよ」

「そ、そうですか？」

片目眼鏡を買ってもらった呂蒙は、孫権ガンダムに誉められ照れる。

「お陰でよく見えます」

すると、呂蒙は孫権ガンダムをじっくり見る。

「改めて見ても、やはり私達とは違いますね」

「そうだね」

「孫権、貴方にもお土産があるわ」

蓮華はお土産の包みを孫権ガンダムに手渡す。

「これは何？」

「呂蒙の眼鏡をかうときに見つけたのよ。貴方の頭じゃあ、普通の眼鏡が入らないから」

確かに孫権ガンダムの頭の大きさは蓮華や他の者の頭より大きかった。

「どんな眼鏡かな？」

包みを開き、早速掛けてみた。

それは、白い仮面だった。

「……蓮華、これは？」

恐る恐る尋ねる。

「その白い眼鏡は『赤い彗星』と呼ばれた武将が掛けていたって、店主が言っていたわ」

笑顔で説明する。

「いや、眼鏡と言うより仮面じゃあ……」

「似合っているわ、孫権」

「……ありがとう」

蓮華の笑顔で、もう何も言わないことにする孫権ガンダムだった。

*

雨の日の夜更け。

森の奥にある小屋で……、

「なるほどな……」

闇の武将の胡玉ハイドラが怪しい者達となにやら相談していた。

「わかった、その役目は俺の手下にやらせよう」

「ありがとうございます」

「ご協力感謝します」

怪しい者達は深々と頭を下げる。

「なあに、俺は『孫家』に恨みがあるんだ。その『孫家』を滅ぼせば、何もいらぬわ」

胡玉ハイドラは不適に笑う。

*

【蓮華の部屋】

「試す？」

2人の孫権と呂蒙がお茶を飲む中、蓮華は言い出す。

「私の書いた問題を2人が解いて、そうね……七割正解していたら、合格ということにしましょう」

「2人って、俺も？」

蓮華はうなずく。

「って、突然そんなこと言われても——」

蓮華が止める。

「もちろん、すぐには言わないわ。試験は十日後。いいわね？」

「はあ……」

十日間、孫権ガンダムと呂蒙は猛勉強をした。
そんな十日間もあったという間に経つ。

試験の当日。

蓮華は2人の答案を採点する。

呂蒙と孫権ガンダムは気になって仕方が無かった。

採点が終わると、蓮華は深刻な顔つきで寢床に座る。

「れ、蓮華」

「試験の結果は？」

恐る恐る尋ねる。

「……試験の結果は……」

緊張感が漂う雰囲気になる。

「合格よ」

「へっ？」

蓮華の一言で、緊張感からあっけらかに変わる。

「お、驚かせないでよ……」

「ごめんなさい、あんまり緊張していたからつい……」

「でも、よかった。もし、不合格だったらどうしようかと……」

緊張のほぐれた呂蒙は寢床に倒れこむ。

「ああつ、私つたら、孫権様の前で無作法を！」

蓮華の寢床で、無作法してしまったと気づき、すぐに起き上がる
うとする呂蒙。

「そのままでもいいわ。3人きりなんだし、堅苦しいことは抜きに
して寝転がってお話しましょう。そっちの方が楽でいいわ」

「ハア……」

蓮華と孫権ガンダムも寝転ぶ。

「七割正解で合格って言ったけど、2人とも、八割以上正解してた
から、何かご褒美をあげなきゃね」

「ご褒美ですか？」

「そう、何がほしい？」

「……私を、私を孫権様のおそばに仕えさせてください！」

「それはだめよ」

「えっ？」

「だって、それは私からお願ひしたいことなんだから、貴女のご褒美にならないわ」

蓮華は呂蒙を抱き寄せるように手をかけて、優しく語りかける。

「孫権様」

呂蒙は嬉しく思う。

孫権ガンダムも微笑む。

「2人共、合格おめでとう」

「……ありがとう」

「ありがとうございます」

「ところで、孫権は何が欲しい？」

孫権ガンダムは考える。

「……俺をこの孫家の一員に——」

「何を言ってるの」

「えっ？」

「私も姉様も、貴方を孫家の一員と認めてるわ」

「そうか」

孫権ガンダムは嬉しく思うのだった。

*

3人で合格を祝っていた頃、闇の武人の水賊が屋敷の外壁をよじ登り、辺りを見渡す。

「だーれーも、いない」

不適に笑う。

次回に続く。

第四席（その2）

孫権ガンダム、呂蒙と試験を受けるのこゝ（後書き）

次回をお楽しみに！

第四席（その3） 孫権ガンダム、虎の覇気を魅せるのこと（前書き）

孫権ガンダム達に待ち受ける展開とは！？

第四席（その3） 孫権ガンダム、虎の覇気を魅せるのこと

「うーん……」

寢床で寝る3人の中で、蓮華が先に目覚める。蓮華は眠る孫権ガンダムと呂蒙を見て微笑む。

「そつとしておこつ」

蓮華は2人を起こさないように、静かに部屋から出る。

「「あつ！」」

蓮華が外を散策していると、倉から出てきた闇の武人（水賊）と鉢合わせする。

「お前は、あの時の！」

「チッ！」

「あ、待ちなさい！」

闇の武人は慌てて逃げ出すと、蓮華は追いかける。

闇の武人が屋敷の横に通ったところで、

「「あつ！」」

「げっ！」

目覚めた孫権ガンダムと呂蒙と鉢合わせする。

「しゃっ！」

「てりゃ！」

闇の武人は孫権ガンダムに襲い掛かろうとしたが、孫権ガンダムは瞬時に牙王剣を抜くと同時に闇の武人を斬り捨てる。

「ぐわっ！」

闇の武人は一瞬にして、闇に戻る。

「孫権、凄いわ！」

「一瞬にして倒すとは！」

「甘寧との鍛練が役立ったよ」

蓮華と呂蒙に誉められ、孫権ガンダムは照れると同時に甘寧との鍛練が役に立てたことを感謝する。

しかし、官舎へ戻る呂蒙と孫権ガンダムに待っていたのは。

「馬鹿者!!」

呂蒙は吹き飛ばされる勢いで甘寧に殴られてしまう。

「呂蒙!!」

この場に居た孫権ガンダムは呂蒙に駆け寄る。

「勤務中に居眠りするとは、何を考えているんだ! もう一人の孫権様が倒してくれたから良かった。だが、もし最悪なことになったらどう責任を取るつもりだ!」

烈火のごとく怒る甘寧は呂蒙の失態を激しく責める。

「甘寧、待ってくれ! 呂蒙は蓮華の試験に合格する為に、日夜勉強に励んでいたんだ! だから、その疲れで――」

「もう一人の孫権様!」

甘寧は弁解する孫権ガンダムを一喝する。

「これは、理由の問題ではありません! それに、この呂蒙は孫権様の部屋を警護させる為に居たのです。勉強させるために置いたわけではありません!」

「そ、それは……」

甘寧の言う通りだった。

呂蒙は蓮華の部屋を警護する為に配属されたのだ。

勉強は蓮華が言い出したことだから、孫権ガンダムは何も言えな

かった。

「失礼します」

「なんだ！」

報告しにきた親衛隊員は、怒る甘寧に怯える。

「く、倉を調べたところ、何も盗られた物はなかったそうです」

「わかった、ご苦労」

親衛隊員は出ていく。

「捕まえとけば、何をしていたのかを吐かせられていたものを……」

「……すまない、思わず倒さなければ……」

「……警護に当たった者は官舎で謹慎を命じる。持って沙汰を待て」

甘寧は部屋を出る前に。

「貴方も、しばらく官舎へは出入りしないで下さい。もっと、己の立場を考えて下さい」

孫権ガンダムにも厳しく伝えて、出ていく。

「……己の立場を考えてか……」

「……もう一人の孫権様……」

落ち込む孫権ガンダムを見て、呂蒙は責任を感じる。

＊

孫権ガンダムは肩を落しながら、自分の部屋に戻ろうとする。
その先に、蓮華が待っていた。

「蓮華」

「……孫権、呂蒙は？」

孫権ガンダムは少し躊躇うが。

「謹慎を言い渡された。俺も出入り禁止になった」

回りくどいことを無しに、はっきり答える。

「……謹慎後は、どうなるの？……」

「……わからない……」

すると、蓮華は突然泣き出す。

「蓮華！？」

孫権ガンダムは慌てて蓮華に駆け寄る。

「私が、私が不用意に外に出たから……。あの子の立場を考えずに勉強させたから……。あの子が此処を追い出されたら……」

蓮華は自分を責め続け、その場で泣き崩れてしまう。

孫権ガンダムは優しく蓮華を抱き締める。そして、心の中で何も出来ない自分を責める。

その翌日、官舎では――

「くそ、私は大馬鹿だ！ 大事な任務の最中に居眠りなんて――！」

呂蒙は頭を壁に叩きながら自分を責めていた。

「呂蒙さん、どうしたの？……」

そこへ、官舎の子供が入ってくる。

「なんでもないの」

呂蒙は明るく振る舞って誤魔化そうとすると、子供の持っていた笛に気付く。

「その笛は？」

「昨日、泥棒が入った倉に見に行った時に見つけたんだ」

呂蒙は笛を見て考える。

（倉から盗まれたもの？　けど、何も盗まれていないって。　なら、この笛は一体？　これが倉のものだとすれば……　そういえば、今日は……）

呂蒙は推測し、あることに気付き、部屋から出ていく。

「呂蒙さん、どこに行くの!？」

呂蒙の向かった先は――

*

謁見の間で、雪蓮と周瑜が旅芸人一座を迎えていた。　孫権ガンダムも居た。

今日、雪蓮が旅芸人一座の笛を聴きたいと招いていた。

「この度は私どものような旅芸人一座をわざわざお招きいただき感謝します」

孫権ガンダムは旅芸人の話より、蓮華と呂蒙のことを考えていた。

「構わないから、もっと近くに」

「では、お言葉に甘えて――」

笛を持った少女が雪蓮に近づこうとした時。

突如、扉が開き、呂蒙が現れる。

「呂蒙!？」

「孫策様、危ない!」

呂蒙が止めようとする、旅芸人の男がそれを止めようと立ちはだかり、少女は笛と見せ掛けた小刀を抜き、雪蓮に襲い掛かる。

*

孫家から離れた森の奥。 胡玉ハイドラと人間がいた。 2人の
後ろには、多くの闇の武人と武装した人間が控えていた。

胡玉ハイドラと人間の男が話をする。

「くっくっ。 今頃、孫策はあの世へ逝ったか」

「うむ、そうだな、厳白虎（げんはくこ）殿」

胡玉ハイドラは、男を“厳白虎”と呼ぶ。

「我が部下一人を犠牲にしたんだ。成功しなければ困る」

「盗みに入ったと見せ掛けて、実は毒を塗った刃を仕込んだ笛と倉の笛を取り替える。中々の策だ。万が一、見つかったも、跡形もなく消えてしまう闇の武人を行かせて良かった」

「倉の笛を使うという考えを逆手に取った！ ふっふっふっ、遂に孫家に一泡を——」

「吹かせたと思った？」

「な、何？」

胡玉ハイドラと厳白虎は声のする方へ向くと。

雪蓮と周瑜と孫権ガンダム率いる孫家の兵士達が居た。孫権ガンダムの後ろには、甘寧も控えていた。

「そ、孫策！？」

死んだと思っていた孫策を見て、胡玉ハイドラと厳白虎は驚愕する。

「あなたが、闇の武人の胡玉ね？」

胡玉ハイドラを見て、訊ねる。

「殺られてなかったのか？」

「うちの弟に、助けてもらったのよ」

雪蓮は孫権ガンダムのことを弟と呼ぶ。

〔回想〕

孫権ガンダムは瞬時に、雪蓮に襲い掛かる少女の前に立ち、小刀の刃を両手で挟んで止める。呂蒙はすかさず、少女に飛び掛かる。

〔現在〕

「チッ、気付かれてしまうとは……」

蔽白虎は悔しがる。

「だが、『飛んで火に入る夏の虫』だ。この場で孫策を殺れ！」

「そ、そうだ、お前ら、俺に続け！」

やけになった敵白虎を先頭に兵士と闇の武人達が突撃をする。

雪蓮が迎え撃とうすると、孫権ガンダムが先に前に出る。

「孫権！」

「何をしている、下がれ！」

雪蓮と周瑜は止めるが、孫権ガンダムは聞かなかった。

孫権ガンダムが仁王立ちすると、敵白虎は立ち止まる。

「な、なんだ、貴様！？」

「……貴様が暗殺の首謀者か？」

「だ、だったら、なんだ？」

「……雪蓮姉さんの命を狙おうとしたことだけでも許せないことなのに、蓮華を泣かせ、呂蒙にも辛い思いをさせた……」

「訳のわからないことを言ってるじゃ——」

敵白虎は孫権ガンダムを刀で斬ろうとした。

「俺は、怒っているんだ！！」

怒涛の如く怒る孫権ガンダムは覇気を発する。その覇気は虎の形を作り出した。

「うわあああああああつ！！」

嚴白虎は驚愕のあまり、腰を抜かす。 兵士や闇の武人達も腰を抜かす。

雪蓮も周瑜や孫家の兵士達も驚愕する。 甘寧も驚愕するが、真剣に孫権ガンダムを見る。

「……これ以上、俺を怒らせたいか？」

孫権ガンダムは嚴白虎を睨み付ける。

「も、申し訳ありませんでした！ お許しを！！」

嚴白虎は思わず刀を捨てて、土下座する。

闇の武人と兵士達も武器を捨てて土下座する。

「ば、馬鹿者！ お前（闇の武人）らはしなくて良い！」

胡玉ハイドラは怒鳴るが、自身も震える。

「貴方も震えてますよ」

笑いながら指摘する周瑜。

「このまま殺るつもり？ 明らかに負けるわよ」

胡玉ハイドラを諭すように、抜いた武器「南海霸王」を向ける雪蓮。

「お、覚えている!」

胡玉ハイドラが退却すると、闇の武人達も退却する。

「あつ、待て!」

周瑜は追いかけようとするが、雪蓮がそれを止める。

「蔽白虎とその一味を捕らえることに専念なさい。あのような輩、殺る価値は無い」

「……わかりました」

周瑜は孫家の兵士達に指示を下す間、雪蓮は孫権ガンダムを見つめる。

「……貴方の力、家族への想いは伝わったわ」

雪蓮は改めて、孫権ガンダムを孫家の一員と認める。

甘寧も孫権ガンダムの覇気に圧倒され、改めて認める。

その後、呂蒙は親衛隊を解雇されるが、周瑜の元で、軍師見習いをする事になった。

これは、暗殺を未然に防いだことと、甘寧の強い勧めがあつての

「とらしい。」

＊

屋敷の最上階で、甘寧は呂蒙の脱いだ禪を空へ飛ばす。

「高く、高く舞い上がれ、呂蒙。その志の赴くままに」

願掛けされ、舞い上がった禪は空の彼方に消える。

その後、禪はひらりと落ちてゆく。落ちた場所は――

「うわっ!？」

孫権ガンダムの頭だった。

前が見えなくなった孫権ガンダムは池に落ちたそうなの。

終わり

第四席（その3） 孫権ガンダム、虎の覇気を魅せるのこと（後書き）

次回は質問コーナーにします。

特別第四席 関羽ガンダム、呂蒙に萌えるのこと（前書き）

久しぶりの質問コーナーです。

特別第四席 関羽ガンダム、呂蒙に萌えるのこと

「お待ちかね、質問コーナー！」

「久々に俺達がやるぜ」

今回の担当は、久々に関羽ガンダムと張飛ガンダムです。

「今回のゲストはこいつだ！」

「は、はじめまして、呂蒙と申し……はみゅ」

ゲストである恋姫の呂蒙は緊張のあまりに嚙んでしまう。

「か、可愛い……」

関羽ガンダムは思わず、『可愛い』と感じる。

「はう……。どうかしました？」

「な、何でもござらぬ」

「そうですか」

思わず照れ隠しする関羽ガンダムに対して、その事に気付かない呂蒙であった。

「そんじゃ、読み上げるぜ。ペンネーム：呂布隊殿から質問が2

っ。

？テレビアニメ『真恋姫無双〜乙女大乱〜』が終わって約十一ヶ月、同じくアニメ『三国伝』は終わって二ヶ月になります。 関羽と張飛はアニメが終わってしまっってやはり寂しいと感じますか？

？今回のオリジナルの敵に出て来た敵白虎とは、『三国伝B B W 創世紀』に登場した敵白虎ドワッジがモデルですか？

？は古い質問だな」

「？の答えは、やはり寂しい。 ？の答えは、その通りだ。 呂布隊殿、納得したかな？」

「次は私が読みます！ すー、はー、すー、はー！」

深呼吸して、自分を落ち着かせる。

「ペンネーム：ぷよ髭の人殿からの質問が3つ。

？孫権ガンダムに見つめられた呂蒙が恥ずかしがっていましたが、なぜでしょうか？

？親衛隊が、孫権ガンダムの事を応援してましたが、そのうち孫権ガンダムのファンクラブみたいな事を始めるのではないのでしょうか？

？呂蒙が呂蒙ディジェの事を知ったらどんな反応するのでしょうか？

い、言えた〜」

「ご苦労であつた」

「それで、どうなんだ？」

「え、えーと……？はですね……見つめられたら、恥ずかしいですよ。？は、あり得ることもかもしれません。そして、？は……はわわ〜！？」

「ど、どうした！？」

「そ、想像で驚きました」

呆氣にとられる関羽ガンダムと張飛ガンダムだった。

「つ、次は拙者が読み上げよう。ペンネーム：龍の骨殿からの質問。」

劉備ガンダムと曹操ガンダムがBSAA学園！でハジケリストになつてしまいましたが、本人達をどう思っているんでしょうか？

ハジケリストって、なんだ？」

「詳しくは知らねえが……ハジケっているらしい」

「さっぱりわかりませんね」

という訳で、申し訳ございませんが、答えられません。

「気を取り直して、次の質問だ。　ペンネーム：ダーク殿からの質問。」

かつて三璃紗で死んだ公孫サンE28、孫策サイサリス、孫堅ゼフイランサス、黄蓋グフ、周瑜ヒヤクシキ、祖茂パワードジムは闇の武人出てくるのですか？

どうなんだ？」

「孫策サイサリス殿以外は出る予定らしい」

「な、なんで孫策サイサリス様は出ないんですか？」

「それは企業機密らしい」

「ダーク殿、申し訳ありません」

関羽ガンダムと張飛ガンダムは頭を下げる。

「で、では次の質問を読み上げます。　ペンネーム：百鬼丸殿からの質問。」

それでもしも孫尚香ガーベラと小蓮がであったどうなりますか？それから項羽ターンXは出て来ますか？」

「仲良くなるんじゃない？　あと、項羽ターンXは出ないって」

「いい加減な答えを言うな」

「だって、こう答えるしかねえよ。　ほら、次の質問を読み読め」

「……まったく。ペンネームKKK殿からの多数の質問。

？劉備ガンダムに質問です。仲間達の中で誰が怖いのですか？最低でも三人言ってください。

？曹操ガンダムに質問です。仲間達の中で最も信頼しているのは誰ですか？

？孫権ガンダムに質問です。最初に蓮華達に会った時に見せたとしてもないお土産（太使慈以外）はまだありますか。

？北郷一刀は出ますか？

？一度倒された闇の武人（馬元義ザク）は再登場しますか？

？蒲公英と璃々は出ますか？

？質問コーナーが終わった後は桃香達が彼と遭遇する腰になりますかね

や、やたらと多かった」

長く読み上げたので、疲れる関羽ガンダムでした。

「ご苦労様です」

「簡潔に答えさせてもらっぜ。

？『やっぱり怒った桃香と愛紗と黄忠（紫宛）かな。内緒だぞ』

？『当然、華琳だ』

？『はい、まだあります』

？出ません。

？登場しません。

？蒲公英は出るが、璃々はだいぶ先だ。

？ネタばらしの質問なのでノーコメント。

以上」

「では、最後の質問いきます！ ペンネーム：龍神殿から4つの質問です。

？関羽と張飛は桃香たちと義兄妹になってよかったですか？

？張飛には新必殺技『爆裂超雷蛟』はありますか？

？三璃紗にいる『翔』の皆さんはありますか？

？三璃紗の呂蒙と甘寧からの御土産はありますか？ それを見た亞莎と思春はどう反応しましたか？とても気になります。

どうなんですか？」

「拙者が答えよう。

？もちろんよかった。

？あります。

？お元気です。

？……当然、赤くなる」

「ど、どんなものですか？」

「し、知らぬ方が良い」

呂蒙は首を傾げる。

「という訳で今回はここまで」

「次回の質問をお楽しみしてください」

「さようなら」

終わり

特別第四席 関羽ガンダム、呂蒙に萌えるのこと（後書き）

今後の質問コーナーの為の注意書を示します。

？質問の追加は止めてください。

？質問する内容はちゃんと分けてください。

？作者に要求するのは止めてください。

？ネタばらしの質問は却下です。

？読みにくい質問は却下です。

？同じ質問は控えて下さい。

第五席 張飛ガンダム、父親と間違われるのこと（前書き）

久しぶりに桃香や張飛ガンダムの登場です！

第五席 張飛ガンダム、父親と間違われるのこと

赤兎馬を加えた桃香達一行は南蛮を目指していた。
そんな矢先に……。

「ねえ、お姉ちゃん、って、呼んで」

「……はあ？」

突然の桃香の頼みに、酒を飲もうとする張飛ガンダムは呆氣に取られてしまう。

団子を食べていた鈴々達も一緒に呆氣に取られてしまう。
因みに赤兎馬は荷物を背負っていた。

「いきなり何を言い出すんだ？」

「だって、貴方は張飛さんでしょ？　なら、劉備である私を、お姉ちゃん」と呼ぶのは当然でしょ？」

豊満な胸を揺らしながら胸を張って言い切る桃香。

「……アホか？」

「……ふえ？」

予想しなかった張飛ガンダムの返事に、桃香は呆氣に取られてしまう。

「いくら義兄妹の契りを結んでも、いくら同じ劉備だからって、あんたを姉とは認めてはいねえよ」

「ええっ、なんで!？」

桃香は張飛ガンダムの言葉に納得出来なかった。

「あまりにおっとりし過ぎて、姉というより、妹にしか見えねえよ」

「……確かに……」

張飛ガンダムの言葉と桃香の見た目を見て、思わず納得してしまふ鈴々達。

「因みに、俺的に六義兄妹の順序は、これだ」

「張飛ガンダムの順序」

長兄↓劉備ガンダム

次兄↓関羽ガンダム

長姉↓愛紗

三男↓俺

次姉↓桃香

末妹↓鈴々

「つて、愛紗さんは三番目ですか？」

朱里は目立ち屋の張飛ガンダムが、愛紗に三番目を譲ったことに驚いた。

「そりゃ、アイツは俺より歳上だからな」

張飛ガンダムの理由を聞き、桃香達は苦笑してしまう。

「愛紗さん、これを聞いたら絶対に怒りますね」

*

「ぶえつくしょん！」

「わっ！」

街道で、噂の愛紗は盛大にくしゃみをかまし、劉備ガンダムはびっくりさせた。

「ど、どうしたんだ！」

「いえ、なんだかとても腹がたつ悪寒を感じました」

遠く離れていても、『歳上』という言葉に反応し、額に青筋を浮かべてしまう愛紗だった。

*

「という訳で、俺はあんたを姉とは呼ばねえよ」

そう言つて、酒を飲みながら張飛ガンダムは歩き出した。

「……なんか、落ち込むな……」

張飛ガンダムの言うことに納得しつつも、落ち込んでしまう桃香。

「そついえば、孔明。茶店で誰と話していたんだ？」

呼び名の話題から茶店の話題に替えた。

「都から来た商人で、洛陽の様子を聞いてみたんです」

「ふーん、どんな様子だつて？」

「やはり行かなくて正解でしたね。朝廷は今や完全に董卓が牛耳つていて、酷い悪政を布いているそうです」

「悪政って、何なのだ？」

「酷い政のことです。重い税を課したり、大規模な土木工事を起こして、逆らう者は片っ端から牢に入れられる為に、民の間で怨嗟の声に満ちているとか」

「酷い」

「この世界の董卓も酷い野郎だな」

すると、鈴々は難しい顔になる。

「うーん……なんかおかしいのだ。鈴々は前に董卓にあったことがあるんだけど、そんな悪い奴じゃなかったのだ」

鈴々はかつて、董卓にあったことがあるのだ。

「そうなんですよね。私は本人を知らないのです、はっきりとは言えませんが……。董卓といえば、あの呂布さんの飼い主——もとい、ご主人なわけですから。そう思うとどうも腑に落ちないですよね」

鈴々と朱里の話聞き、張飛ガンダムは考えてみる。

「鈴々の言う通りだとしたら……その悪政をやっているのは奴なんじゃないのか？」

「奴？」

「奴ってのは——」

張飛ガンダムが言おうとした時、一行の背後から1人の少女が走ってきて、ぶつかって来た。

「「「わっ!」「」」

その時、馬岱の団子が落ちてしまう。

「あああっ! あゝあ……」

ぶつかった少女は何も言わずに逃げてしまう。

「あっ、待て、ぶっ飛ばしてやる!」

怒った馬岱は武器の影閃を振り回して追いかけてしまう。

「ああっ、待て!」

張飛ガンダムは馬岱を追いかけていく。

*

「「「うりゃあああ」」

「馬鹿、やめろ!」

馬岱は張飛ガンダムの制止を聞かず、少女を斬りかかろうとした。

「ふん！」

少女は携えた剣で一撃を受け止め、払いのけた。

「おっ、なかなかやるな！」

思わず、少女をほめてしまう。

「何のつもりだ？」

「団子の恨み、晴らさせてもらうぞ！」

少女は馬岱の攻撃をうまく受け流していく。

「ほう、なかなかの剣捌きだな」

張飛ガンダムは2人の打ち合いを観戦してしまう。

「ガキの癖になかなかやるな」

「何を！」

少女は余裕で、馬岱は息切れたった。

（やっぱり本気出していないな）

「もう少し遊んでやりたいが、今はその暇が惜しい。決着ケリを着けさせてもらうっ！」

少女はさっきよりも速い剣捌きで馬岱を追いつめた。
馬岱は追いつくのがやっとだった。

「うわっ！」

後ろへ追い詰められている内に、うつかりと石に躓いて、尻餅をついてしまう。

「貰った！」

少女は剣を振り上げて、斬ろうとした瞬間、馬岱は目をつぶってしまふ。

しかし、張飛ガンダムが少女の剣を武器の雷蛇で受け止めて、馬岱の窮地を救った。

「それまでだ」

少女は後ろへ下がる。

「何だ、今日はちびの特売日でもやってるのか？」

「ふっ、見た目はちっさいが、大人だぜ」

少女はすぐに剣を構える。

「まあ、待ちな！　ここは大人のやり方で決着「ケリ」をつけさせてもらっ」

「大人のやり方？」

「何でもいいから、やっちゃえ」

「おう」

張飛ガンダムは拳に息をかけて殴った。

馬岱の頭を。

「痛っ！」

これには、強気な少女も呆気に取られた。

「何すんだよ！？」

「お仕置きだ」

「お仕置きなら、あいつにしろよ！」

「馬岱、お前はこいつに何をした？」

「ぶっ飛ばそうとしたただだよ」

「何故だ？」

「団子を駄目にしたからだ」

「団子を駄目にされたからぶっ飛ばす……そんな理屈がまかり通るか！」

張飛ガンダムの怒鳴り声で、馬岱はひっくり返ってしまう。

「いいか、団子なんて物は新しく買えば済む問題だ。なのに、それを暴力で済ませようするなんて、正しいと思うか！」

「ぶっかってきたアイツが悪いんだ！ 謝っても済むもんか！」

「いくら相手に非があるからといって、アイツをぶっ飛ばして、怪我を負わせていいのか？ それこそが謝って済む問題じゃない。違うか？」

張飛ガンダムの言ったことは合理的であった。

「ちょっと、どっちの味方なんだよ！」

「別にあいつに肩入れしてるわけじゃねえよ。少なくとも、お前のことを思ってるんだよ」

納得できない馬岱を後回しにして、少女の方へ顔を向ける。

少女は思わず緊張してしまう。

「よう、嬢ちゃん。 何で急いでたか知らねえが、人にぶっつかつておいて、逃げるなんざ、武人どころか人としてあるまじき行為なんじゃないのか」

「うっ！」

「せめて謝罪するのが、筋じゃないのか？」

少女は張飛ガンダムの正論に何も反論できなかった。

すると、どこと無く拍手が聞こえてきた。

それは後から来た桃香たちであつた。

「名裁きです」

「凄い凄い」

「何かわからないけど、見事なのだ」

「あ、どうも」

誉められ、張飛ガンダムは照れてしまう。

「ああっ！」

少女は桃香を見かけた途端、心を奪われてしまった。

「……どうした？」

少女の異変に気付いた張飛ガンダムは少女に近づき、様子を確認してみると、森の奥から物音がした。

一同は向いてみると、大きな金棒を持った女性がいた。
凛々しい顔つきで髪に簪を刺し、かなりでかい胸の持ち主であつた。

「誰だ？」

*

「申し訳ない！」

張飛ガンダム達は、茶店で女性の謝罪の言葉を受け止めた。

「お前も謝らんか！」

少女は頭を下げられる際にちやぶ台に頭をぶつけた。
これを見た桃香達はびっくりした。

「わしはこの‘巴郡’を治める‘嚴顔’と申すものじゃ。そして、
この馬鹿（少女）は‘魏延’と申す弟子じゃ」

「太守様！」

「うむ。幼い頃からこの魏延に武芸を教えておったが、最近では
腕が立つことを鼻にかけ、ゴロツキどもと喧嘩ばかりして人様に迷
惑ばかりかけておっての。今日こそはお灸を据えようとしたのじ
やが、卑怯千万にも逃げ、またしても人様に迷惑かけた」

「まあまあ、こっちも乱暴を働いてしまったんだ。こっちも謝ら
せて貰う。馬岱——」

馬岱はふてくされながら団子を食べていた。

「お前も謝れ！」

馬岱も頭を下げられる際に、ちやぶ台に頭をぶつけた。

「何すんだよ！」

「お前も謝る責任があるだろ。しかも、こんなに団子を弁償させてもらったんだぞ。しかも美味しい酒までご馳走になってんだから」

そう言いながら、張飛ガンダムは酒を飲み始めた。

「いやいや、酒は貴殿の器の大きさに敬を評しているんじゃ。よく見れば、見たことの無い奇っ怪な姿じゃが、見事な父親ぶりじゃ」

敵顔の発言に張飛ガンダムは思わず酒を嘔いてしまった。

「「「わっ、汚い！」「」」

桃香達は張飛ガンダムが嘔いてしまった酒をすぐさま避けた。

「「ごほっ、ごほっ……父親！？」

「何、違うのか？」

敵顔は張飛ガンダムの風格を見て、本当に父親だと思ったらしい。

「いやいや、俺は子供を持つ年頃じゃあねえよ」

自分は老けていないと主張したい為か、慌てて否定した。

「まったく、老けて見えるのは、愛紗だけで充分だぜ」

張飛ガンダムの発言に、苦笑してしまう桃香達であった。

＊

「ぶえつくしょん!!」

「」「わっ!?!」「」

今度は飯屋で、ラーメンを食べながら盛大なくしゃみをかまし、劉備ガンダムだけではなく、他の客までびっくりさせた愛紗。

「……ずびません。　　またしても腹が立つ悪寒がしました」

鼻から麵を出しながら、額に青筋を浮かべた愛紗であった。

＊

厳顔は詫びきれぬとばかりに桃香達を屋敷に招いた。

「厳顔様、お帰りなさいませ」

「うむ、変わりはないか」

「はっ」

桃香達は、厳顔が本当に太守だったことに驚いた。

「本当に太守様だったんだ」

「全然、そうには見えないね」

「駄目ですよ、そんなことを言ったら」

朱里が慌てて桃香と馬岱を注意した。

「厳顔は全然太守に見えないけど、本当に太守だったのだ」

「はっはっはっ、わしが太守に見えぬか！」

正直に答えた鈴々に大笑いする厳顔。

「俺も意気の良い姉ちゃんかと思っただぜ」

「嬉しいことを言うの。　こう見えても年上なのじゃが」

「いやいや、桃花村に留守番しているおばちゃん2人より若く見えるぜ」

張飛ガンダムがにこやかに笑うと、張飛ガンダムの脳天に1本の矢が刺さった。

「「「ええっ!?!」」」

突然の出来事なので、桃香達は驚愕し、張飛ガンダムは倒れてしまった。

「「「張飛^{さん}!」」」

一同は慌てて張飛ガンダムに駆け寄った。

いったい誰が張飛ガンダムを!?

*

「いかなされた?」

桃花村で留守を任された関羽ガンダムは璃々と遊びながら問い出した。

窓から空にめがけて矢を放った黄忠に。
隣には何進もいた。

「突然苛立ちまして、何故か、矢を空へ放ちたいと思ひまして……」
「妾も何故か苛立つた」

放ったのは黄忠でした。

次回に続く。

第五席 張飛ガンダム、父親と間違われるのこと（後書き）

ウケました？

年増ネタの3度目は黄忠と何進にしました。

第五席（その2） 張飛ガンダム、魏廷を諭すのこと（前書き）

張飛ガンダムと魏廷の話です。

第五席（その2） 張飛ガンダム、魏廷を諭すること

「うーん……」

頭のとっぺんに矢が刺さって倒れた張飛ガンダムが目覚めた。
目覚めた場所は、寝室だった。

そして、張飛ガンダムは兜を脱がされ、包帯が巻かれていた。

「ここは……」

「気がつきましたか？」

眠る張飛ガンダムの横に、朱里が座っていた。

「孔明、俺はいったい——」

「頭のとっぺんに、突然矢が刺さったんです。 本当にびっくりしました」

朱里は、張飛ガンダムの様子を伺い—安心した。

張飛ガンダムは頭に包帯が巻かれてることに気付いた。

「これは？」

「あ、私がやりました」

「えっ!？」

朱里が巻いてくれたことに張飛ガンダムは驚いた。

「孔明は治療もできるのか？　すげえな」

「いいえ、そんな」

張飛ガンダムに誉められ、朱里は照れてしまう。

「しかし、見た目が全く違う奴の治療を良くできたな」

張飛ガンダムは不思議に思った。

「ああ、それはですね、いつももう一人の劉備さんの治療しているからです」

「えっ、うちの兄貴？　兄貴はよく怪我しているのか？」

「はい、よく怪我しましたよ、桃花村で」

朱里は呆れながら、劉備ガンダムが怪我をする理由を語りだした。

*

ある時は、愛紗が武芸に磨きをかけているのを見かけて、「相変わらず綺麗だな、愛紗の武と黒髪だけは」と誉めたつもりが、言葉が足りなかったせいでズブリと刺された。

またある時は、黄忠が綺麗な簪を髪に刺して見せたところ、「あつ、見事に年齢を誤魔化して美しいよ」と禁句を言って、簪で首を突き刺された。

またまたある時は、馬超が急いで厠に入ろうとした時、厠は満員であつた。その時、劉備ガンダムは「早く出てやってくれ、馬超がお漏らししてしまう！」と大声で叫んだので、馬超に頭を掴まれ、思い切り首を曲げられた。

という具合で、朱里はいつも劉備ガンダムを治療してあげた。

*

これを聞かされた張飛ガンダムは納得して苦笑するしかなかった。

さて、その劉備ガンダムというと……。

「あつ、兄上、見てください」

愛紗は店に置かれた綺麗な三味線を見せる。

「綺麗な三味線だな」

「これを弾いたら、私も女子らしく見えますか？」

愛紗は頬を染めながら劉備ガンダムに訊ねてみた。

「あっはっはっ、三味線の前に料理が美味くできれば、女子らしいよ」

と高笑いした劉備ガンダム。

【しばらくお待ちください】

「まったく、兄上の馬鹿！」

愛紗は怒って去り、劉備ガンダムは、三味線の弦で首を絞められ、木に吊るされた。

*

「ん？」

向こうの寝床で横たわる桃香がいた。
身体をタオルで巻き付けて、湯冷めしていた。

「ありゃ、どうした？」

「ああ、劉備さんがお風呂に入っていた時、魏廷さんが背中を洗ってくれたのですが……色々やり過ぎちゃったみたいで、湯冷めしちゃいました」

朱里は顔を染めながら説明をした。

「……あいつ（魏廷）、本当に迷惑ばかりかけているな」

心底、魏廷に呆れる張飛ガンドムだった。

*

翌朝のこと、

「何だと!？」

突如、馬岱の怒鳴り声が響いた。

「どうしたんですか!？」

桃香達が駆け付けてみると、馬岱と魏廷がにらみ合いをしていた。

「こいつが、蒲公英の武術を『小便臭い子供の遊び』だって」

「本当のことを言って何が悪い」

「何を!？」

馬岱は武器・影閃を構える。

「止めるのだ！」

「止めるな張飛、こいつを一発ぶっ飛ばさなきゃ気が済まない」

「止めとけよ」

張飛ガンダムは割って入ってくる。

「馬岱、お前は一度負けただろ」

呆れたように馬岱を諭した。

「今度は勝つ！」

「意気込みだけで勝てるほど、武術は甘くはないぜ」

張飛ガンダムは魏廷の前に立つ。

「だが、一生懸命修行している奴を馬鹿にする奴に、武術を語る資格は無いぜ」

「何？」

「いっぺん、てめえの鼻をへし折ってやろつか？」

張飛ガンダムは雷蛇を構える。

「いい加減にせぬか！」

渡り廊下から敵顔が2人を止めた。

「焰耶、わしの部屋へ来い」

＊

「焰耶、わしはお前に『無闇に喧嘩をするな。己の力の意味を知れ』と何度も申した」

魏廷は敵顔の説教を受けていた。

桃香や張飛ガンダム達は静かに見守るしかなかった。

「だが、お前はそれに耳を貸さず、己の武を示すために剣を振るう」

敵顔は紙に自分の名と魏廷の名を書く。

「ここにわしとお主の名を書いた紙を師弟証とする。この紙を紙撚りにして剣に結び付ける。剣を抜くか、この紙を切れば、師弟の縁が切れたとして、お主を破門にする、良いな」

魏廷は強く拳を握る。

「……敵顔、何もそこまでする必要は無いんじゃない——」

「これは師弟の問題、客人とはいえ、口出し無用じゃ」

敵顔の厳しい言葉に張飛ガンダムはたじろぎ、魏廷を心配する。

＊

魏廷は川辺で寝転んでいた。

よほど、喧嘩禁止が堪えたようだった。

「おっ、ここにいたか」

雷蛇を持つ張飛ガンダムが声をかけた。

「隣、良いか？」

「……ああっ」

張飛ガンダムは魏廷の隣に座り込んだ。

「……桃香と一緒に行かなかったのか？」

「うっ、うむ。あいつが……あの馬岱と居ると、喧嘩になるからな」

「ははっ、確かにな」

張飛ガンダムは納得して苦笑した。

「……禁止って、言われるほど、無闇に喧嘩するなよな」

「お前には、関係無い」

魏廷はそっぽをむく。

「いや、連れの馬岱に迷惑をかけた時点で関係無いとは言えねえだろ」

この指摘に、魏廷は黙り込んでしまう。

「お前は喧嘩したい為に、強くなったのか？」

「……忘れた……」

「……お前は確かに強い。その強さを手に入れるまで、長く努力を積んだはずだ。それなりの理由を本当に忘れたのか？」

「……なら、お前はどんなんだ？ 何のために強くなったんだ」

逆に問われた張飛ガンダムは頭を掻きながら語り始めた。

「最初は、天下無双を目指していたけど……その為に守るべき村を守れなかった」

魏廷は『守れなかった』という言葉に反応した。

「村を守るために、夢を諦めたが、もう1人の劉備である、兄貴と関羽と出会って、三璃紗の平和を守るために、義兄弟の契りを結んだ」

「三璃紗？」

「ああつ、俺の居た世界のことだ。その後、3人で旅を続けて、悪い奴らをギツタンギツタンにやつつけていた」

「つまり喧嘩か」

「違う。誰かを助けたい、守る為の戦いだ」

「守るため？」

「喧嘩は自分の為。戦いは誰かの為にやるもんだ。……という俺もお前のように喧嘩に明け暮れた時があったよ」

「えっ？」

これを聞いた魏廷は驚いた。

張飛ガンダムはその時のことを語りながら思い浮かべた。

*

劉備ガンダムがいなくなって、日も経たない頃の【三璃紗の世界】
でのこと……。

「うりゃあ！」

張飛ガンダムはごろつきと喧嘩をしていた。

「どうした？ 物足りないぞ！」

張飛ガンダムはごろつきの胸元を掴み、睨み付けると、

「やめんか、張飛！」

関羽ガンダムと趙雲ガンダムが駆けつけてきた。

「……髭……」

張飛ガンダムは手を離す。

趙雲ガンダムはごろつきに謝罪し、関羽ガンダムは張飛ガンダム
を叱りつける。

「まったく、お前はいったい何をやっているのだ。酒浸りするわ、
喧嘩ばかりして、人様に迷惑をかけるな」

「放ってくれよ」

「できぬから、止めにきたのだ。今のお前を見たら、劉備殿は――」

「兄貴の話をすんな！」

投げ槍になった張飛ガンダムは駆け出していた。

関羽ガンダムと趙雲ガンダムは、そんな張飛ガンダムを見て戸惑った。

遠く離れて見ていた孔明リ・カズイも心配で仕方がなかった。

張飛ガンダムは湖の畔に座っていた。

「……兄貴……」

湖を見ながら、劉備ガンダムのことを考えていた。

そんな張飛ガンダムに近づく孔明リ・カズイ。

「そんなに劉備さんのことが恋しいのですか？」

「……孔明か……」

「隣、よろしいですか？」

「……好きにしな……」

孔明リ・カズイは張飛ガンダムの隣に座った。

「……説教しにきたのか？」

「それは後にします。今は張飛さんの相談しに来ました」

「相談？」

「今、あなたが抱えているものを取り除きます」

孔明リ・カズイの意外な言葉に張飛ガンダムは驚いた。

「劉備さんがいなくなった貴方の心に悲しみが満ちています。その悲しみを晴らす為に酒に逃げ、ごろつきに暴力を振るって晴らしているのですね」

孔明リ・カズイの指摘された張飛ガンダムは黙り込んでしまう。

「それで晴れましたか？」

「……いいや……」

「何故だと思います？」

「わからねえ」

「……あなたの望んでいることでは無いからです」

張飛ガンダムは驚いた。

「あなたの心から望んでいることを……本当に何をするべきことはなんですか？」

張飛ガンダムは長く考え、孔明リ・カズイは待った。

「……兄貴を探したい……」

「なるほど。……しかし、その考えは関羽さん達も同じ筈。何故、そうしないと思いますか？」

「そ、それは……なんだよ」

「いなくなった劉備さんの穴を埋めているんです。もし、劉備さんを探しに行けば、その間に民の方々は迷ってしまいます。そんな民の方々が迷わないように導き、支えているのです」

張飛ガンダムは驚いたと同時に納得した。

「関羽さん達が、自分を捜すために民の方々から離れたと劉備さんがもし知ったら、怒ると思います。もちろん、貴方の今の行いを知れば、当然怒るんじゃないのですか？」

これを聞いた張飛ガンダムは気付いた。

確かに劉備ガンダムが知れば、怒ると同時に悲しむ。

「お、俺って、奴は……」

張飛ガンダムは自分の行いに激しく後悔した。

そんな張飛ガンダムの方に手を置く孔明リ・カズイ。

「わかってくれれば良いです」

「……孔明、俺はどうしたら良いんだ？……」

「まずは迷惑かけたことを謝罪してください。そして、どうするべきか、ゆっくり考えましょう」

孔明リ・カズイは優しく張飛ガンダムを諭した。

「……乱暴な俺は変われるか？」

「私もできる限り協力しましょう」

*

「その後、戦以外で暴力を使わないように心掛け、孔明から物事を見て、相手の意見を聞くことを学んだ」

話を聞かされた魏廷は感動した。

「……私は……姉がいた」

張飛ガンダムは魏廷の話を黙って聞く。

「姉は病弱なのに、いつも私に優しくしてくれた。しかし姉は亡くなった。桔梗様に引き取られ武芸に明け暮れて、悲しい気持ちを吹き飛ばそうとした。だが――」

「いつの間にか、喧嘩に明け暮れたってか」

魏廷は頷く。

「俺と同じだな」

「しかし、劉備殿と出会った時は驚いた。姉が生き返ったかと思っ
た」

「お前の姉貴って、桃香に似てるのか？ 俺から見れば、姉という
より妹にしか見えねえよ」

張飛ガンダムは思ったことを口にした。

「そんなこと無い。あの美しい桃色の髪に合う可愛らしい顔つき、
柔らかくでかい胸を持つ、あの方こそ姉に相應しい」

「どれだけ褒め称えるんだよ」

張飛ガンダムは啞然した。

「張飛殿はあの方を姉とは思わないのか？」

「だから見た目は——」

「中身を知ったのか？」

「中身？」

「私には解る。劉備殿は姉と同じ優しさと強さを持っている」

「……優しさはともかく、強さを持っている——」

すると、数人のごろつき達がやって来た。

「よう、魏廷」

「……なんだ、コイツらは？」

「町のごろつきだ」

「つれない挨拶だな」

「アニキ、見慣れない奴もいますけど、どうしやす？」

「構わねえ、一緒にやっちまいな」

張飛ガンダムと魏廷を囲む。

魏廷は剣を抜こうとすると、張飛ガンダムが止める。

「止める。約束を破る気か」

「そうだぞ、約束を破ったら破門だろ？」

「くっ……」

魏廷は苦虫を噛むように悔しがる。

「魏廷になんか用か？」

「今までの礼を返すのさ」

張飛ガンダムはすぐに勘づいた。

「なるほどな、魏廷が喧嘩できないことを知って、仕返しかな？」

「その通りよ、こいつには散々痛い目に合ったからな」

張飛ガンダムは、呆れたようにため息を思い切り吐いた。

「けっ、どいつもこいつも、魏廷に倒されてもしょうがないゲスどもだな」

「何だと、てめえから殺られたいかな？」

「張飛殿！」

魏廷は止めようとするが、張飛ガンダムはそれを拒む。

「こんなゲスども、お前の手を煩わせる必要は無いぜ」

笑って答える張飛ガンダム。

「何だと！」

アニキは剣で叩き斬ろうとしたが、張飛ガンダムは難なく避けた。避けた瞬間、張飛ガンダムはアニキの顔面に左の拳を打ち込んで吹き飛ばした。

他のごろつき達や、魏廷は驚いた。

「なんだ、やわだな」

「このやろっ！」

デクが跳んで、張飛ガンダムを腹で押し潰そうとした。

しかし、張飛ガンダムは難なく腹を受け止め、軽々とデクを回して、川へ投げ捨てた。

「軽い軽い」

「くそ、一斉に掛かれ！」

チビの合図に、武器を構えたごろつき達が張飛ガンダムに襲いかかった。

殴る蹴るわと乱闘となり、生き残ったのは……、

「話にならねえぜ」

張飛ガンダムだった。

張飛ガンダムは無傷に比べ、ごろつき達はぼろぼろと負傷していた。

「っ、強い」

張飛ガンダムの闘いぶりを見た魏廷は驚愕した。

「あの体型なのに、大きな者を、それもあれだけの数を負かすとは……」

「へっ、伊達に戦に出ていねえよ」

張飛ガンダムは威張った。

「に、逃げる！」

アニキの呼び声で、ごろつき達が逃げ出した。

すると、逃げ出すごろつき達の前に、武器「破塵戟」を持つ衣を羽織った謎の人物が現れる。

「……邪魔だ」

謎の人物は破塵戟を片手で持ち、思い切り振ると、ごろつき達が吹き飛んでいた。

張飛ガンダムと魏廷は驚愕した。

破塵戟を持ち直した謎の人物は張飛ガンダムの目の前に立ち止まった。

「そ、その武器！」

張飛ガンダムは破塵戟に気付いた。

「ふん、久しぶりだな」

謎の人物は衣を脱ぎ捨て、張飛ガンダムは驚愕した。

「りよ、呂布!？」

謎の人物の正体は、三璃紗で、
戦慄の暴将、と呼ばれた“呂布
トルギス”だった。

次回に続く!

第五席（その2） 張飛ガンダム、魏廷を諭すのこと（後書き）

劉備ガンダムがお仕置きされる場面は、『必殺仕事人』をイメージして書きました。

次回もお楽しみに！

第五席（その3） 張飛ガンダム、桃香を姉と呼ぶのこと（前書き）

今回は盛りだくさんに書きました。

第五席（その3） 張飛ガンダム、桃香を姉と呼ぶこと

敵顔の屋敷内の庭で留守番する赤兎馬は何かを感じ取った。
赤兎馬は駆け出し、屋敷の門から出ていた。

＊

張飛ガンダムと魏廷の前に、呂布トールギスが現れた。

呂布トールギスは、ただならぬ覇気を放っていた。

張飛ガンダムだけではなく、初対面の魏廷ですら、圧倒されていた。

「な、なんだ奴は？　今まで戦ってきた奴ら——桔梗様ですら、あそこまでの覇気は放った事はないぞ」と魏廷は震えていた。

人としての本能在呂布トールギスを恐れていたのだ。

「……久しいな。まさか、貴様もこの世界へ来ていたとはな」

「呂布、なんでお前が此処にいるんだ？　確か、この世界の董卓の所で、居候していた筈だろ？　曹操と同じように」

＊

「居候ではない、曹操だ」

「……へっ？」「」

いきなり曹操ガンダムが、いつもの台詞を言ったので、配下である楽進（真名：凧）、李典（真名：真桜）、于禁（真名：沙和）は驚いた。

「曹操隊長、突然どうしました？」

「誰も『居候』なんて、言ってるんよ」

「……いや、誰かが言っていた気がしてな」

曹操ガンダムは不思議に思った。

「曹操隊長って、『居候』という言葉に敏感なの」

「曹操隊長は誇りが高いからな」

「紅蓮隊を結成しなかったら、ほんまに居候やったからな」

「居候ではない、曹操だ」

曹操ガンダムは、『居候』と言う言葉に反応すると、条件反射にこの台詞を言うのだ。

「ちゃんと名前を付けないで、『隊長』って、呼んじゃうと、また反応するんだよね、隊長」

「隊長ではない、曹操だ」

これにも条件反射に言うらしい。

「お店に入った時も、店員から『お客様』と呼ばれる時でも——」

「お客様ではない、曹操だ。ってな」

真桜は口真似をして、再現した。

「余は曹操だ。それ以外の何者でもない」

「流石は曹操隊長です！」

「……ほんまに誇りが高いわ……」

（意外にボケに入るかも）
風は曹操ガンダムを尊敬し、真桜と沙和は呆れた。

*

「って、今は曹操の出る幕じゃないだろ！」

張飛ガンダムは思わずツツコミを入れた。

「誰をつつこんでいるんだ？」

呂布トールギスは不意に聞いた。

「いや、楽屋的なツツコミだ。それは置いといて……何でてめえが此処にいるんだ！」

話を元に戻した。

「ある奴を探しに来た」

「ある奴？」

呂布トールギスが探すある奴とは、検討がついている。

「うちの兄貴か！？」

「いや、もう1人の劉備だ」

「何！？」

もう1人の劉備である桃香だと知り、驚愕した。

「もう1人の劉備？」

事情を知らない魏廷には、わからなかった。

「もう1人の劉備は何処だ？ 知らぬとは言わせん。この城下町へ入ったことは、門番に確認している」

張飛ガンダムは、呂布トールギスの問いに答えず、雷蛇を構える。

「ふっ、力ずくで聞けと言うか？」

呂布トールギスも破塵戟を構える。

張飛ガンダムと呂布トールギスの体から覇気が発せられた。

「行くぞ！」

呂布トールギスが先に動いた。

破塵戟を振り上げ、張飛ガンダムを狙う。

張飛ガンダムはすかさず雷蛇の刃で受け止めて、破塵戟を押し返した。

しかし、すぐさま破塵戟の直撃が襲うが、張飛ガンダムは瞬時に雷蛇を横に持ち変えて柄で破塵戟の柄を受け止めた。

受け止めてすぐに呂布トールギスを蹴り飛ばした。

呂布トールギスは片手と両足を地に付けて飛ばされる速さを抑えて、上手く踏ん張った。

そのあと、破塵戟を構えて張飛ガンダムに向かって行く。

張飛ガンダムも雷蛇を掲げて呂布トールギスに向かっていった。

雷蛇と破塵戟の刃が火花を散らしながら激しく打ち合った。

お互いの顔は激しい表情となっていた。

「す、凄い！」

離れて観ていた魏廷は二人の闘いに驚愕した。

＊

「あゝあつ。皆、何処に行ったのかな？」

橋の近くで、桃香はとぼとぼと歩いていた。

実は、うつかりと巖顔達とはぐれてしまったのだ。
橋を渡るうとした時、

「うん……ああつ!？」

張飛ガンダムと呂布トールギスの闘いを目撃した。

＊

張飛ガンダムと呂布トールギスは打ち合いを止めて、互いの武器を強くぶつけた。

この為、強い衝撃が発せられ、辺りの草が飛び散った。
そのまま柄と柄——腕力と腕力での押し合いとなった。

「腕は落ちていないようだな」

「貴様もな」

顔を近づけ、話をする。

「……しかし、いつものお前とどこか違うな……」

張飛ガンダムは呂布トールギスから発する気を感じ取っていた。

「いつもの闘いたいという気じゃない。その気はいったい？」

呂布トールギスは返事をしなかった。

「答えなきや、答えなくて良い。だが、アイツ（桃香）に手を出す
と俺が——」

「張飛ちゃん！」

「なっ……」

後ろを向くと、駆け寄る桃香がいた。

「と、桃香!？」

張飛ガンダムは驚いた。

「はっ、あれは!？」

呂布トールギスも桃香を見て驚いた。

＊

呂布トールギスは旅に出る前のことを思い出した。

洛陽城の城門から出ようとするとき、賈馱が見送りにきた。

「……ごめんなさい。あんたにこんなことを頼んで……」

賈馱は申し訳なく謝罪する。

「気にするな。俺にはこんなことしか出来ぬからな」

「……でも……」

「もし、アイツが——月が知ろうとしたら、『やはり俺には性に合
わんから出て行く』と言っておけ」

「……わかった……」

賈馱は重く答える。

「準備はできましたか？」

司馬懿がやって来る。

「……ああ、できた……」

呂布トールギスはぶっきらぼうに返事をしながら、衣を着る。

賈馱も無愛想に背を向ける。

「では、あなたが殺る劉備玄德の特徴を教えます。まずは髪の色は
美しい桃色です。そして」

司馬懿は自らの頭に被っていた衣を脱いだ。

司馬懿の素顔は——真っ赤な髪の色と鋭い目付き以外、桃香とそ
っくりだった。

「こんな顔です」

呂布トールギスと賈馱は司馬懿の素顔を見て、うっかりと目を奪
われた。

＊

「驚いた。確かに髪の色以外はそっくりだな！」

そう呟いた呂布トールギスは、桃香に氣をとられた張飛ガンドムを足払いで転ばした。

「うわっ！」

張飛ガンドムは倒れ、呂布トールギスは踏みつけられる。

「張飛ちゃん！」

桃香は慌てて駆け寄ろうとしたが、呂布トールギスは破塵戟の刃を張飛ガンドムの顔に突き付ける。

「貴様が劉備玄德に相違ないな？」

「あ、あなたは？」

「我が名は、呂布奉先だ！」

「呂布！」

呂布の名を聞いた桃香は、袁術の治める地で出会った呂布（真名：恋）を、その時の呂布トールギスの話を思い出した。

「もしかして、あなたが三璃紗から来た呂布さんですか！？」

「そうだ」

「何で、何であなたが此処に！？ しかも、何で張飛ちゃんを！？」

桃香はこの状況が解らず、混乱していた。

「俺は……お前の命を貰いに来た！」

「ええっ！？」

呂布トールギスの言葉に桃香はさらに混乱した。

「魏廷！ 桃香を連れて逃げるんだ！」

張飛ガンドムは魏廷にそう叫んだ。

「ええっ！？」

桃香と魏廷は驚いたが、魏廷は言う通りに桃香の手を握り、逃げようとした。

「動くな！」

呂布トールギスの一喝により、二人は止まった。

「劉備よ、貴様の命でこいつは助かる。さあ、選ぶのだ」

呂布トールギスは張飛ガンダムを人質に桃香の命を要求した。

桃香と魏廷は戸惑った。

「呂布、止める！」

張飛ガンダムはもがきながらも止めようとしたが、呂布トールギスが強く踏みつけるので動くことができなかった。

桃香は意を決し、呂布トールギスのところへ歩み寄る。

「劉備殿！」

魏廷は止めるが、劉備は無視する。

「馬鹿、来るな！」

張飛ガンダムも止めるが、聞かなかった。

「……わかりました。私の命を差し上げます」

「馬鹿野郎！ 俺なんか放つとけ——」

「放つとけるわけないでしょ！」

桃香の一喝は、先程の呂布トールギスの一喝より凄かった。

「私達は義兄妹でしょ！ 放つとけるわけないじゃない！ あなた言っただじゃない、『願わくば同年同月同日に死せんことを！』」

「って、お前が死んでも同じだろ！」

「見捨てても同じだよ！」

「この馬鹿！」

「あなたにだけは言われたくない！」

「何だと！？」

「何よ！？」

いつしか兄妹喧嘩となっっているの、呂布トールギスと魏廷は啞然した。

「この野郎！」

「うわっ！」

張飛ガンダムは雷蛇を手離し、両手で呂布トールギスの足を掴んで、押し返した。

「こつちだつて、お前に馬鹿呼ばわりされたくねえよ！」

「何よ、お姉ちゃんに対して、その口の聞き方は！」

「へん！ 兄貴より馬鹿なお前がお姉ちゃんなんて、チャンチャラ可笑しいぜ」

「失礼ね！ 鈴々ちゃんより賢いわよ！」

「けど、俺の方が賢いぜ！」

「何よ！ 少し賢いからつて、お兄ちゃん面をしないでよ！」

「んだと！」

「何よ！」

桃香と張飛ガンダムは睨み合つた。

その時、呂布トールギスは破塵戟を振り上げる。

「死ねえ！」

桃香と張飛ガンダムが振り向いた瞬間、大きな金属音が響いた。

「！？」

魏廷が剣を抜いて、破塵戟を受け止めた。

「魏廷！ お前、紙^し縫^{ぬい}を！」

そう、剣を抜いた瞬間、結んだ紙縫が破けた。

「ほう、貴様なかなかの腕だな。……だが！」

呂布トールギスは破塵戟に気迫と怪力を込め、受け止めた魏廷の剣を粉々に粉碎した。

「！？」

魏廷が驚いた瞬間、呂布トールギスは破塵戟の石突で魏廷の腹を打ち込んだ。

「うぐつ」と魏廷は倒れた。

「「魏^{ちやん}廷！」」

桃香と張飛ガンダムは駆け寄つた。

「劉備よ」

呂布トールギスは破塵戟を横へと大振りに構える。

「貴様に恨みは無い。そして、殺すには惜しい逸材だが……死んでもらう！」

呂布トールギスは振ろうとした次の瞬間、大きな影が現れる。

見上げると、それは跳ぶ赤兎馬だった。

「赤兎馬!？」

赤兎馬は呂布トールギスの前に着地し、回って後ろ足で蹴りあげた。

呂布トールギスは高く蹴り飛ばされた。

「……………赤兎馬……………」

呂布トールギスは赤兎馬を見つめた。

赤兎馬の目は哀しみに満ちていた。

「赤兎馬!」

「どこにいるんですか？」

鈴々達の声が聞こえてくる。

「……………くっ……………」

仲間が来たと知った呂布トールギスは走り去った。

呂布トールギスの心は赤兎馬との再会で戸惑っていた。

「赤兎——あ、張飛、お姉ちゃん!」

鈴々達は慌てて駆け寄ったことにより、窮地は去った。

気絶させられた魏廷を赤兎馬が運んだ。

*

その夜。謁見の間で桃香と張飛ガンダムが厳顔に土下座をしていた。

それは、魏廷が破門を覚悟で紙縊を破いたことを許して貰うために。

「厳顔さん、お願いします！ 剣を抜いたのは、私達を助ける為なんです」

「悪いのは、場を弁えずに喧嘩を——義兄妹の桃香を助ける為に仕方が無かったんだ！ だから魏廷の破門を勘弁してくれ!」

桃香と張飛ガンダムは必死に頭を下げて嘆願した。

「……事情はよくわかった。だが、いかなる理由があるかと魏廷は約束を破った。よって魏廷は破門する！」

「そ、そんな！」

「待ってくれ！ それじゃ魏廷が——」

「もう良いのです」

「気絶した筈の魏廷が入ってくる。」

「魏廷ちゃん！」

「もう良いのか？」

「ご心配をおかけしました、劉備殿と張飛殿」

「魏廷は敵顔の前で膝をつく。」

「……破門は慎んでお受けします。最後まで、ご迷惑をおかけして本当に申し訳ありません……」

「後悔はしないな？」

「……はい……」

「魏廷は言葉には悲しみが込められていた。」

「敵顔は玉座から降り立ち、魏廷の前に立つ。」

「傷は何とも無いのじゃな？」

「……はい……」

「張飛殿から聞いたが、その刺客は恐ろしい程に強かったか？」

「は、はい。……霸気だけであの者の……強さが……わかりました。」

「……この世には、私なんかより遥かに強い者がいると……身を持つて知りました……」

あの時の呂布トールギスに対する恐怖が蘇り、魏廷の心は激しく揺れた。

それを見た敵顔は魏廷を優しく抱き締めた。

「えっ……」

「魏廷は突然の抱擁に戸惑った。」

「無事で良かった」

「うつ……」

「魏廷は泣いてしまう。」

そんな二人を涙ぐましく見る桃香と張飛ガンダムには、「まるで
本当の親子だな」と思えた。

＊

その深夜、厳顔は酒を飲みながら、月を眺める魏廷を見て考えて
いた。

張飛ガンダムも寢床で眠る桃香を見て考えていた。

＊

桃香達が旅立つ際に厳顔と魏廷が見送る。

「本当にお世話になりました」

「道中気をつけてな」

桃香達は旅立った。

魏廷は桃香達を寂しそうに見送った。

「……ほれ、行きたいんなら早く行け！」

厳顔は魏廷の背中を押した。

「桔梗様？」

「一緒に行きたいんじゃない？」

「……行つてきます、桔梗様！」

意を決した魏廷は桃香達を追いかけようとする。

「待て！ 旅立ちの餞だ！」
はなむけ

厳顔は自分の武器、鈍砕骨を投げ渡す。

「ありがとうございます！」

魏廷が追い付くと、桃香と張飛ガンダム、そして赤兎馬も笑った。

「それじゃ、改めて行こうぜ、姉貴！」

「えっ……」

張飛ガンダムが桃香を姉貴と呼んだ。

「姉貴って、私のこと？」

「……認めてやるよ、桃香の姉貴」

笑って答えると、桃香も笑う。

新たな仲間、魏廷を迎えて旅立つ桃香達一行であった。

「おまけ」

「因みに新しく考えた義兄妹の順位はこれだからな」

長兄↓劉備ガンダム

長女↓桃香

次女↓愛紗

次兄↓関羽ガンダム

三男↓俺

末妹↓鈴々

「やっぱり愛紗は歳上だから、髭より上の二番目が良いな」

*

「ぶえつくしょん!!」

愛紗は盛大にくしゃみをかました。

「……またしても、腹が立つ悪寒が……」
額に青筋を立てる愛紗だった。

続く

第五席（その3） 張飛ガンダム、桃香を姉と呼ぶのこと（後書き）

笑い・驚き・闘い・感動・涙が詰まったお話は、いかがでしたか？

特別第五席 夏侯兄弟、敵顔と意気投合すること（前書き）

久しぶりにあの兄弟の登場です。

特別第五席 夏侯兄弟、敵顔と意気投合すること

「ふっふっふっ。やっと、やっと俺達の出番が来た！」

「待ってたぞ！」

夏侯惇ギロスと夏侯淵ダラスは久々の出番で気持ちが高ぶっていた。

「長かった。出番を待つのは本当に長かった」

「作者の更新が遅いから、だいぶ待ったぞ！」

作者（自分）の更新が遅かった為に出番をだいぶ待たされて泣く。

「おいおいメソメソするな！」

「うわっ!？」

敵顔が夏侯淵ダラスの背中を叩く。

「あ、あんたは？」

「ゲストとしてやって来た敵顔じゃ！ よろしく頼む！」

「ほう、威勢の良い姉ちゃんだな」

夏侯惇ギロスは敵顔を気に入る。

「ほれ、質問を読み上げい」

夏侯惇ギロスに質問表を手渡す。

「わかった。」

ペンネーム【龍の骨】殿からの質問が2つ。

1． 劉備ガンダム達に質問、『ゾンビゲームバイオハザードクロニクルズ』に恋姫キャラのクローンのように、劉備ガンダム達のクローンがいたらどうしますか？

2． 向こうの雛里先生に質問、『BSAA学園』で変わり果てた雛里先生をどう思いますか？

さて、聞いてみようか」

まずは、1は……。

「一緒に正義の為に戦う」と劉備ガンダム。

「武を競う」と関羽ガンダム。

「どっちが強いのか勝負する」と張飛ガンダム。

「余は一人で充分だ！」と曹操ガンダム。

「仲良くなる」と孫権ガンダム。

「ふっはははははは、たぎるわ！！」と呂布トールギス。

次は、2は……。

「あわわ、嘘だ、嘘だああああ！！」と泣き出す雛里。

以上。

「……この呂布トールギスは焰耶以上に喧嘩好きじゃな」

厳顔は呆れる。

「雛里には同情するな」

夏侯惇ギロスは同情する。

「次は俺が読もう」

夏侯淵ダラスは次の質問表を読み上げる。

「ペンネーム【ダーク】殿からの質問。

春蘭は曹操ガンダムの態度をたたきつぶそうと、どれだけ勝負を挑んで、手加減された状態でどれだけ返り討ちにあい負けているのですか？ おそらく全戦全敗だと思うのですが、ボコられる覚悟で聞いています。よければ教えてください。

…… 本当にボコられるぞ」

夏侯淵ダラスは血を引く。

「しかし、手加減はしてるかもな。いくら恋姫でも火を吐いたり、雷を出したりはできん」

恋姫である厳顔は答える。

「確かにうちの曹操は炎が使えるからな」

「いやいや、春蘭はバカだから炎だって平気だ！ しかし、うちの曹操だって負けないことを考慮に入れて……ボコボコにはならんが勝ってない。しかし、何度も立ち向かう！ 俺としてはどちらも応

援したい」

夏侯惇ギロスは力説し、心情を語った。

「なかなか興味深い話じゃな。次の質問はワシが読み上げよう」
敵顔は質問表を読み上げる。

「ペンネーム【百鬼丸】殿からの質問じゃ。

劉備ガンダムと関羽ガンダムと張飛ガンダムと桃香と愛紗と鈴々の、
6兄妹がポーカーで勝負したら勝つのは誰ですか？

ポーカーとはなんじゃ？」

「賭け事の種類らしい」

「賭け事ならワシがやりたいの」

「俺も俺も」

「質問に答えぬか。質問の答えは……作者はポーカーのルールは知らんが、恐らく欲の無さそうな桃香か劉備ガンダムが勝てそうな気がする。以上」

「悪い悪い」と言つて、次の質問表を夏侯惇ギロスが読み上げる。
「ペンネーム【kkk】殿からの質問が3つ。？ 春蘭は眼帯をつける予定はありますか？

？ 桃香は料理を作れますか？

？ 前回の質問に答えた劉備ガンダムはどうなりましたか？

？ の答えはアニメに従つて、付ける予定は無し。

？ 食べるのは得意だが、料理は苦手。

？ 地獄耳を持つ黄忠（紫苑）に矢をたつぷり射ぬかれている。（笑）

「

（笑）って……」

夏侯淵ダラスは血を引く。

？ で大爆笑しながら敵顔は次の質問表を読み上げる。

「ペンネーム【ザコソルジャー】殿からの質問じゃ。

1・ 趙雲ガンダムは本編じゃなくても出てきて、華蝶仮面V2になるゾコ

2・ 三璃紗の劉備ガンダム、張飛ガンダム、関羽ガンダム、曹操

ガンダム、孫権ガンダムの歳いくつザコ？

「

「1は……華蝶仮面の存在を知らぬからならん。

2は……恐らく二十代だろう。関羽ガンダムはそれ以上かもな」

「いやいや意外に若いかもしれん。ワシなんてこれでも……二十代じゃ」

夏侯惇ギロスと夏侯淵ダラスは敵顔の発言を疑う。

「なんか文句あるか？」

「つ、次の質問を読み上げよう！」

夏侯淵ダラスは慌て次の質問表を読み上げる。

「ペンネーム【脇役】殿からの質問。

もしも、三璃紗の劉備ガンダム達が人間になったらどうする？
どうする？」

「恐らく……今の面白さが無くなるではないか。この小説の売りは恋姫と三国伝のクロスがだから」

「なるほど」と夏侯淵ダラスと敵顔は納得する。

「ペンネーム【部長っぽい人】殿から質問。

徐晃サーペントは恋姫世界にやってきましたか？」

「誰じゃ、それ？」

「うちの武将の一人だ」

「出るのか、作者？」

それは……秘密です。

（秘密ということは、出るのか）と考える夏侯淵ダラス。

「さて、最後はワシが読み上げよう」

最後の質問表を敵顔が読み上げる。

「ペンネーム【呂布隊】殿からの質問

呂布將軍には新必殺技『暴風激烈斬』はありますか？ あとも一つ、制裁覚悟でお聞きます。呂布將軍の年齢は人間で言うとお幾つですか？ 三璃紗から来た人の中で最年長者であり、私の推測では（35歳）三〇代半ばぐらいに見え、紫苑より年上だと思います、

「どうでしょうか？　呂布隊殿、複数の質問を一つにしないで、ちゃんと分けなければならん」

「では、本人に聞こう」

「もちろん、習得している！ 歳など考えてはおらんが、あのおばさんよりは若い！」

「むっ、負けるか！ 魂iiiiiiiiiiiiiiiiiiii！！！」

「あの矢の雨は……」

「しかし、凄いな」

「何はともあれ、質問は全部読み上げたな」

「武器の自慢じゃ！」

「どうじゃ、新しく買ったこの武器は？」

夏侯惇ギロスは自分の武器である蛇骨剛剣を見せる。

「こっちの武器だって、負けてはいないぞ」

「おおつ、その武器を教えてください」

「お願い致します」

終
わ
り

特別第五席 夏侯兄弟、敵顔と意気投合すること（後書き）

《追加の注意》

質問は一つにしないで、分けてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5075m/>

真・恋姫†無双～四神姫ガンダム共闘編～

2011年11月17日11時16分発行